飛猫
秋華

# プロローグ

　宇宙には、無限の命があり、その中のほんの些細な時間に、人生が存在する。
　ときには植物として、時には動物として、そしてときには人間として。
　それぞれの命がおくる人生は、それぞれの世界を有している。
　たとえば地球にある全ての命は、同じ時間軸の中で、それぞれの世界で、それぞれの人生をおくっているというわけだ。
　地球という世界は、命の数だけ、同じ時間に存在している。
　そしてそれぞれの世界は、それぞれの世界に微妙に干渉しあっている。
　あなたが今すごしている世界は、あなたを中心に動いていて、となりには別の人が中心の世界がある。
　そのとなりの世界で、その世界に住むあなたに、何かが干渉してきた時、それは力となって、あなたの世界のあなたに影響する。
　となりの世界で、あなたを殺そういう動きがあれば、あなたの世界のあなたもまた、死へと向かおうとするのだ。
　それぞれの世界は、中心となる命の望む世界へと動こうとする。
　たとえて言えば、「この世界は素晴らしい」と思う人の世界は、素晴らしい世界であろうとする。
「駄目な世界だ」と思う人の世界は、駄目な世界へと力が働く。
　それは、全ての人が「この世界は素晴らしい」と思えば、全ての人の世界が、素晴らしい世界へと向かうのだ。
　故に、今の地球の姿というのは、より多くの人が望み、考え、創造した世界であると言える。
　偏差値で言えば、５０の世界。
　時間軸の中で、その辺りを生きる人は数が多く、０や１００といったところには、ほとんど世界が存在しない。
　だけど、決して存在しないわけではない。
　常識にとらわれず、固定観念を持たない者が、その辺りの世界を造っていた。
　当然中心付近の偏差値５０あたりには、頭の固い人や夢の無い人、知性や感情を持たない植物の世界が無限に近い数だけある。
　これだけの説明で、分かる人には分かるかと思うが、中心である偏差値５０辺りの世界では、不思議な事は何一つ起こらない。
　全て説明のつく範囲で、時間は流れて行く。
　しかし、偏差値０や１００の世界では、日々不思議な事が起ころうとする。
　ただ、数が少ないので、時間軸の全ての世界に影響を及ぼす大きな力となる事はほとんどなく、結局全ての世界で、不思議な事はそうそう起こる事はない。
　それでも時々、強い想いや希望からくる創造は、全ての世界に影響し、いつのまにか世界の常識となってゆくわけだ。

天動説が、地動説に変わったように。
目に見えないものの存在を認識できたように。
あなたが昨日別れた友達、今後もし、全く連絡もとらず、会う事もなく、情報を聞いたり、関わる事もなくなった場合、その人がその後どういう人生を送っても、あなたの世界に影響はない。
最近、孤独死という言葉をよく耳にするが、そういう死者が増えたのは、まさしくそれが原因だ。
孤独死をする人というのは、人とのかかわりが無くなり、生きていても死んでいても、どの世界にも影響しなくなった人。
誰にも必要とされなくなった人。
そういう人が、死へと向かう僅かな力で、死んでいったもの。
そして、孤独死以外にも、そういった理由で死んでいく人は多い。
今日死んだこの人もまた、多くの関わりを失い、わずかなきっかけで、死んでしまった一人だった。
死因は、車にはねられた事による内蔵破裂と出血多量ではあるが、本当の原因は、全ての人の世界に、存在していないも同然になったからだった。
もし、一人でもこの人の事を大切に思い、必要とし、関わりを持とうとする人がいたら、きっとこの人は、今ここで死ぬことは無かっただろう・・・

# 出会い

　この話の主人公である高校生「山下豊」は、今日もただただ普通の一日をおくるはずだった。
　普通の一日とは、朝起きて、高校に行って、帰ってきて勉強をする、全くもって普通にしたくない一日だ。
　豊は、特に夢見る少年でもなく、希望も何もない。
　現実的過ぎる男と言えるだろう。
　まっ、それがこの少年の運命を大きく変える事になるわけだが、それは読み進めていってもらえればそのうち分かる事なので、此処ではこれ以上それにはふれない。

　ごく普通の高校２年生、山下豊は、今日もいつもと同じように、学校へと向かっていた。
　体調も景色も、いつもと何も変わらない。
　違う事と言えば、昨日よりも少し気温が高くなっている事くらいか。
　衣替えの季節はまだ先だけれど、今日は少し暑く感じているようだ。
「ちょっと暑い・・・」
　豊はシャツの胸の辺りをつかんで、前後にあおいだ。
　女性ではないので、こんなしぐさをされたところで、全く何も感じない。
　私がこんなしぐさを一々説明する必要もないと思うが、最初だから描写にも少しだけ力を入れているだけだ。
　豊は肩からかけていた鞄を一旦手にもつと、制服のジャケットを脱いだ。
　これも女性ではないから、思うところは何もない。
　鞄を再び肩にかけ直すと、その鞄を覆うように、ジャケットを鞄にかける。
　少し風が吹いた。
「気持ちいい～」
　今まで暑かったから、少し涼しい空気の流れは気持ちが良いみたいだ。
　豊は笑顔で、再び学校への道を歩きだした。
　通学には、家から駅まで約５分、そして電車で２０分、降りてから学校までが１５分の合計４０分だ。
　往復だと一日１時間２０分で、豊にとってはこの時間が、一日の中で、唯一気を抜く事ができる時間だった。
　それ以外は、朝から晩まで勉強勉強、気を抜けない。
　なんて悲しい青春時代なのかと思わなくもないが、豊自身がそうしようとしているわけだから、私にはなんとも言えない。
　豊は一応の目標があった。
　夢と言うには現実的過ぎるし、希望と言うには些細すぎる、小さな目標。
　とりあえず大学に行って、それなりの企業に就職する。

　そして、貧乏でもそれなりに笑顔のある家庭を築いて、８０歳くらいで老衰死する事。
　その、なんとも微妙な目標の為に生きている豊にとっては、登下校の時間だけが、生きている感じのする時間だった。
　学校は結構田舎にある。
　だから景色を眺めるのも、豊の楽しみであった。
　昨日今日では、特に変わりはないけれど、自然は少しの変化も豊に喜びを与えていた。
　昨日は太陽が少し雲で隠されていたけれど、今日は雲が見あたらない。
　とか、風も、昨日よりは緑の香りがする、気がする。
　とか、その分甘い香りはおさえられているかな。
　とか、そんな事を考えながら風を追いかけて空を見上げると、空は昨日よりも高く感じられた。
　その高く感じた空を見上げていたら、目の前に、何か黒い物体を捕らえた。
「え？空に何かがいる？そんなわけないか。」
　豊は少し興味をそそられたが、どうせ鳥か飛行機か、別に大したものではないと思ったようだ。
　だがどういうわけか、豊はなんとなくその空にあるものを見続けていた。
　するとそれは、だんだんと大きく見えるようになり、その形が豊の目にもわかるくらいまでになってきた。
「猫？」
　豊から見たその物体は、猫のようだ。
　しかし猫だとは言えない。
　なんせ空を飛んでいるのだから。
　背中には、羽のようなものが見える。
　明らかに猫ではない。
「鳥だな。鳥。僕の知らない鳥だ。」
　流石に頭の固い豊だ。
　どう見ても猫に羽が生えているとしか思えない生き物を、鳥だと思いこんだ。
　でもなんだろうか、一応写真を撮って、後で調べようとでも思ったのか
「携帯！この世に不思議な物はない。調べりゃわかるって話。」
　胸の内ポケットに入れていた携帯電話を探しているようだ。
　しかし胸に内ポケットがない。
　それはそうだ。
　さきほど内ポケットのあるジャケットは脱いでいたのだから。
　豊は慌てて、鞄にかけてあるジャケットの内ポケットを探す。
　慌てているとなかなかうまく見つからない。
　よくあるよね、こんな事。
　豊は尚も慌てていたが、ようやく内ポケットを見つけた。

　手をつっこんで、携帯電話を取り出す。
　素早く折り畳まれている携帯電話を開くと、空飛ぶ猫のような鳥へとカメラレンズを向けた。
「あれ？」
　空を見上げた時、既にそこには空飛ぶ猫のような鳥は、姿を消していた。
「あーあ・・・でもま、鳥以外にあり得ないし、いっか。」
　こんな時の為に、携帯電話にカメラ機能がついているのに、シャッターチャンスを逃してしまっては意味がないなんて豊は思ったが、もう既にどうでもよくなっていた。
　なんとなく見た携帯電話のデータエリアには、テスト撮影した自室の写真が２枚あるだけだった。
　豊は携帯電話をたたむと、手に持ったまま、再び学校への道を歩き始めた。
「ニャー！」
　ふいに後ろから、猫の鳴き声のようなものが聞こえた。
「え？マジで？さっきのはやっぱり猫だったの？」なんて事は一切思わない。
　普通に「猫かな？」と思って、豊は歩みを止めて振り返った。
　そこにいたのは、さきほどの猫のような鳥にそっくりではあるけれど、羽の無い普通の三毛猫だった。
「羽、ねぇよな。当然だな。」
「にゃー」
　しばらく豊はその猫を見ていた。
　人を怖がっている様子がないから、もしかしたら飼い猫なのか、それとも野良《ノラ》だけど人にかわいがられているのか、豊はそんな事を考えていた。
　あまりにカワイイ顔をした猫だったので、豊は手にあった携帯電話で、無意識のうちに写真に撮っていた。
　すると驚いたのか、猫はシャッターの音がすると同時に、近くの草むらに逃げ込んだ。
「あっ！・・・って、やべぇ！」
　豊は少し脅かしてしまった事を悪く思ったが、そろそろ遅刻しそうな時間である事に気がつき、すぐに猫の事は忘れて、慌てて携帯電話をズボンのポケットに突っ込んで、学校へむけて走り出した。
　豊は結局、学校には遅刻してしまった。
　といっても、朝のホームルーム中に教室に入ったので、勉強には影響が無かった。
　担任の先生に、少し嫌みを言われたくらいで済んだ。
　朝のホームルームが終わり、１時間目の授業までの間、いつもなら予習する時間にあてるのだけれど、豊はポケットに突っ込んだ携帯電話の写真が、少し気になった。
　何故かさっきの猫の事が、頭からはなれなかったからだ。
　豊は携帯電話を取り出して開いてみた。
「えっ！？」
　豊は、携帯電話のディスプレイを見て、驚いた。

それと同時に、ディスプレイから目が離せなかった。
豊の様子に関心を向けるクラスメイトもいたけれど、このクラスには、豊と仲が良い友達はいなかったので、特に話しかける人はいなかった。
クラス替えをして間もない事が、豊には幸いした。
なんせ、何故驚いたかを聞かれたら、携帯電話のディスプレイに映るものを見られたら、豊には困る事態が起こっていたから。
先ほど猫を撮ったはずの写真。
そこにあったのは、カワイイ女の子の姿だった。
それも裸で・・・
何が起こったか一瞬理解できない。
人は考える時、右上だか左上を見ると言われているが、豊の視線の先は当然携帯のディスプレイだ。
邪念を払い、必死に考える豊。
友達がネットで見つけた画像を送ってきていて、それを誤って開いてしまったのかとか、携帯電話がウイルスに侵されたのかとか、色々考えた。
しかし、携帯電話の表示は、明らかに先ほど撮った写真であって、そのおかしな出来事を、豊は事実として昇華できずにいた。
豊は、とにかく常識人である。
幽霊や超常現象、ＵＭＡやＵＦＯなど、全く信じていない。
この世で説明のつかないものは、全て否定する人間だ。
だが事実として、そこにおかしな写真がある。
豊は、その裸の女の子が可愛かった事もあり、授業が始まるまで、その写真を見続ける事しかできなかった。
山下豊の携帯電話に、裸の可愛い女の子の写真がぁ！なんて事が起こったわけだが、昼休みを迎える頃には、すっかりそんな事は忘れている豊であった。
昼休みは、多少気を抜く事ができる時間で、食堂で別クラスの友達と話をしていた。
前に「気を抜く時間が無い」とか、嘘を言ってすみません。
会話は、いつもと変わらない、なんの生産性もない、ごく普通の話。
「政治家があれじゃ、経済は良くならないよ。」
「いや、国もそうだが、企業に夢がないんだよ。もっと夢のある商品が必要だ。」
すみません、また嘘を言ってしまいました。
全く高校生が普通に話すような会話ではありませんでした。
とにかく、昼休みには既に、豊かにとってごく当たり前の、普通の日へと戻っていた。
そして気がつけば放課後、豊は帰宅準備をして、一人家路に向かう。
別に端折って適当に伝えているわけではない。
本当に、特に話す事が何もなかった。
帰り道、朝にあの猫のような鳥と、猫に出会った場所に来ていた。

流石に不思議な事を信じない豊でも、朝の出来事を思い出さずにはいられなかった。
豊は立ち止った。
草むらの方を見る。
特に何かがあるわけでもない。
空も見上げてみた。
そこには飛行機も、鳥も、そしてもちろん猫もいなかった。
「ふっ」
これが当然だと言わんばかりに、豊はどや顔で、再び家路に向かって歩きだした。
「ニャー！」
すると朝と同じように、後ろから猫の鳴き声がした。
これが当然だと言わんばかりの顔をしていた豊だったが、やっぱり何処か期待していたのかもしれない。
豊は凄い勢いで後ろを振り返った。
その勢いは、あのゴルゴさん家の１３さんが「俺の後ろに立つんじゃねぇ！」と言わんばかりのものだった。
ベタな展開だと、そんな勢いで振り返ったら「可愛い女の子とキス！」なんて展開になるわけだが、そんな事を夢にも見ない豊の世界で、そんな事が起こるはずもない。
この世の中、ちゃんと落ち着いて考えれば、全て想定できる事で成り立っているのだから。
少なくとも豊がそう思っている以上、そんな事が起こる事は、豊の人生ではあり得なかった。
振り返るとそこには、朝に見た猫がいた。
豊がなんとなく手を差し出すと、ちょこちょこと歩いて寄ってきた。
豊の右手をペロペロなめる猫。
その猫の背中を、左手でなでながら、羽が生えるような余地があるのか見てみる。
当然、そんな形跡は無かった。
やっぱりそんなわけないよな、みたいな顔をして、豊は少し安心したようだ。
豊自身、想定外の事が起こる事に、何か漠然と不安を持っているのかもしれない。
不安が、夢や希望を失う原因なのかもしれない。
とにかく豊は、目の前の猫が普通の三毛猫だった事に安心して、普通に猫を可愛がり始めた。
此処で言う「可愛がる」は、もちろんいじめる事ではないと、一応言っておく。
豊は、携帯電話を取り出した。
また写真に撮りたくなったのだ。
別に、朝の写真の事が頭にあって、やましい気持ちとか、もしかしたらとか思ったわけではない。
ただ普通に、写真に撮りたいと思った。
カメラレンズを猫に向けて、豊は携帯電話のディスプレイを見た。
可愛い猫が映っていた。
「おまえ、可愛いな。」

豊が発した言葉は、正に本人の素直な気持ちだった。
ま、可愛い猫を見て「可愛い」と言う事くらい、世間一般世界の常識、当然の発言だ。
だが、この猫にとっては、それはある意味、魔法の呪文であった。
ディスプレイに映る猫の姿かぼやけたかと思ったら、次の瞬間には、可愛い女の子がそこに映されていた。
驚いて携帯電話を横にそらして猫を見ると、そこには確かに猫がいた。
再び携帯電話をとおして見ると、女の子が映る。
「なんで？女の子なの？」
豊の発した一言が、再び力となった。
次の瞬間、ディスプレイに映る女の子が、正にそこにいた。
豊はうろたえた。
理由は、猫が人間になったって事ももちろんあるが、やっぱり裸だった事が、豊かに大きなショックを与えた。
いや、その表現は正確ではない。
猫が人間になったショックを、忘れてしまうくらいの刺激が豊を襲った。
１０秒ほどうろたえていた豊だったが、ようやくセオリーを思い出し、ジャケットを脱いで、そこにいる女の子にかけた。
だからと言って、女の子はそれで、ナニやナニを隠す事はしない。
豊は、持っている勇気を総動員して、ジャケットで前を隠すように引っ張った。
するとようやく分かったのか、女の子はジャケットの中に丸まった。
（猫みたいだ。いや、猫だったんだけど。えっマジで？）
豊はそんな事を考えて、再びパニックになりかけた。
想定外な不思議な事に、豊は耐性がないのだ。
だけど、そこにいる女の子があまりにも可愛くて、豊の思考は、再び断絶された。
ふと、鞄に体操服が入れてあるのを思い出した。
豊は慌てて鞄の中からそれを取り出す。
そして、その可愛い子に着るように促した。
体育の授業は、１週間に４回あるから、こういう展開になる確率は４／６、豊の世界では十分にあり得る事だが、私は「少し都合が良すぎるだろう」と言っておく。
豊は必死に女の子の裸を見ないように、でもチラチラと見ながら、なんとか女の子に体操服を着せる事に成功した。
さて、体操服を着てもらったは良いが、此処からどうすればいいか豊は悩んだ。
（猫ならつれて帰っても問題ないよな？いや、女の子だからまずいだろ。つか猫なら電車に乗せられないよ。待て、女の子じゃないか。）
本来の豊なら、まずは警察につれていくなり、話をするなり考える事ができたであろう。
しかし、猫から発せられる「力」が、それを阻んでいる事は、この時の豊には分かるはずも無かった。

「しまったぁー！なに僕はこの子を連れ帰ってるんだぁー！！」
　豊は結局、無事に猫の子を自宅に連れ帰る事に成功していた。
　いや、そう思うのは私だけだったようで、このミッションは豊にとって本意ではなかったようだ。
　夢中になっていて、肝心な部分を見落としていた。
　そんなに都合の良い話などないだろうと思うが、まっ、その理由は、この後きっと理解する事ができるだろう。
　豊は、猫の子の手をつかむと、警察につれて行こうと引っ張った。
「警察に行こう。」
　既に豊の頭の中では、猫が人になった事実を、トリックかなにかだと思いこんだようで、目の前の女の子を可哀相な子だと決めつけていた。
　猫の子は、その豊の行動に抵抗した。
　つかまれた腕が痛いのか、少し泣きそうな顔をしている。
　この場面を見たら、誰もが豊を悪人だと思うだろう。
　豊もそれに気がついたのか、つかんでいた手を放した。
　全く、こんなにおいしい話の展開なのに、豊とはつくづく可哀相な奴だ。
　私だったらとりあえず、ここに居たいのだと判断して、心ゆくまでいてもらうぞコノヤロー。
　なのに豊の口から発せられた言葉は、信じられないものだった。
「警察に電話するよ。」
　本当に、豊の頭の中はどうなっているのか。
　自分がつれこんでおきながら、そんな事を言う？
　だが、此処でようやく、この話の流れに大きな変化をもたらす出来事が起こった。
「ニャー！」
　鳴いた。
　猫の子が鳴いた！！
　おめでとう。
　いや、そうじゃなかった。
　一瞬、豊かには何が起こったのか、頭の中を整理するには、しばしの時間が必要だった。
　何故なら豊かにとって、目の前の女の子と猫を繋ぐものは、既に頭に無かったからだ。
　そして再び、猫が可愛い女の子になったって事が、リアルな記憶として蘇ってきた。
　それでも、豊かにはそう簡単に受け入れられる事実ではない。
　ハッキリ言って、じれったくて面倒くさくでウザったい話の流れだが、これが豊の世界では当然の話。
　その理由もまた、読み進めて行けばそのうち分かると思うので、此処では割愛する。
　豊は必死に受け入れようとしたのかもしれない。

豊は頑張って理解しようとしたのだろう。
それでようやく頭の中を整理して出てきた結論が「猫なの？」と、目の前の可愛い女の子に聞く事だった。
本当なら、人間に「猫なの？」って聞くのはあまりにおかしいし、猫ならそうだとは答えられない。
そう、この場合は「違うよ！」って返事が返ってくるのが当然だ。
それが豊のグローバルスタンダード。
と言うか、多くの人にとって、それは当り前の事だ。
でも、その女の子から返ってきた返事は、色々と常識の範囲外、想定外、規格外だった。
「そうだよ！」
肯定した。
猫だと認めた。
という事は、猫が喋った？
あり得ない。
豊の頭のスーパーコンピュータは、今度は簡単に結論を出した。
「嘘」であると。
それは同時に、猫が人間になったのを目撃してしまった事をも否定し、猫が人間になる事を否定する行為であった。
その判断は、決して間違ってはいない。
そんな事は、この世界であるはずも無いのだから。
その否定する気持ちが、また目の前で不思議な事が起こる力となってしまった。
正確には、今までかろうじて人間の姿でいた力を、失わせる事になった。
目の前の可愛い女の子は、見る間に猫の姿へと形を変えた。
着せていた体操服の隙間から、猫の顔がちょこんと出ている。
その顔は、帰りに見た三毛猫と同一だ。
そしてその表情は、少し悲しそうだった。
流石に豊も、これだけ何度も変化する姿と、悲しい顔を見せられては、多少受け入れざるを得なくなっていた。
「人間になる事ができる猫って・・・」
その言葉に、再び猫は可愛い女の子へと変化した。
もちろん、その際に体操服を巧く着られるわけもなく、色々なところがあらわになっている事は、当然お伝えしておかねばなるまい。
「あ・・・服着て服！！」
豊は再び、目をそらしながら、体操服をその子に、期せずして着せる事となった。
もちろんチラチラ見ていた事は、当然お伝えしておかなければなるまい。
なんとか着せる事に成功した豊は、とりあえず息が荒かった。
どうやらドキドキ緊張しすぎて、息をする事も忘れていたようだ。

猫の女の子は、それをキョトンとした顔で見ていた。
とっても可愛い萌え顔だ。
豊はその顔をみて、再び息をするのも忘れてしまうくらいフリーズした。
そして私もフリーズした。
おっと、危ない危ない。
可愛い女の子は核兵器にも勝ると言うが、この物語をお伝えしている私をも凍結させてしまうのか。
私が我にかえってから間もなく、豊もようやく落ち着いてきたようだ。
ずっと受け入れられなかった事実を、ようやく受け入れ始めていた。
豊は一つ深呼吸をして、女の子に話しかけた。
「もう一度聞くけど、君は猫なんだよね？」
くどいと思わないでいただきたい。
豊には、やはり聞かなければならない事なのだから。
すると女の子はやはり「そうだよ！」と答えた。
それを聞いた豊は納得して、いや、納得する事にして再び質問をした。
「じゃあ、人間じゃないんだよね？」
豊の質問に、女の子は首を振った。
「えー？じゃあ、人間なの？」
人間じゃなくはないのだから、それは人間なのだけれど、先ほど猫だと言っていたのに、どういう事だろうか。
豊は再び頭が混乱してきた。
でもその答えは、簡単に女の子の口から発せられた。
「猫だけど、人間になれたのさ。」
うんうん、納得納得。
要するに、この話のヒロインらしき女の子は、猫だけど人間になった女の子だったんだね。
と、私なら納得だけど、いや、ずっと前からそう思っているわけだけど、豊には簡単に受け入れられる事ではない。
でも、此処までの事実が、なんとか豊かに不思議な事態を現実として昇華させていた。
長い長い道のりであったが、ようやく豊は、女の子から話を聞くという選択肢に至った。
この世界で、裸の女の子が道の真ん中にいれば、まずは着る物をなんとした後、話を聞くってのが普通だろう。
そして正に普通の中の普通である豊が、その行動に及ぶ事がなかったのは、全てはこの女の子の「思いの力」によるものだった。
「えっと・・・お名前は？あ、僕は山下豊です。」
おいおい、合コンしてるわけじゃないんだから、普通に話そうよ普通に。
でも気持ちは分かる。
それくらい可愛い女の子なのだ。

　言葉だけでは表現できなくて、本当に申し訳ない。
　ただ、あえてどんな可愛さか言ってくれというなら「あなたがもっとも可愛いと思う女の子と同じくらい可愛い」である。
　その可愛い子がこたえた。
「ネコなのさ。」
　猫だから、そらネコだよね。
「って、そうじゃなくてさ。呼ばれている名前って言うか。そう、たとえば飼い主にどう呼ばれていたの？！」
　豊の言葉に、女の子は少し考えて、少し寂しそうな顔をしてから「ミケネコ？飼い主じゃないけど・・・」とこたえた。
　寂しそうな顔に、なんとも気まずい雰囲気になった。
「それも名前じゃない！」なんてツッコミは、もう不可能だった。
　豊は諦めて「ミケネコさんは、どうしてあんなところで、その・・・裸で・・・ん～いたの？」と聞いた。
　これは、裸でいた理由を既にわかってはいたが、それを受け入れたくない気持ちが作用しての聞き方だ。
　人間の服を着ている猫なんていないからね。
　ミケネコはしばらく寂しさから解放されずに黙っていたが、豊の質問を聞いて少ししてからこたえた。
「別の世界から飛んできたら空だったのさ。死ぬかと思ったさ。」
　ミケネコの返事は、豊の質問に正確にこたえられたものではなかった。
　だがしかし、この言葉には、朝の出来事を全て含めて、一本に繋げるには十分な言葉であった。
　そして、聞き流せない言葉も含まれていた。
「別の世界から飛んできた？」
　まあもっともな疑問である。
　豊の常識の範囲内で考えれば、別の世界というのは、外国ってのがまず思いつくところだろう。
　そこから飛んできたってなら飛行機だが、猫が飛行機に乗ってきて、死ぬかと思ったとかこたえるのはどうも不自然だ。
　それに朝、羽の生えた猫のような鳥を目撃している。
　あれがもしミケネコだったら、外国から羽を使って飛んできたって事だが、それだと死ぬかと思ったってのがやはりおかしい。
　豊の質問に、ミケネコはようやく核心に触れる発言をした。

「私、別の世界線の未来から来たのさ。豊に会う為に。」
　豊は、一瞬意味が分からなかった。

いや、言っている事は理解できる。
でも、そんな非常識な事が実際にあるなんて、やはり豊には納得できないし、事実としては理解できなかった。
私だったら、きっと猫人間がいる時点で、羽をはやして空を飛んでる時点で、それくらいあっても不思議ではないと思えるだろう。
それができない豊だからこそ、この話の主人公になり得たわけだが。
豊は、必死に頭の整理をしていた。
ミケネコの言っている事を、そのまま理解すればこうだ。
ミケネコは、別の世界線の未来から、この世界へと飛んできた。
そしたら空の上だったので死ぬかと思った。
後は豊の見た事実と合わせると、羽が生えて飛べたので、無事地上に到達した。
豊の帰る道すがら、再び出会い人間になるが、元は猫なので裸だった。
なんやかんやと無理やり家にお持ち帰りした。
というわけだ。
おっと、一つ重要な発言をスルーしていた。
「豊に会う為に来た」って事だ。
豊はそこに何かがあるような気がしたのか、それとも偶々そこだけ腑に落ちなかったのか、再び質問をした。
「俺に会いにって、どうして？」
この質問にこたえるには、どうやら一言では語れなかったようで、此処からミケネコは長々と語り始めた。
「よくわからないんだけど、私の居た世界は、私の世界、私の世界線なんだってさ。」
確かによくわからない。
だから黙って、豊は話を聞き続ける。
「時間軸の中には、沢山の世界線が存在するんだって。」
豊も、それくらいは聞いた事がある。
それぞれの世界線には、それぞれの自分がいて、要するにパラレルワールド。
世界線は色々なところで分岐し、また合流する事もあるとか。
たとえば明日、豊が学校に遅刻したとしよう。
本来豊は、明日遅刻しなかったとして、ここで、遅刻した世界と、遅刻しなかった世界が、それぞれに存在するという考え方。
世界線の分岐だ。
しかし、遅刻してもしなくても、その後の豊に全く何も変わりがなければ、世界線は再び合流する事もある。
でも、この後のミケネコの発言は、その考えを少し否定するものだった。
「時間軸の中の世界線は、全て平行に、命の数だけ存在するんだってさ。」
豊は、そういった話は聞いた事が無かったが、理屈としてはある意味わかりやすいかもしれな

いと思った。
「時間軸をロープに、世界線をロープを作る一つ一つの紐に例えるらしいんだけど、その紐は、中心部は密度が濃くて、外に行くほど数が少ないんだってさ。」
　そんな話は聞いた事が無いし、少し分かりにくい。
　だからか、ミケネコも言いなおした。
「そのロープを切った断面図は、銀河系のようになってるんだってさ。宇宙の真理は万国共通とか言っていたのさ。」
　言いなおして、余計に意味が分からなくなったが、要するに、中心付近は密度が濃く無限に近くて、外は密度が薄いって事だと、豊は理解した。
　だがそんな事を言われても、豊かに会いに来た理由には、どう考えても繋がらない。
　だから豊には、ミケネコの言う事を聞き続けるしかなかった。
「私は、その銀河系みたいな時間軸の、一番外の世界線から来たのさ。この、豊の世界である、丁度中心の世界線に。」
　（要するに、この中心には何かがあると。でも、僕の世界ってのはどういう事だろうか？命の数だけ世界線があるという事は、それぞれの命に、それぞれの世界線が割り当てられているって事だろうか？）
　そう豊は考えていた。
　この話が本当なら、豊はある意味、世界の中心に住む、世界の中心人物って事だ。
　だからと言って、これで会いに来た理由が全て明かされたわけではない。
　中心の人物に会いに来なければならなかった理由こそが、豊に会いに来た理由だという事だ。
　豊が頭の整理をつけたところで、ミケネコは再び話し始めた。
「全ての世界線は、近い距離ほどお互いに干渉し合い、離れた世界ほど干渉しないんだってさ。だから、外の方の世界で起きた事が、内側の世界に影響を与える事はほとんどないって。」
　豊にも、なんとなく話が見えてきた。
　要するに、数の多い内側の世界で起こった事の方が、より多くの世界に干渉でき、更には全ての世界への干渉が可能と言う事。
「つまり、ミケネコの世界を、この世界で何かする事で変えたいって事か。」
　豊には信じられない話ではあるが、それなりに頭が良いので、理屈を理解するだけなら容易かった。
「うん。でも、この世界は豊の世界だから、豊が何かしないと変わらないのさ。豊が信じてくれないと変えられないのさ。この世界は、豊の世界なのさ。豊の思うがままなのさ。」
　豊には「思うがまま」というところが特に理解できなかった。
　何故なら、この世界が思いのままなら、豊が願えば、魔法使いにでもなれるって事だから。
　でもそんな事にはなり得ない。
　それでも、一応聞きたくなるのが人間だ。
　豊には珍しく、少し期待していた。
「僕が願えば、魔法使いにでもなれるのかな？」

　しかしその質問は、あっさりと否定された。
「よくわからないけど、中心付近はお互い干渉し合っていて、大きく変えるのは難しいんだって。だから、変えるのは些細な事から始めるしかないのさ。」
　少し残念な気持ちもわいたが、それが逆に、豊に「当然、不思議な事なんてそうそう起こらない。期待する方がバカだった」と、思い出させる事になった。
　でも些細な事なら変えられるってのは、豊にとって信じられる言葉だった。
　だけど此処で又疑問がわいた。
　些細な事を変えても、結局些細な事しか変えられない。
　それを積み上げて大きく変える為には、どれだけ些細な事を積み上げなければならないのだろうか。
　正直そんな事に付き合っている暇も無いし、到底できるものとも思えなかった。
「この世界で何か些細な事を変えても、それが全ての世界に影響を及ぼしたとしても、結局些細な事しか変えられないんじゃないの？」
　豊はこの話を信じたわけではない。
　でも、今の豊には、何故か真面目に話すだけの意味を感じていた。
「私を助けて死んでいった人、きっとその人に会ってくれるだけで、私の世界では死なずに済むだろうって言っていた。」
　誰が言っていたのか、どうしてそうなるのか、豊には全く分からなかったが、この時、この子の力になりたいと思っていた。
　何故なら、ミケネコが、凄く可愛い女の子が泣いていたから。
　豊とミケネコの話は、結局日付が変わるまで続いた。
　だからと言って、その長い時間の中で、親が帰ってきて「誰なのその子？！彼女？」なんて言われる事は無かった。
　豊は実は、都合よく独り暮らしだった。
　こういう話は、実にご都合主義だ。
　大概《タイガイ》、一人暮らしだったり、両親が共働きで外国に行っていたりする。
　この話も、その規定路線から外れる事はなかった。
　豊の家は、別に裕福ってわけではないが、それほどお金に困る家庭でもない。
　そこで豊は、高校生活を田舎でおくりたいと、両親にお願いした。
　理由は、遊び場がそこいらじゅうにある東京都心部より、田舎の学校で学ぶ方が、勉強に集中できると考えたからだ。
　両親も、勉強の為なら仕方がないと、豊の望みをかなえてくれた。
　まっ、そんなわけで、長々と話しこむ事ができたのだ。
　話の内容をまとめると以下のようになる。
　ミケネコは、時間軸の一番外側の世界線の中心人物だった。
　人ではなかったのでこの表現はおかしいが、全て人として話をさせていただく事にする。
　その世界は、他の世界線からの干渉がほとんどなく、中心人物が願えば、そして信じれば、現

実となりやすい世界。
　ミケネコは元々は猫だが、いつか人間になれると信じていた。
　そんなある日、道路に飛びだしたところに、自動車が走ってきた。
　ミケネコは願った。
「助けて」と。
　そこに現れたのが、一人の男性だった。
　その男性はミケネコを抱え、そのまま自動車にはねられた。
　内臓は破裂し、血が沢山でた。
「ミケネコ・・・大丈夫か？」
　そういう男性の、ミケネコを見る目は穏やかだった。
　そして間もなく、死んだ。
　ミケネコは悲しんだ。
　私を助けて死んでいくなんて。
　この人を助けられないだろうか？
　どうしたらいいだろう？
　早く人間になれば、助けられるかも知れない。
　きっとそうだ。
　人間は賢い。
　きっと助けられる。
　そう思った時、ミケネコは人間になった。
　とっても賢い、この男性を助けられる人間になった。
　ただし、賢いってのは、ミケネコ基準だ。
　本当は、男性を助ける事のできる能力を得たにすぎず、ただのバカな人間なのだが、ミケネコは理解していない。
　ミケネコは、人間になった時に得た、本能とも言えるその能力で、過去へ、そして時間軸の中心へ向けて、世界線を飛んだ。
　最初の飛躍で、時は少し、世界線の移動は、中心方向へ半分ほども移動していた。
　その世界の中心人物であろう人に、ミケネコは出会った。
　どうやらミケネコの能力は、人間になれる事、時間と世界線の移動ができる事、そしてその移動の際、最初にその世界線の中心人物に会える能力であった。
　最初に移動した世界線の住人は、どういうわけか、人間になったミケネコにそっくり、いや、完全に同一と言っていい容姿をしていた。
　ただ、その存在はとても希薄で、今にも消えそうだった。
　その人は、ミケネコが此処にくる事を、予知していたと言う。
「あなたが此処に来る事は分かっていました。そして、私はあなたに伝えなければならない事があります。」
　そう言って、ミケネコはその人に、色々と教えてもらう事になった。

ミケネコが今後、やらなければならない事を。
時間軸の中心の世界線へ行って、その世界の中心人物に会って何かしてもらう事は、本能によって既に認知されていた。
ここまでは、ミケネコが男性を救える能力を得る思いの、範囲内という事のようだ。
でも、何をしてもらえばいいのかは、分かっていなかった。
それを、この人が教えてくれた。
その中心人物と共に、助けてくれた男性を探しだし、会う事。
後は、信じる気持が強ければ、それは叶えられると。
ただし、もし信じる気持が足りなければ、世界線の移動で迷子になる可能性もあるし、何処かで死ぬ事もあるし、豊が協力してくれない事もある。
会うだけで救える理由、それは単純だ。
全ての世界で死ぬ人というのは、どこの世界でも中心人物に必要とされなくなった人、中心人物に影響を与える事がなくなった人である場合が多い。
この男性もまた、そういう人だったそうだ。
だから、その世界の中心人物が会うだけでも、中心人物に影響を与えた事になる。
それで、男性が死ぬ事を良しとしない力が働く。
その会う人が、時間軸の中心世界の豊であれば、全ての世界線に大きな力をもって影響を及ぼす事ができる。
人が一人会うだけで、そんな些細な事だけで「人の命が助けられるのか？」とも思うだろうが、些細な事で人の命ってのは左右されるって事だ。
他にも、時間軸や世界線の事も詳しく教えてもらった。
そして一通り話を聞いた後、ミケネコはその世界の、自分にそっくりな人と別れ、再び時間を過去へと、世界線の移動を開始した。
時間軸の中心世界への移動は、いくつもの世界線を梯子《ハシゴ》していく。
最初は楽に移動できたが、徐々に移動は難しくなり、人間の姿を維持する力も薄れていった。
中心に向かうにつれ、そこの中心人物が、猫が人間になる事を信じない、すなわち猫が人間になる事を良しとしない力が強くなるからだ。
だけどなんとか、１年の期間を費やし、時をさかのぼり、時間軸の中心世界への到達に成功した。
だが、この世界に到着した時、空の真ん中だった。
真ん中の世界に行けば行くほど、別の世界線からの異分子に対して、拒絶する力が強まる。
それも中心人物が、異世界からの訪問者を信じなくなってくるからだ。
だから空の真ん中と言う、到底生きてはいられない空間に放り出された。
しかし、それを偶々豊が見た。
豊にとって、空に猫がいるはずがない。
豊は鳥だと思った。
そう思いこんだ。

ある意味そう願ったとも言える。
不思議は豊の望むものではなかったから。
それが逆に、羽を生やす力となった。
豊がミケネコを助ける事になったが、実はこれも、もしかしたらミケネコの願いの強さが起こしたものかもしれない。
ミケネコは、この世界へ出発する前、自分は必ず中心世界で中心人物にあって、必ずなんとかなると信じて疑わなかったから。
その力が、豊に豊とは思えない行動をさせ、豊に協力してもらえるよう全てを導いたと言える。
豊好みの凄く可愛い女の子の姿になったのも、きっとその力のおかげだろう。
ただし、此処までは願いどおりであったわけだが、此処から先は、会ってみるまで想像もできなかったわけで、どうなるかわからないって事だ。
目的は、ミケネコを助けた男性をこの世界線で探し出し、１年後ミケネコを助けるまでに、豊が会う事。
これでおそらく、この男性の命は救われる。
そう豊は理解した。
豊は、別に全ての話を信じたわけでは無かった。
ただ、そこにある現実を含め、とにかくミケネコが可愛かったから、とりあえず協力しようと思っただけ。
可愛い女の子は正義。
萌えは正義。
それは生きとし生ける物全てに共通する絶対的真理だ。
動物の赤ちゃんの多くが可愛いく感じられるのは、正にそういう事。
豊は柄にもなく、守ってあげなければならないと思ったのかもしれない。
とにかく、共に人探しをする為に、二人の同棲、いや同居、いや、ミケネコの居候する共同生活が始まった。

　豊はいつものように、７時に起きた。
　どうも目覚めが悪い。
　それはそうだ。
　硬いフローリングで寝ていたわけだから。
　まさかミケネコと一緒に寝るわけにもいかない。
　ベッドを見ると、ミケネコが気持ち良さそうに眠っている。
　豊は沸き立つエナジーを抑えつつ、ミケネコを眺めた。
　それはもうとても可愛い顔だ。
　いや、豊はそんな事を考えているわけではない。
　この子が本当に猫なのか、一夜明けるとやはり信じられなくなっていた。
　昨日の事が夢のように感じた。
　だいたいタイムトラベルだとか、世界線の移動だとか、あるはずもないと思った。
　豊は、目の前にミケネコがいるにも関わらず、昨日の事は夢だと否定した。
「夢だったんだよ。この子はきっと家出少女かなんかだよ。」
　豊がそう言葉にした途端、ミケネコは猫の姿へと戻った。
　と言うか、小さくなって布団の中におさまって見えなくなった。
「え！やっぱり猫が人間になったんだーー！！」
　豊は絶叫した。
　すると再び、ミケネコは人間の姿へと変化した。
　当然、着ていた体操服は、再び脱げた状態になっていた。
　豊にはもちろん、やましい気持ちがわき上がってきていたが、特に布団をめくったりする事はなく、夢ではなかった現実を受け入れる事で精いっぱいだった。
　さて、豊は朝からドタバタしていた。
　再び服を着てもらったり、朝から探しに行こうとせがまれたり、学校につれて行けと言われたり、学校の支度をしたりで大忙しだ。
　助かったのは、ミケネコに一応、服を着るという概念やトイレなど、人間として生きる知識が少なからずあった事だ。
　話によれば、世界線を移動していた１年間、人間としての生活を教えられたり、人間世界での生活を見てきていたようだ。
　世界線の移動を始めた頃は、いったいどんな感じだったのか、想像すると恐ろしい、と豊は思った。
「じゃあ、僕は学校に行くから、僕が帰ってくるまで、大人しくしてるんだよ。ミケ・・・」
　部屋を出ようとした時、豊はなんとなく、ミケネコと呼ぶのをためらった。
　いつまでも、こんな名前じゃないような名前で呼ぶのも変だと思ったからだ。
「君はさ、僕になんて呼んで欲しい？」

豊は少し照れながら尋ねた。
どうやら改まって顔を見ると、やはりまだまだ恥ずかしい気持ちがあった。
いや、顔を見ると、何度か見た裸を思い出してしまっていたのかもしれない。
とにかくポリポリと頬の辺りをかく、ベタな照れ方をしていた。
するとミケネコは元気よく言った。
「ネコ！なのさ！！」
ミケネコの顔は、満面の笑みだった。
それを見て、豊はもうどうでもいいやと思った。
でもネコだと人間の名前とはいいづらいので、適当に「音子」という漢字を与えてやった。
豊は、学校に来ていた。
そこで豊には、やらなければならない重要なミッションがあった。
まあ、こういう話の展開になれば困る事。
それは、音子の着る物をなんとかしなければならないって事だ。
一緒に人探しをするとなると、当然一緒に出歩く事になる。
それがずっと体操服ってわけにもいかないし、最悪服は男性用で良いとしても、下着はそうはいかない。
だからそれを買いに行かなければならないわけだが、男としては買いに行くのが恥ずかしい。
そこで、誰かに買ってきてもらえるよう頼もうってわけだ。
そう思っていたのだけれど、それもまた恥ずかしい行為である事に気がついた。
頼む相手は決まっている。
１年の時のクラスメイトで委員長だった、風谷菜乃《カゼタニナノ》だ。
「委員長キャラキター！」と、とりあえず言っておこう。
風谷菜乃とは、実はそれほど付き合いがあるわけではない。
他にまともに喋った事のある、女子の友達がいないから、消去法で仕方なくそうなった。
こんな時、毎日毎日勉強ばかりしていた自分が恨めしい、なんて豊が思ったかどうかは謎だが、とりあえず友達の大切さってのを感じていた。
豊の仲の良い友達なんて、１年の時のクラスメイト、佐藤三杯《サトウサンバイ》だけだ。
三杯に頼んでとか、一瞬思わなくも無かったが、逆に喜んで買いに行きそうだったので、頼むのはやめていた。
一応気になっていると思うので説明しておくと、この佐藤三杯って名前はギャグだ。
親がこの世に送り出した、一世一代のギャグだ。
佐藤家に三男として生まれた三杯には、親ももう、正直名前をつけるのが面倒になっていた。
そんな時、母親がコーヒーに、砂糖を三杯入れているのを見て、父親がひらめいたとの事だ。
おかげで誰とでも仲良くなれるバカに育ちましたとさ。
良かった良かった。
おっと話がそれてしまったが、豊は意を決して、風谷菜乃に話しかけた。
「あ、委員長！じゃなくて、風谷さん、ちょっとお願いが・・・」

豊を見る風谷さんは、ちょっと気が強そうだけど美形で「ツンデレキャラきたー！」と言っても過言ではない感じの女の子だった。
「あ、山下じゃん。どうしたの？」
菜乃の表情は、豊と話す前と後で、全く変化がなかった。
どうやら特に感情を表に出すタイプではなく、豊に特に興味もないといった感じだ。
要するに、友達だとも思われていないくらいの間柄に見えた。
まっ、そんな人に頼みごとをするわけで、しかもその頼みごとが頼みごとだけに、豊の緊張は増しに増していた。
「え、え、えと、パンティーと、ぶ、ぶ、ブラジャーを・・・」
「山下って、そんな奴だったんだ・・・」
豊の言葉に、菜乃はそれはそれはもう、冷たく凍るような眼で豊を見た。
（ヤバイ・・・）
豊がそう思って冷や汗を流していると、菜乃は自分のスカートを、ゆっくりとまくりあげ始めた。
呆れられたか、それとも軽蔑されたと思っていた豊にとって、その行動はあまりに意外だった。
心の中で葛藤が始まる。
相手が見せようとしているのだから、このまま見ていようと言う悪魔の言葉と、勘違いなのだから訂正してやめさせるべきだと言う天使の言葉が、脳内で争っていた。
勝負はあっさりついた。
豊には、それを見ているだけの欲望も度胸もなかった。
「いや、そうじゃなくて、違うんだよ！」
豊は凄く顔を真っ赤にしていた。
その中に、否定した事への後悔というものは一切なかった。
「いや、冗談だから。」
菜乃はどうやら、豊をからかっていただけのようだった。
「で、パンティーとブラジャーがどうしたの？」
菜乃は特に、恥ずかしいとか動揺は微塵もなく、あっさりと言ってのけた。
それでようやく落ち着いてきたのか、豊はギリギリ話す事ができた。
「えっと、親戚の子が家に来てるんだけど、着る物がなくて困ってて、ちょっと出かけられないから、買ってきてほしいんだけど。」
豊は何とか伝えきる事ができてホッとした。
しかし、菜乃の言葉に再び動揺せざるを得なくなった。
「着る物無いのに、どうやって山下んとこに来たんだ？」
豊は必死に言い訳を考えた。
何か、これは納得と思える設定はないものだろうかと。
だが、答えを出す前に、菜乃が謝ってきた。

「悪い悪い。そんな事を私が聞くものでも無かったな。で、買ってきてやるが、サイズは？」
　とりあえず助かったと思った豊だったが、よく考えればサイズなんて知らない。
　豊は、菜乃の胸をマジマジと見つめた。
　そして今度は後ろに回り、お尻のあたりをじっくり見て・・・
「風谷さんより、胸は大きめ、お尻は小さめかな？」
　そう言うと、菜乃は「じゃあな！」と一言残して、その場を去って行った。
　豊のミッションは、失敗に終わった。

　ミッションに失敗した豊だったが、このままのうのうと帰るわけにはいかなかった。
　明日は土曜日で、できれば今日中に買って帰り、明日から、音子の命の恩人を探し始めたかったからだ。
　豊の次の選択肢は、最終手段である、三杯に頼む事だった。
　あいつならきっと、嬉しい口実ができたとか言って、喜んで買いに行くに違いない。
　豊はそう思って、三杯のクラスである３組へと足を運んだ。
　三杯はすぐに見つかった。
　というか、とにかく五月蠅いところに行けば会える。
「三杯！」
　豊は教室の外から三杯を呼んだ。
　別のクラスって、入るのって少しためらうよね？
　別になんの問題もないはずだが、教室も暗く感じたりｗ
　それはそれとして、豊の言葉に、三杯は意気揚々と教室の出口へと歩いてきた。
「よ！豊、どうした？昼休みまで待てなくて、ボクちんに会いに来ちゃったのかな？ｗ」
　いつも豊は思うのだが、どうしてこんなに軽い奴と、友達をしているのだろうかと。
　でも、理由は簡単である。
　友達が少ない豊が仲良くできるのは、誰とでも仲良くできる三杯だけだったし、以前バカとは書いたが、実は勉強はかなりできたりする。
　１年の時のクラスでは、いつもテストの点数では１，２を争っていたから、お互いライバル意識から、友達になったという感じだ。
「よ！別に三杯の顔は見たくなかったが、ちょっと頼みがあってね。」
　豊のつれない返事にわざと残念そうな顔を浮かべた三杯だったが、すぐに頼み事が気になった。
「俺に頼みごと？珍しいな。豊は人にあんまり頼み事しないし、まして俺になんてｗようやく俺を頼ってくれる気になったか。」
　三杯は嬉しそうだった。
　意外に三杯は、人の為に何かをするってのは、嫌いではないようだ。
　三杯の表情を見て、豊は安心したのか、ストレートに要求を述べた。
「まあね。それで、パンティーとブラジャーを買ってきて欲しいのだが、買ってきてくれるか？

」
　豊の言葉に、三杯は冷たい視線を向けていた。
　流石に三杯でもそれは無理だったか。
　豊は急に恥ずかしくなってきた。
　だが次の瞬間ニヤリと笑うと、豊の肩をポンポンと叩いてこういった。
「目覚めたか。」
　三杯の勘違いに、豊は思いっきり否定のツッコミを入れようかと思ったが、こんな事は日常茶飯事、ただのレクリエーションだ。
　此処は肯定するところだと判断し「ああ、共に肩身の狭い人生を送ろうぜ。」と、豊は三杯と肩を組んだ。
「そして二人、魅惑の世界へと歩いて行った」なんてナレーションを心の中で思い浮かべながら、廊下を少し歩いた。
　それで気が済んだようで、三杯は組んでいた、肩に回した手を解いて、豊を見た。
「オッケーｗ俺に任せておきな。なんだか分からないけど、親友のピンチ、助けてやるぜｗ」
　三杯はそういって、親指を立てた。
　豊もそれにこたえ、親指を立てた。
　傍からは、親友同士のサムズアップも、何やら怪しい動作に見えていた。
　さて、放課後になった。
「あれ？音子が学校に来たり、転校生としてやってくるなんてベタな展開を期待していたんだけど」
　なんて言いたい方もいらっしゃると思われますが、全く何事もなく放課後になってしまって申し訳ない。
　この世界は最も常識的な世界ですので、期待を裏切る事も多々あると思いますがご了承ください。
　さてもう一度、仕切り直して、放課後。
　豊は、三杯と共に、学校から一番近い町に出ていた。
　方向的には、豊の家と逆方向で、多くの人はこちらの町にある駅を利用して通学している。
　昨日帰り道にあんな事があったのに、目撃者がいなかったのはその為だ。
　いや、実はいたかもしれないが、豊は全く周りが見えていなかったので、その辺りどうなのかは、今後の話の展開次第。
　それが、豊の世界である所以で、豊が、当然目撃者がいたと思えば、誰か出てくる可能性はあるし、気にもとめなければ、目撃者はいなかった事になるだろう。
　逆に言えば、目撃者がいたとして、その人が誰かに話をしたりして豊かに影響がなければ、それは見た人がいなかったのと同じ事と、この世界では処理される。
　シュレーディンガーの猫のバランスで、この世の中パラドックスがあふれているのだ。
　そして、こちら側の町には、人があふれていた。
　この辺りにある唯一の町で、田舎の人達が集まってくる。

と言っても、見ると半分は学生のようだ。
豊の通う「私立桜花高校」は、生徒数が少なく、同じ学校の制服はあまり見られない。
見かけるのは、町の反対側に位置する「桜花大学付属高等学校」の制服ばかり。
大学は東京の都心にあり、此処で高校生活を終えた生徒のほとんどが、東京の大学に行く事になっている高校だ。
町の名前から同じような名前の高校ではあるが、全く関係はなかった。
豊は、三杯について歩いていた。
一件それらしい下着を売っている店を見かけたが、三杯は見向きもせず通りすぎた。
買う店は、三杯に任せている。
なんせそんな店は全く知らないし、買った事もないのだから、豊には口出す余地は無い。
しばらくついて歩くと、駅の近くにある、この町唯一のデパートの前に来ていた。
すると三杯は立ち止り、キョロキョロと挙動不審になった。
豊は（なんだ？何かする気か？まさか誰かがつけている下着を、譲ってもらおうなんて考えてるんじゃないだろうな？）なんて思った。
まあ、真剣にそう思ったわけではなく、心の中のちょっとしたジョークだ。
豊がそんな事を考えている間に、三杯が何かを見つけた。
どうやら誰かと、待ち合わせしていたようだ。
向こうから、やや小走りで走ってくるのは、豊たちよりも少し年下に見える、可愛らしい女の子だった。
（なにー！三杯にこんな可愛らしい、かの、いや、友達がいたのか？！世の中狂っている！）
と豊は心の中で思ったが、その真意はすぐに明らかになった。
「お兄ちゃん！」
「ん？お兄ちゃん？」
その女の子は、三杯に向かって「お兄ちゃん」と言葉を発した。
豊は、三杯に妹がいるなんて聞いた事がなかった。
三男に生まれて、名前をつけるのも面倒くさいと思わせた奴だ。
そんな三杯に、更に下がいると想像できなかった。
しかし、考えれば簡単な話。
要するに、女の子が欲しかったが、男が生まれてガッカリだったって事だろう。
三杯は、ある意味いらない子だったわけだが、放置プレイで育てられたからか、大らかで誰とでも仲良くできる男に育っていた。
それだけが救いと言ったところか。
同じ時期に生まれた兄妹で、妹ばかり可愛がられていて、よくまあひねくれずに育ったものだ。
この世界唯一の奇跡かもしれないと、私は思うのであった。
「こいつ、俺の妹ののぞみだ。こっちが俺の親友、山下豊ね。」
三杯はそれぞれにそれぞれを、最低限の言葉で紹介した。

「あ、よろしく。豊です。」
豊は少し照れていたが、三杯の妹に照れてなるものかと、気合で平静を装った。
それに、昨日の出来事から、少し耐性がついていたようで、動揺が目に見える事はなかった。
「あ、はい、よろしくです。お兄ちゃんがいつもお世話になってます。」
何やら少し動揺しているのぞみちゃんの上目づかいは、とても可愛かった。
そして、素晴らしい妹だった。
妹のかがみだった。
どんな時も兄の事を考える妹、流石である。
「いや、もっぱら世話してるのは俺なんだけどね。」
三杯の言葉ももっともだったが、なんだか悔しいので、豊は一応言い返す。
「世話させてやってるんだよ。」
微妙な反論ではあったが、豊が納得していればそれで良い。
世の中、本人が納得していれば、何も問題はないのだから。
さて、紹介も済んで、いよいよ本題である。
どうやら三杯から、既に話を聞いていたのぞみは、すぐに質問をしてきた。
「で、サイズはいくつなの？」
豊はドキッとした。
今日の午前中、この質問のこたえが原因で、ミッションを失敗している。
豊は落ち着いて、辺りを見渡した。
沢山の人が歩いている。
菜乃の時には、菜乃を基準にしたのが失敗だった。
今度は、別の人を対象に、サイズを伝える事にした。
「えっと。あの人と同じくらいのサイズ。」
豊の視線の先には、とても美形の、とてもスタイルの良い女性が立っていた。
そう、音子はとてもスタイルが良かった。
今更ながらに思いだし、豊はそう思った。
「あれだと、Ｃ７０くらいかな？」
何故見ただけでそんな事が分かるのか、三杯の呟きが、妙に豊の頭の中に残った。
下着の買い物というミッションは、なんの問題もなくコンプリートした。
ついでに靴や、洋服も何着か購入してもらった。
豊は無事、この日の目的を果たした。

家に帰った豊は、早速ミッションで手に入れた戦利品を、音子に着るように渡した。
少し手間取ってはいたが、なんとか身につける事に成功した。
と言っても、手間取っているところを、豊が見ていたわけではない。
見ていたのは私だ。

いや、冗談だが、とにかくこれで、豊には色々とスタートラインに立った感じがしたようだ。
人探しへの決意を新たにしたかのような、険しい顔つきをしていたから。
あ、いや本当は、着替えを見たい欲求を抑えていただけなのは、此処だけの話。
それにしても豊には、まだまだ音子の話を、信じられたとは言い難い。
そんな信じがたい話に積極的に協力するのは、全て音子が可愛かったから。
たとえ猫が音子になったのが高度なトリックであったとしても、騙されて居候されているだけだとしても、可愛い子と一緒に生活できて、それが人探しという些細な事で続けられるなら、それはそれで良いと思っていた。
ただし、勉強の為に田舎に来たわけで、勉強しなくなっては親に申し訳がない。
母親もそうだが、父親はほんとうの父親ではないから、特に父親にお金を出してもらっている事に罪悪感を感じる。
だから、勉強だけはしっかりする事を、豊は固く決めていた。
一応ハッキリ言っておくと、皆さんが期待しているような、二人の愛の話には、そう簡単にはならないって事ですよ。
この日は、少し明日の事を話した後、見合って食事をしたが、なにやらむずがゆくて話は弾まず。
その後は音子にテレビを見せて、豊は勉強。
時々音子が豊に話しかけるが、照れと勉強でそっけない返事。
そして風呂は、音子は豊が帰ってくる前に入ったと言っていたので、豊だけが入って、後は寝るだけ。
こうして、音子と出会ってからの、普通ではない２日目が終わった。

## 人探し開始

　豊の土曜日の朝は、昨日よりも体が重かった。
　理由は簡単である。
　近くに可愛い女の子が寝ていて、熟睡できないからだ。
　妙な夢も沢山見る。
　自分も猫になる夢だとか、音子と一緒に命の恩人を探す夢、更には時間と世界線を移動する夢も見ていた。
　豊がこれだけ沢山の夢を見る事は珍しい。
　実際は、夢というのはみんな見ているものだと言われているが、覚えている事は少ない。
　なのに妙に覚えている。
　そのなんとも言えない感覚を、豊は意外と楽しんでいた。
　眠くて体が重いけど、何処か懐かしい感じがする感覚を・・・
　音子を起こすと、豊はいつものように朝の支度をする。
　今日は体育の授業があるので、体操服を持っていかなければならないが、洗濯する時間は無かった。
　だから、音子の着ていたものをそのまま持っていくしかないわけだが「本当に自分はこの体操服を着るのだろうか？」などと思いならが、鞄に詰め込む。
　歯を磨き顔も洗う。
　歯ブラシは大量に買い置きしてあるので、音子には音子専用歯ブラシが与えられていた。
　流石に１年鍛えられていたからだろう。
　音子の歯磨きはちゃんとできていた。
　だけど、顔を洗うのはあまり好きでは無いらしい。
　猫は水が嫌いだと言うが、人間になっても音子は水が嫌いなようだ。
　人間になったんだから、体中に毛も生えていないし、乾かずに熱が奪われる事もないわけだが、まあトラウマってやつだろう。
　でも水を嫌うそのしぐさが、豊に、音子が猫である事を思い起こさせるものになっており、人の姿を維持させる力となっていた。
　そして、この世界にいられる条件でもあった。
　もし豊が、音子は人間だと思い込んだら、家族や戸籍、他色々と存在を証明する物が有るはずだ。
　それが無い人は、少なくとも日本にはいないと思っているわけで、当然、自分の家にとどめておくわけにもいかない。
　朝食は、シリアルやトーストをローテーションで食し、豊はいつもの時間に家を出た。
　今日帰ってきてから、一緒に命の恩人を探す事を約束して。

　豊は、午前中だけだった学校から帰ってくると、いよいよ人探しを始める。

音子と少し話したところ、情報は全くと言っていいほどない。
男性の年齢は５０歳前後に見えるという事と、交通量の多い広い道路と交差する道路で、自動車にはねられた事。
後は高層ビルが立ち並ぶ景色の中に、工事中の更に大きな建物を覚えているという事くらい。
豊はまず、グーグルのサービス、ストリートビューで東京都心部の写真を、音子に見せた。
大阪や別の都会なども考えられたが、音子の言葉づかいが方言ではなかった事から、とりあえず東京にしぼった。
決して音子の喋りもまともな東京弁ではなかったが、他に当てはまりそうな場所もない。
とにかく、パソコンの中で東京を旅する事にした。
すると、いくつか似たような景色を見つけた。
ただし、どれも東京都心ならありがちな景色で、繁華街ではなく、住宅街とビジネス街が混在したような場所である事が共通点だった。
「これだけじゃ、何処に出かけたらいいのか分からないな。何か他に、分かる事はないかな？」
豊の質問に、音子は少し考えてからこたえた。
「きっと此処からそんなに遠くはないと思うのさ。」
豊は一瞬「そういう事は早く言ってよ」と思ったが、そんなに遠くはないってのは、どれくらいの事を差しているのか分からない。
東京の都心だって、ここから電車で２時間もかければ行く事ができる。
大阪だって、そこから新幹線で３時間とかからない。
それを遠いと言うか、遠くないと言うか、人それぞれの価値感によって違う。
だから豊は再び質問をした。
「遠くないってのは、どれくらいの距離？どうしてそう言えるの？」
すると音子はまた考えた。
音子自身は、自分は賢いと思っているが、人間としてはバカな子なのだ。
なかなか上手く言葉にできなかった。
だから結局、最初に世界線を飛んだ時に出会った、自分とそっくりな人から教えられた事を、そのまま伝える事にした。
「私の能力は、時間軸の中での世界線の方向、時間の方向、そして中心人物の場所、３つの条件がそろった時にしか使えないのさ。」
音子の言っている事は、豊には理解する事は難しかった。
こういった話は、２日前の夜に沢山聞かされたが、ちゃんと理解できる事なんて何一つない。
でも、漠然とならイメージできた。
「ようするに、何度も世界線を移動する中で、徐々に場所も移動した。つまりほぼ直線であり、来た道を戻れば、目的の場所に辿りつけるって事かな？」
「たぶんそんな感じなのさ。猫や人間が１年で移動できる距離、それを超える事はないのさ。」
豊の言葉は正しかった。
分かりやすく説明すると、たとえば太陽系をイメージしてほしい。

そして太陽の位置に、地図の豊と出会った場所を重ねる。
海王星の位置に、地図の縮尺と方向を合わせて、音子が最初に世界線をジャンプする前の場所を持ってくる。
もちろんそれは、今の状態ではどこだかわからないが。
それで、中心人物と出会った場所と、世界線の関係をあらわす事が可能だ。
ただこれは、実際の世界線の位置ではなく、世界線の位置を、時間で表した場合である。
最初の頃のジャンプでは、短い時間で世界線を大きくジャンプできたのだが、ややこしいので此処では忘れて欲しい。
音子は、太陽系の惑星直列が起こった状態で、海王星から天王星、土星、木星とわたり、最後に水星から太陽にやってきたってわけだ。
人は住まいをコロコロ変える事は無いし、生活圏も大きく移動する事は少ない。
だから、ほぼ一直線上にあると判断できる。
そして、最後のジャンプは、地球上での距離も、世界線の距離も、どちらも豊のいる場所に近いって事が分かる。
ようするに、最後に出会った世界線の中心人物は、かなり近くにいるという事だ。
その人と出会った場所を見つければ、命の恩人がいる場所への方向がある程度分かる。
「此処に来る前、最後に会った人、どんな人だった？」
豊は今住んでいる場所に来て、１年くらいしか経っていないし、聞いたところで知り合いにいるとは思えない。
でも、印象的な人なら、もしかしたら記憶にとどめているかもしれない。
「ん～公園で生活していたよ。ホームレスってやつなのさ。」
そう聞いて、豊は少しガッカリした。
豊の住む場所は田舎で、人が少なくホームレスなんて見かけた事が無かったから。
近くと言っても、それほど近くでは無かったって事だ。
それでも、そんなに遠いわけではないはずだ。
豊はふと思いだした。
昨日、三杯と共に行った、学校の向こう側に有る町の事を。
あの町なら、ホームレスの人がいるかもしれない。
豊は早速ストリートビューで、桜花町を表示して音子に見せた。
「あ、なんだか見た事あるのさ。此処から飛んできたのさ。」
（キター！）
豊には、人探しの突破口が見えた気がした。
「僕の前に会った人、どこで会ったか分かるか？」
「ん～行ってみれば分かるかもしれないのさ。」
こうして、豊は昨日に続いて、学校の近くにある町へと、音子と共に出かけた。

豊は、音子と町を歩いていた。

目的は、最後に音子が会ったホームレスを見つける事、又はその人と出会った場所を見つける事だ。
しかし豊は、そんな事は頭からすっ飛んでいた。
（これって、デートじゃね？）
音子の手が、豊の腕に絡められ、要するに腕を組んで歩いていた。
こんな風に女の子と一緒に歩いた事なんてない。
しかもそれがとびきり可愛くて、好みの女の子であれば、それはもうドキドキ状態だ。
離れてくれと言いたいところだが、それも凄く惜しい気がする。
だから豊は、ただただ音子になされるがまま、町を歩かされていた。
町を半分くらい歩きまわっただろうか、不意に音子が声を上げた。
「あー！」
指差す先には、特に何もない。
家と家の間にあるわずかな隙間に、猫が一匹いるだけだった。
「猫がどうかしたのか？」
豊は特に気にも留めなかったが、思い返してもう一度その猫をよく見た。
そして豊も驚いた。
「えっ！」
その猫の姿、まさしく人の姿になる前の、音子の姿そのものだった。
「時間を飛ぶ前の私？・・・」
音子の言葉に、時間を飛んで未来から来たなら、そういう事もあり得ると豊は思った。
だけど、豊には同じだとは思えなかった。
豊が「違う・・・」とつぶやくと、音子もまた「あの子、私じゃないのさ。」と、どこか寂しそうだった。
その表情が気になって、豊は音子に尋ねた。
「どうした？」
すると音子は「よくわからないんだけど、あの子、もうすぐ死んじゃうのかも。」と、呟くようにこたえた。
音子は、時間と世界線を飛ぶ事がでる。
だからか、もうすぐ世界線が消滅してしまう命を、感じる事ができるようだ。
音子が最初に世界線を移動した時に会った、そっくりな彼女もまた、音子は同じようなものを感じていた。
ただ、その時は理解できず、今はその時の事については忘れていた。
豊は、此処までくれば、音子の言う事は、おそらく当たっているのだろうと直感した。
だが、今目の前にいる猫が、なんの意味もなく、今此処にいるとは思えなかった。
猫が移動し始めるのを待って、二人は猫の後をつけた。
しばらくすると、予想された光景に出くわした。
「やっぱり」

豊の視線の先には、一匹の三毛猫が、ホームレスのおじさんと戯れる姿があった。
音子がたどってきた、ホームレスのおじさんの世界では、音子と出会って別れた、それだけの関わりだったのだろう。
でも此処では、もうすぐ命を終えようとする一匹の三毛猫が、死ぬ間際に関わった、最後のぬくもりという事なんだ。
音子と出会わなければ、おそらく見る事の無かったこの情景。
見ていたとしても、知る事の無かった小さな命の最後に、豊は少し寂しさを感じた。
音子も、豊と同じ気持ちだったのか、頬には涙が流れていた。
しばらくしてから、三毛猫はホームレスのおじさんのところから離れ、一匹、神社裏へときていた。
「私ここから、この世界に飛んできたさ。」
音子の発した言葉の意味は、この三毛猫が此処で死ぬことを意味していると、豊は理解した。
「あの猫、僕と会えば助かるのかな？」
助からない事は分かっていた。
もし助かるなら、此処に音子がいないような気がしたから。
「あの子は無理だと思うさ。」
音子の言葉に、二人どちらからともなく、その場を離れた。
猫は死ぬ時、人目のつかないところで死ぬと言う。
ただの体調不良からの行動だったとしても、豊には、この猫の気持ちとして、人目につきたくないのだと思えた。

二人は、部屋に戻ってきていた。
少し寂しい場面に立ち会ってしまったから、二人とも気分が浮上しなかった。
特に人探しの事について話す事もなく、なんとなくテレビを見たりして時間を潰した。
夜は勉強する予定だった豊も、この日は早めに布団に入り、眠りについた。
と言っても、フローリングの上に敷いた、掛け布団だけではあるが。
音子はしばらく、窓から空を見上げていた。
空には、流れ星が一つ流れていた。
今のが、あの三毛猫の最後を示す流れ星だったようで、音子の目から、再び涙が流れた。
音子はその後、豊の布団に入って、豊にくっついて、フローリングの上で一緒に眠った。

　日曜朝、豊は一人動けずにいた。
　まあ皆さんの予想どおりだと思う。
　自分にくっついて寝ている音子に、動揺し欲情していた。
　しかし相手は猫である。
　豊は必至に高ぶる気持ちを抑えた。
「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前・臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前」
　でもよく考えたら、このままだと状況は打開できない。
　そう判断した豊は、布団から出ようと思った。
　その時、ふと感じた。
　なんと言うか、猫の匂いがすると言うか、ハッキリ言って臭うって奴だ。
　その匂いに、豊の動揺はすぐに収まっていた。
　音子の腕を解き布団から出ると、肩をゆすって起こす。
「オーイ！音子！おきろぉ！船がでるぞぉ！」
　意外に昭和な事を言う豊であった。
　目をこすりながら起きる音子は、普通の状況ならとても可愛く感じるし、クラッとくるし、抱きしめたくなる凶悪さだ。
「ふへ？なに？ごはん？」
　この寝ぼけた台詞も、男性なら９９％が萌えて当然だ。
　だがしかし、今の豊は、匂いの事しか頭になかった。
「音子、お前、風呂入ってるとか言いながら、入ってないだろ？」
　そう、猫は水が嫌いだ。
　そして音子は、朝の洗顔も凄く嫌そうだった。
　風呂に入るところも見た事がないし、つまりはそういう事だ。
「入ってるのさ！」
　音子は、ツンとした顔で豊から視線をそらした。
　間違いない。
　風呂に入っていないと確信した豊は、音子を目の前に座らせ、説教を開始した。
「ダメでしょ。水が嫌いでも、風呂には入らないと。ちゃんと教えてもらったんでしょ？」
　音子は、正に怒られた猫のように、目の前で悲しそうな顔をして丸くなった。
　すると豊は、凄く悪い事をしている気分になった。
「音子？本当の事、言ってくれるかな？怒らないから。」
　そう豊が優しく言うと、音子はゆっくりと顔を上げて、勢いよく喋り出した。
「えっと、お風呂は嫌いだけど、ちゃんとタオルで体拭いたさ。それでも大丈夫だって、友里が言っていたし。良いでしょ？」
　友里と言うのが誰だかわからないが、要するに世界線を移動中に出会った人の一人だろう。

風呂に入るのが嫌な音子の為に、妥協案として提案したんだと思う。
でも、やっぱりこんな可愛い女の子には、あの某アニメのヒロインのように、時間があれば風呂に入る、それくらい綺麗好きであってほしい。
これは豊の我がままなのかもしれないが、私もそう思う。
いや、私は１日１回で良いけどね。
とにかく豊は、意地悪な作戦に出た。
「ちゃんと風呂に入ってくれないと、探すの手伝わないよ。」
この言葉は、もちろん本気で言っているわけではない。
親が子をしつける時「勉強しないとご飯を食べさせてあげない！」って言うのと同じ事。
相手を思っての事だと思う。
人間になって１年しかたたない子供のような音子は、それは憂慮すべき事態だと判断した。
効果覿面《コウカテキメン》、音子はゆっくりと部屋着のスウェットを脱ぎ始めた。
「ちょっ！風呂場で頼むよ！」
この、いきなり脱ぎだしたり、恥ずかしさがない辺り、豊の常識では理解できない。
これもまた、豊に不思議な事を受け入れざるを得ない状況にさせている原因になっていた。
「お風呂はさ、もうお湯が冷めてるから、シャワーだけでも良いからね。」
豊は風呂場のドアの外から、中に向かって伝えた。
「う、うん。シャワーの方が怖いんだけど、頑張るのさ。」
こうしてなんとか、音子を風呂に入れる事に成功した。
「ギャー！貴様！私を殺す気か？うおー！遠慮という言葉をしらないのかぁー！」
「・・・」
この後、音子の奇声が何度も聞こえてきたが、豊にはどうする事もできなかった。
さて、シャワーから出た音子と一緒に朝食をとった後、豊は二人で、昨日の事を整理する事にした。
「まず、音子がこの世界に飛んだのはあの神社裏、出会ったのが学校近くの田舎道だったね。」
パソコンでこの辺りの地図をプリントアウトし、それをテーブルの上に広げて、豊は印をつけた。
「うんうん。」
音子は、分かっているのか分かっていないのか、よくわからない相槌を返す。
「で、前の世界に飛んだのは深夜で、到着が夕方だったと・・・」
最後から２回目のジャンプ。
この、ジャンプをした時間と到着時間は、参考程度だ。
常にジャンプの方向は、豊を目指しているから、その時間豊が何処にいたのか分かれば、より正確な方向が分かるかもしれない。
ただ、向かう方向を決めるのが、ジャンプした時なのか、それとも到着した時なのか、はたまた最終的にいた田舎道なのかは分からないから、一応検討するわけだ。
「うん。みんなが夢を見ている深夜じゃないと、もう人間の姿になる事が出来なかったのさ。」

理由はどうあれ、時間が分かるのはありがたい。
「夜にしても、昨日の夕方にしても、僕は普段ならこの部屋で勉強していただろう。だから、この場所と昨日ホームレスのおじさんがいた場所を結ぶと・・・」
２本のラインは、ほぼ平行にならんでいた。
それはすなわち、このベクトルが正しい事を表していると言える。
そのラインを逆方向にたどって行くと、東京の都心へとつながっていた。
これでほぼ間違いない。
高層ビルが立ち並び、建設中の大きな建物があり、交通量のあるところでの事故、それは東京のどこかであると、豊は確信した。

日曜日の午後、二人は桜花町から少し東京よりの、さつき町まで来ていた。
グーグルマップで、ベクトル線上の東京都心部を見てみたが、どうもピンとくる景色は無かった。
だから、最後のジャンプより逆方向に、同じだけの距離を戻った辺りを探して、一つずつ埋めて行こうと考えたが、その辺りもまた見覚えがない。
そこで、そこから一番近い町を見たところ、此処かもしれないって事で、さつき町を訪れていた。
でも、たぶんこの町だと分かっているなら、わざわざ訪れる必要はない。
時間をかけてグーグルマップで探せば、ジャンプした場所、してきた場所は、きっとみつかるだろう。
更に音子の飛んできた過去、この世界では未来をたどって、次の場所を探した方が良いかもしれない。
でも、音子がどうしても、さつき町にいるであろう、その時の中心人物に会いたいと言うのだ。
理由は、その中心人物にも、死んでいく命と同じような感覚を感じていたから。
自分たちが会いに行かないと、間もなく死ぬって事だ。
死ぬと分かっていて、もしかしたら助けられるかもしれないと知って、助けない選択肢は、豊の中にはない。
「どうだ？やっぱりこの町か？」
昨日と同じように、音子は豊の腕にぶら下がるように、腕を組んで歩いていた。
豊は相変わらず動揺もあったが、流石に２日目、少し慣れてきていた。
「うん、たぶんこの町だと思うのさ。」
音子は、人間としてはバカな部類だが、覚えようと思えば、意外に記憶力は良い。
自分にそっくりな彼女に教えてもらった事を、事細かに覚えている事でそれは分かる。
でも、まさかたどってきた道を、再びさかのぼるような事になるとは思ってもみなかった。
だから、町の事なんて、ほとんど覚えていない。
「見た記憶がある」程度のものだ。

私なんて、見た記憶すら残らない事もある。
まあそれは、話とは関係ない事ですよ、念の為。
さて、この町でも、音子は猫の姿で、中心人物と会ったわけだから、見つけてもいきなり話しかける事はできない。
そして、助ける為に会うと言っても、見ただけで会った事になるのか。
話しかけなければならないのか。
どうすれば助けられるのかもわからない。
命の恩人を助ける為にも、一度、人を助ける為には何をしたらいいのか。
豊は知っておきたかった。
まあでも本音を言えば、豊は音子と一緒に出歩く事が楽しいと感じていて、そうしたいと思っている事は、言わずもがなだが。
と言うわけで、傍から見たら完全なデートであり、豊にとっても半分以上はデートだったわけで。
その場面を誰か知り合いに見られたら、確実にそう思われるわけで。
正面からこちらに向かって歩いてくるのは、まさしくクラスメイトだった。
それも男連れで。
男連れと言うからには、クラスメイトは女子である。
豊は全く話した事がなかったが、一般的に見ても可愛い子だったので覚えていた。
目があった。
そこで、３人同時に声を上げた。
「あっ！」
豊は、音子と一緒のところを、クラスメイトに見られてしまったという声。
クラスメイトの女の子「渡辺椎名《ワタナベシイナ》」は、クラスメイトを見つけた声。
そしてもう一つは、音子が椎名と一緒に歩いていた男を見て、あげた声だった。
つまり、渡辺椎名と一緒に歩いていた男こそ、今日探していた男性であった。
さて、此処からどうするか、それぞれの心の中では、色々な思いが渦巻いていた。
まず豊だが、音子が声を上げた事で、もしかしたら椎名の横にいる男がそうであるかもしれないと思っていた。
クラスメイトと一緒にいるのだから、話すチャンスでもある。
しかし、話した事もない可愛い子と話すなんて、正直照れる。
それに横には音子がいる。
きっと「彼女？」なんて質問もされる事だろう。
此処はスルーして、後日椎名と話すチャンスをうかがうべきではないか。
そんな事を瞬時に考えていた。
次に椎名だが、椎名も話しかけるべきかどうか悩んでいた。
デートの邪魔をしては悪いと思ったから。
だけど、きっととなりにいる男性の事を誤解しているのではないかとも思った。

隣にいるのは、実は椎名の実の兄で、わけあって今日一緒にいるだけだ。
それを彼氏だと誤解されて、学校で話されたらちょっと嫌だから、本当の事を言っておきたい。
でもそんな事を言うと豊が、椎名が自分の事を好きだから誤解を解こうとしている、なんて勘違いするかもしれない。
此処は騒がずスルーするのが、一番の方法ではないかと考えていた。
で、最後に音子だが、豊に「見つけてもいきなり話しかけちゃダメだよ！」と言われていたのだが、つい嬉しくて、考え無しにかけ駆け出していた。
「ちょ！」
豊の声は、音子には届かなかった。
音子は、椎名と一緒にいる男の前に立つと、一言「ニャー！」と挨拶した。
いやちょっと待て。
たとえ「いきなり話しかけちゃダメだよ」って言っていても、やはり話しかけてしまう事もあるだろう。
でも「ニャー！」っておい。
と、私も豊も思った。
話しかけられた男性、椎名の兄は、一瞬何が起こったか分からないといった顔をしたが、すぐに興味の無いような、感情の分からない表情になった。
豊は慌ててフォローを入れる。
「あ、えー、ニャー！」
フォローになっていなかった。
椎名の兄の表情は、少し怒っているように見えたが、椎名の「ニャー！同じクラスの山下くんだよね。」という言葉に、怒りは感じられなくなった。
それにしても、意外に椎名はノリが良かった。
これは私もビックリだ。
正直グッジョブと言いたい。
「うん。こんにちは。えっと、突然変な挨拶してごめん。」
豊の返事は、せっかく椎名が乗ってきてくれたのに、台無しにするものだった。
ここで更にボケを入れられれば、豊はユーモアのある面白い人と認識され、クラスの人気者になれたであろう。
でもよく考えたら、友達のいない豊には、当然の対応だった。
その当然の対応に、別に「このノリの悪い奴め！」なんて表情や感情は一切見せず、椎名は豊に質問した。
「ん～彼女さん？凄く可愛い。」
豊は、懸念していた事を質問をされてしまった。
こんなに可愛い女の子と、恋人同士に見えるわけだから、豊としては気分が悪いわけはない。
だがしかし、相手は猫である。

猫と恋人だなんて、二次元キャラを俺の嫁と言っている人達と同じレベル。
いや、人間でもないのだからそれ以下だ。
でもしかし、今は人間なのだから、アリではないか。
どうこたえるべきか一瞬考えたが、豊はとりあえず、全力で否定すべきだと結論を出した。
しかしそれよりも先に、音子が返事をしていた。
「うん。ミケネコなのさ！！」
当然こんな事を言っても、椎名もその兄も、冗談だと思って、軽く作り笑いをしてスルーするところだ。
でも豊にとっては、正に「冗談じゃない！」と言った感じで、必死にフォローした。
「あ、そうそう、ミケが苗字で、ネコが名前なんだよね、ははは・・・」
ベタなフォローをしてしまったおかげで、椎名もその兄も、スルーできない状況になってしまった。
「へっ、へぇ〜珍しい名前だね。」
「両親の悪意を感じるな。」
椎名は苦笑いを浮かべていたが、兄の方は何やら気分を害しているように見えた。
それを見た椎名が、少しさびしそうにうつむいた。
なにやら気まずい雰囲気になった。
少し沈黙が続いた。
これはピンチだと豊は思った。
すぐにその雰囲気に我慢できなくなった豊は「あ、じゃあ。また学校で・・・」と言って、音子の手を引っ張った。
「うん、じゃねｗ」
椎名は少しさびしそうに、その場で小さく手を振った。
音子も寂しそうに「あっ！」と言っただけで、豊に引っ張られるがままに、二人その場を去って行った。

　日曜日は結局、豊たちは椎名たちと別れた後、部屋へと帰った。
　豊が音子に聞いたところ、となりにいた男性が、やはり探していた男性であった。
　しかし、別れる時もまだ、近い未来に世界線が消失してしまう気配、すなわちもうすぐ死ぬという予感は無くならなかった。
　要するに、会っただけでは死を回避できなかったって事だ。
　寿命って奴かもしれない。
　それなら、豊にはどうする事もできない。
　それに今日からまた学校が始まるし、今日明日死ぬというわけでもないし、とりあえず、本来の目的に向けて頑張ろうって事になった。
　音子には、豊が学校に行っている間、ストリートビューでさつき町の着地点と出発点を探してもらう。
　見つかれば、とにかくベクトルの先、特に東京都内を探すよう、豊は音子に指示していた。
　学校にくれば、豊は今までと変わらない。
　朝のホームルームが始まる前も、机に向かって予習をしていた。
　教室に入ってきた椎名と目があったが、特に何かを話す事もなかった。
　さて、ホームルームの時間だが、先生がこない。
　チャイムが鳴って、既に１分が過ぎている。
　担任の佐々木先生は時間にしっかりしているから、こんな事は珍しい。
　と言うか、このクラスになって１カ月になるが初めての事だ。
　だからと言って、豊には特に思うところはなく、こないならこないで、ただただ予習を続けるだけだった。
　ほどなくして、先生はやってきた。
　誰か女生徒と一緒だ。
　豊は顔を上げた。
「あっ！」
　豊は、椎名と一緒に声を上げていた。
　先生が連れていた女生徒を見て驚いたからだ。
　驚く理由は簡単だ。
　その女性はまさしく、音子だったからだ。
　豊が椎名を見ると目があった。
　椎名は笑顔を作った。
　豊は椎名から目をそらせて、再び、先生と一緒に来た女生徒を見た。
「どうして？」という気持ちで頭がこんがらがっていた。
　そんな中、先生が話し始める。
「えー。転校生です。川上さん、自己紹介してください。」

豊には、まだ状況が受け入れられない。
音子が、転校生としてクラスメイトになるなんて、そんな事絶対にあり得ない、そう思っているから。
転校生が自己紹介を始める。
「えっと・・・川上ぃ・・・幸恵《ユキエ》ぇ・・・です・・・」
とても緊張しているようで、声量もなく、うつむいていてよく聞き取れない。
でも、わずかに聞こえてくるその声は、音子にそっくりだった。
その喋りを聞いて、豊は頭の中の整理がついた。
（別人だ。音子じゃない。）
豊は確信していた。
豊がそう思えたのには、色々と理由がある。
今目の前にいる子は、明らかに音子とテンションが違う事。
音子が転校してくるはずが無い事。
そしてなにより、音子がこの世界線にくる前の話を思い出していた。
自分にそっくりな人に会って、色々と話しを聞いたって事を。
豊の考えたとおり、この転校生「川上幸恵」は、音子ではない。
だが、もしも豊が不思議を受け入れられる、夢のある人間だったら、この転校生は音子だったかもしれない。
これはもしもの話だが、現実世界とはそういうものである事を、一応お伝えしておく。
幸恵の席は、豊の隣になっていた。
勉強のできる豊の隣が良いと、佐々木先生が考えたのか、それとも偶々なのか、とにかく常時なら喜ぶべき展開である。
しかし豊は、素直に喜べなかった。
昨日椎名と会っていたから。
きっと、何か言ってくるに違いない。
もしかしたらみんなに「あの二人付き合ってるんだよｗ」なんて話を広げるかもしれない。
豊はそうなる前に、椎名とコンタクトをとって、下手な事を言わないようにお願いしておく必要がった。
ホームルームが終わると、豊は早速ミッションを開始するべく、席を立とうとした。
だが、いきなりミッションは頓挫《トンザ》する事になった。
「あのぉ～・・・よろしくぅ・・・です・・・」
いきなり豊に、幸恵が話しかけていた。
といっても、転校生が隣の席の人に挨拶するなんて、有って当然のシーンである。
ここは普通に挨拶を返し、ミッションを続行しようと豊は試みた。
「あ、うん。よろしく。」
豊はそう挨拶すると、再び立ちあがろうとした。
するとまた、幸恵が豊に話しかけた。

「あのぉ・・・お名前はぁ？・・・あ、私幸恵ですぅ・・・」
　どういうわけだろうか、幸恵は向こう側の席の人に話かけるそぶりもなく、どうやら豊にロックオンしているようだった。
　豊は特に不細工ではないし、普通に生きていれば普通に出会いがあって、普通に結婚もできるだろう。
　それでも、いきなり転校生のターゲットにされるほど、イケメンでもない。
　視力が少し悪くてメガネをかけているから、多少知的な青年に見えるかもしれないが、いきなり興味をもたれる要素は何一つなかった。
　それでも豊に話しかけているわけで、豊はそれにこたえなければならなかった。
「あ、僕は山下豊・・・です・・・」
　二人の間には、誰も入ってこられないような空気が流れていた。
　豊にはどうして良いか分からなかった。
　ただ、黙って見合ってうつむいていた。
　（誰か、助けてー！）
　豊は心の中で叫んだ。
　すると、いつの間にか近くに来ていた椎名が、豊の背中を軽くたたいて言った。
「彼女さん、転校生だったのねｗ」
　クラスがざわついた。
　そしてすぐに幸恵を見て「ニャー！」と挨拶した。
　色々と状況がややこしくなってきた。
　豊は再び（誰か、助けてー！）と心の中で叫んだ。
　その時、椎名の「ニャー！」に、クラスの男子の何人かは萌えていた。
　豊の心の叫びに、ピンチを救ってくれたのは、授業開始のチャイムだった。
「じゃね！」と言って去ってゆく椎名さんが、豊には悪魔に見えた。
　１時間目の授業中は、次の休み時間、どうするべきか考えるだけでいっぱいいっぱいだ。
　いきなり「彼女じゃねぇー！」なんて否定するのもおかしな話だし、それに否定するのもおしい。
　そう、音子とは違って、となりの幸恵は確実に人間なのだから。
　顔は超可愛くて好みだし、問題なんてない。
　このどさくさにまぎれて彼女にする事が可能なら、それはそれでおいしい。
　豊はそんな事を考えていると、今度は少し離れた席で勉強している椎名さまが、天使に見えてきた。
　その流れで、隣の席の幸恵を見た。
「ゲロッ！」
　豊は思わず奇声をもらした。
　クラスメイトの何人かが豊を見た。
　豊は挙動不審になりかけたが、平静を装って軽く咳払いをした。

すると豊を見ていたクラスメイトは、すぐに興味を失って、心は授業に戻っていった。
豊はホッと胸をなでおろした。
さて、豊がこんな奇声を発してしまったのには、もちろん理由があった。
隣で授業を受けている幸恵が、教科書を立てて前から見えないようにして、何やらカードを並べていたからだ。
よく見るとそれはタロットカードだった。
そして幸恵は、呪文を唱えるように、何やらぶつぶつと言っている。
豊は少し涙目になった。
（イタイ子だったのか・・・それになんかぶつぶつ言っててこわいよ・・・）
豊は当然、占いなんて全く信じていない。
そんなものを信じる人、当然やる人も、洗脳されたヤバイ人だと思っている。
（もしかして、僕はそんなヤバイ人に目をつけられたのか？）
そんな事を考えて、豊は少しビビっていた。
それでも、となりで行われている儀式が気になって、授業の事は忘れて、チラチラとそちらを見ていた。
すると、その流れの中で、何故か椎名と目が合った。
椎名の顔は笑顔だった。
豊は首を振って、椎名に対して必死に否定した。
椎名はそれを見て、笑顔で頷いた。
（全然通じてないよ・・・）
豊の感じたとおり、椎名には全く気持ちは伝わっていなかった。
椎名にはただ、豊が恋する一人の少年に見えていた。
そんな中、どうやら幸恵の儀式は完了したようだ。
呪文のような言葉も聞こえてこなくなり、カードを動かす事もなくなっていた。
ただ、１枚のカードを見つめていた。
豊は占いを信じないが、流石に結果だけは気になった。
少し、幸恵の顔を見つめていた。
椎名の笑顔にも気がつかないくらい、見つめ続けた。
すると幸恵の目から涙が流れた。
それを見て、豊は思った。
結果が悪かったのだろうと。
「そのままじゃねーかよ！」と、私は豊にツッコミを入れたかった。
それにしても、結果が悪いだけで泣くなんて事があるのだろうか。
普通に考えて、そんな事が有る筈が無い。
豊は幸恵の涙を見て、ただ純粋に理由が気になっていた。
１時間目の終わりも、２時間目の終わりも、そして放課後までずっと、幸恵は豊に話しかけた。

話しかける内容は、特にたわいのない、生産性のかけらもない話だった。
その内容のない会話を続ける事が、椎名にはますます誤解を深める結果となった。
椎名はちょくちょく豊の席の近くにきて、二人をひやかす。
それで幸恵が否定するものだと豊は思っていたのだが、否定するそぶりもない。
気がついたら、椎名が「ニャー！」と言うと、幸恵もまた「にゃあぁ。」と返すようになっていた。
今日は椎名に、昨日の男性の事を聞く予定もあったが、豊の頭の中には、そんな事はもうどっかにすっ飛んでいた。
１時間目の授業中の涙の理由も、幸恵に聞くことはできなかった。
最後のホームルームが終わり、豊はこの後どうなるのだろうかと心配していたが、先生への最後の挨拶が終わると、幸恵はすぐに教室を出て行った。
此処までずっと、しつこいくらいに話しかけてきたわけだから、豊は凄く違和感を覚えた。
椎名にもそれは不自然だったようで、豊の所へ来て声をかけた。
「あれ？彼女はどうしたの？彼氏おいて帰っちゃったの？」
その言葉に、教室の男子からは、軽い嫌味やホッとする言葉が聞こえてきたが、当然の台詞が聞こえてきた事に、豊はホッとした。
でも、椎名の言葉は捨て置けない。
「いや、ちょっと色々、渡辺さんとは話しないとな・・・」
豊は、もうどうしていいか分からなかった。
椎名に何処まで話せばいいのか、音子の事をどう説明するのか。
世の中同じ顔が３人はいると言われているが、似ているなんてものではない。
持ってる雰囲気は違うが、容姿は完全に一致すると言っていい。
でも、一緒にいた男性についても話をしなければならないし、豊はとりあえず話をしようと決意した。
「話？あ、そうそう、昨日はお兄ちゃんとデートだったんだぁ～まさかあんなところで知り合いに会うとは思わなかったよ。」
椎名は、こう言おうと決めていたのか、さりげなく昨日一緒にいたのが彼氏ではなく、兄である事を豊に伝えた。
豊としては、彼氏だろうと兄だろうとどうでも良かったわけだが、上手い具合に話ができる状況に、ラッキーだと思った。
このチャンスは逃せない。
「へぇ～お兄さんだったんだ。仲良さそうだね。よくデートするの？」
椎名が返答しようとするのを抑えて、豊は一気に質問まで喋った。
「仲は、悪くないけど・・・」
そこまで言った椎名は、少し寂しそうな顔をした。
どういうわけだろうか。
もうすぐ死ぬ事は、椎名には分からないはずだ。

　それなのにこの寂しそうな顔。
　この、椎名に寂しそうな顔をさせる原因が、おそらく死への要因ではないかと、豊は漠然と思った。
　でも、プライベートに踏み込むには、それ相応の関係がないと駄目だと、豊は考えていた。
　それには、やはり自分も、色々と話す必要があると思った。
「この後、用事ある？なければちょっとだけ付き合ってよ。」
　豊はそこまで言うと「付き合ってよ」と言った自分に、少し照れていた。
　別に深い意味はないが、豊は意識してしまった。
「うん、良いよ。」
　椎名の返事は、少し嬉しそうだった。
　そんな椎名に、あなたは少し萌えた。
「勝手に決め付けるんじゃねーよ！」って言葉が、何処からともなく、私は聞こえた。

　豊は椎名と、桜花町のファストフード店で話をする事にした。
　何から話せばいいのか考えたが、椎名の事はなんとなく信用できると思えたので、思いつくままに話す事にした。
　ちなみに信用できると思えた理由の一番は、世間一般的にみて可愛かったからである。
「可愛いは正義」は、裏付けあってのものだから、豊には当然の判断材料になり得た。
「えっと、最初に言っておきたいのは、川上さんと、昨日のミケ・・・音子とは、別人なんだよね・・・」
　それを聞いた椎名はビックリしたが、すぐに嘘だと判断し、豊の言葉を聞き入れなかった。
「うっそだぁｗ世の中似てる人はいるけど、あそこまで似てるなんてあり得ないよ。」
　豊も、確かに椎名の言うとおりあり得ないと思ってはいる。
　でも、現実にいるわけだから、信じないわけにもいかない。
　と言っても、実際に二人がならんでいるところを見たわけではないし、音子が知らんぷりをして、学校に来た可能性がゼロではない。
　豊は違うと確信はしているが、話していると不安にも思えてきた。
「もしかして双子とか？」
　この椎名の考えも、似ているレベルならあり得るだろう。
　一卵性双生児なら、かなり似ていて間違える事もあると思う。
　私も双子芸能人は、見分けられなかったりする。
　でも、そんなレベルではない事は、豊も椎名も理解していた。
「いや、双子でもない。僕も今日初めて川上さんに会って、凄く驚いてるんだよ。」
「でもさ、川上さん、彼女？って聞いても否定しなかったし、ニャー！って言ったらにゃあぁって言ってたよ。」
　それは豊にも不思議だった。
　すぐに否定するものだと考えていたのに否定しないし、それどころか椎名のテンションについ

てきていた。
　そしてどういう訳か、豊に執拗《シツヨウ》に話しかけていた。
　豊にとっても、此処までしつこいと、正直ウザイと思える。
　怪しい占いもしているし、見た目だけは好みでも、流石に受け入れられる人ではない。
　だけど、音子に似ていて、音子の話を聞いていたから、嫌な感じはしなかった。
　むしろ、何か助けを求めてきているとも、豊は感じていた。
　音子の話が本当なら、川上さんは１年後死ぬのか、それともそれに近い何かがあるはずだ。
　流石にそんな人を、この程度の事でないがしろにはできなかった。
「僕も不思議なんだ。」
　豊は、此処にきてまた、核心を話す事に躊躇《チュウチョ》した。
　音子が、別の世界線の未来から来た事を。
　でも、やはり話さない事には、話が進まない。
　豊はそう思い、決断した。
「渡辺さん、今から僕の話す事、最後まで聞いてくれるかな？」
　豊は必要以上に真剣な顔を作って、椎名を見つめた。
　その真剣さに、椎名は何かを感じたのか、少し照れて「うん」とこたえた。
　ぶっちゃけ、いきなり告白とかあり得ないが、豊の真剣さは、そう勘違いされてもおかしくないくらい不自然だった。
　不自然な真剣さなのに、何故そう思うのか。
　それは、普通ではないからである。
　告白とは、なんでもない事を話すのとはわけが違う。
　告白する時、何故か敬語になってしまったりするのは、つまりそういう事だ。
　だからどういう話し方でも、いつもと違えば、相手は構えるのである。
　豊はゆっくりと話し始めた。
「音子は、今は人間の姿をしているけど、実は、未来から来た猫なんだ。」
「はい、ありがとう。」
　真剣に聞いていた椎名の心は、一気にしらけてしまった。
　要するに、真面目な顔をして冗談を言われたと判断した。
　それに、もしかしたら告白されるのではと、椎名は期待していたのかもしれない。
　だから気が抜けたのだろう。
　だいたい昨日今日話しただけで、いきなり告白もないと思うが、男女の恋愛、会話とはそんなものである。
　とにかく、豊の言葉は、１００％冗談であると一掃されてしまった。
　しかし豊は、これもアリなのではと思った。
　本当の事を言えば誠意は示せるし、冗談だと思われるなら、その方が都合が良い。
　豊は、今度は軽い感じで、さも冗談であるかのように、本当の事を話した。
「いや、まあ聞いてくれ。音子が未来から来たのは先週の木曜日、僕が学校に向かっている時だ

った。気持ちいい青空に、僕は空を見上げた。すると空に、なんと空飛ぶ猫がいるではないか。僕は目を疑った。」
　豊がそこまで話すと、椎名は「本当なの？」と、先ほどとは打って変わって、真剣な面持ちで尋ねてきた。
　人間とは不思議なものである。
　真剣に言えば嘘だと理解し、軽薄に話せば本当だと思う。
　でもこれは、豊の不思議の中では不思議ではない。
　きっとこれは、心理学的に説明できるはずだと思っていたから。
　まあそんな事はどうでもいい。
　とにかく今、椎名は本当なのかと尋ねてきていた。
　それに対して豊は返答を求められている。
　椎名の目が真剣だ。
　さて、どうしたものか。
　豊は少し考えた。
　だが、此処で否定する選択肢は、豊には存在しなかった。
　さっきまで、話す事は既に決めていたのだから。
「うん、本当。証拠は見せられるかどうかわからないけど、音子に会えば、もしかしたら見せられるかもしれない。」
　豊の言葉に、椎名は、先週の金曜日の事を思い出していた。
　実は豊と菜乃のやりとを、椎名は少し見ていたからだ。
　そう、あのパンティーとかブラジャーとか言っていた会話だ。
　その中で「親戚の子が来ていて、着る物が無くて困っている」と言っていた。
　着る物が無くて困るなら、本人が買いに行けば済む事。
　でも、それが無理な場合。
　ようするに１着も着る物が無かったって事だ。
　椎名はそこまで考えて、声を上げた。
「えー！！」
　豊は、一体何に驚いているのかわからなかった。
　だけど、この不思議な出来事を共有できる人が、豊にできつつあった。
　豊は結局、音子との出会いから、音子から色々説明された事までを、椎名に話した。
　そして決め手とばかりに、意気揚々と携帯電話に撮影された、音子の裸の写真も見せた。
　田舎道にポツンと座る姿は、無理やり撮ったわけでもなく、椎名が見ても不自然な写真だった。
　そう、本当に猫のようだった。
　ただ、その写真は削除するべきだと椎名は豊に要求したが、豊はこれは削除してはいけない気がして、結局消さずに残した。
　豊と椎名は、その日はそこで別れて、後日、音子を含めて会う事を約束した。

豊が家に帰ると、待ってましたとばかりに、音子が豊に抱きついた。
豊は、もしかして何か情報が見つかったのかと思ったが、聞いても音子は、話をはぐらかすばかりだった。
「どうしたの音子。何か見つかったの？」
「ん～なんの事なのさ。豊が帰ってくるのが遅くて、私は寂しかったのさ。」
豊は、音子にそんな事を言われて、少し嬉しい気持ちにもなったが、様子がおかしいので素直には喜べない。
豊は音子の言動をよく観察してみた。
すると、どうも音子がこの世界に来た理由、人探しに関する話しになると、話をそらす。
そして豊を、ある特定方向には行かせないようにしているようだった。
豊に考えられる事は、一つであった。
「もしかして、パソコン壊しちゃったとか？」
豊がそう言うと、音子は明らかに動揺した。
「ドッキーン！なんの事なのさ。今日はパソコン触ってないのさ。」
自分で自分の動揺を「ドッキーン！」とか言って表現する人はなかなか貴重だ。
動揺を装う為に冗談でやる人は多いが、素でやっても意味がない。
要するに、音子はパソコンを壊してしまったって事だ。
「なにー！」
豊は冷静に音子の事を分析していたが、パソコンが壊れた事を確信すると、それはもう困ったとしか言いようがなかった。
今やパソコン無しで生活するなんて、豊には考えられない。
勉強の調べ物も、全てパソコンでやっている。
インターネットが普及して、インターネットに依存して、インターネットに命をかける、豊は今時の若者そのものだった。
いや、命をかけるってのは言いすぎでした。
そこまででではありません。
でも、パソコンが壊れては、人探しが困難になる事は確実だった。
「あ、悪かったのだ。壊すつもりはなかったのだ。」
豊がパソコンに触ると、音子は隠蔽《インペイ》を諦めて、素直に謝った。
豊は、別に音子を責めるつもりはなかった。
もともと、バカな音子にパソコンで探すように指示したのは、自分なのである。
それに、何もしないで部屋で待つのは、きっと寂しいだろうと豊は考えていたので、音子に対して少しの罪悪感もあった。
「想定内」そう思って、豊はパソコンを立ち上げてみた。
パソコンは、問題なく立ちあがった。
「なんだ、壊れてないじゃん。」

　豊がそう言った瞬間、画面に猫の画像が無数に表示され始めた。
「猫の写真を見つけたから、他にもあるかなって思って、猫の写真を探していただけなのさ。そしたら突然こんな事になったのさ。」
　この症状は、明らかにウイルスである。
　どうやら猫の画像を探しているうちに、ヤバイサイトにアクセスしてしまったのだろう。
　そんなに悪質なウイルスではなさそうだが、駆除しない限り、まともにパソコンを使う事はできない。
　豊は、ウイルス対策ソフトを、インストールしていなかった。
　理由は、特に変なサイトを見る事もないし、今まで長くパソコンを使っているが、ウイルスに侵された事が無かったから。
　音子に使わせる前に、ウイルス対策ソフトを入れておけば良かったと思ったが、今更である。
　それに、音子が猫の画像を見ていたってところに、豊は心が、なんとも言えない気持ちになっていた。
　人間だって、男なら可愛い女の子の写真を見て嬉しいし、女もきっと格好良い男の写真を見て喜んでいるのだろう。
　猫だって、同じなんだと思うと、豊は嬉しくて暖かい気持ちになった。
　しかし、このままパソコンを使えないままにしておくわけにはいかない。
　人探しには欠かせないアイテムだ。
　かといって、修理に出すにしても、先立つものがない。
　なんせ今月は、女性用の服や下着やらを沢山買ったから。
　流石に親にお金を要求するのも嫌だし、豊は明日、とりあえず三杯に相談してみる事に決めた。
　その後豊は、今日の事を音子に話した。
　昨日会った、探していた男性と一緒にいた椎名に、音子の事を話した事を。
　そしてその男性が、椎名の兄である事を。
　豊は、音子の事はなるべく隠しておかなければならないと思っていた。
　未来からタイムトラベルしてきたとか、世界線を超えて来たとか、そんな話は普通ではないし、隠しておくのは当たり前の事だ。
　いや、少なくとも豊の中では、隠しておくのが当たり前の事。
　それをしなかった事が、豊にとっては音子に対しての罪悪感となっていたが、音子はそんな事全く気にしていなかった。
「話しちゃってごめんね。」
「謝る意味がわからないのさ。音子は猫だし、世界線を飛んできた事は事実なのさ。」
　音子の言葉に豊はハッとした。
　自分がどうしてあやまったのか、一瞬理解できなかった。
　豊は考えた。
　もちろん、こんな話が広まれば、音子の身の安全が損なわれる可能性がある。

だから自分は話さなかったのだろうか。
ただの思いこみ、概念、固定観念に自分がとらわれている事を、豊はなんとなく自覚した。
豊は、音子との出会いで、何かが変わり始めていた。

　この日、転校生は学校に来なかった。
　昨日あれほど豊に話しかけていた幸恵の席には、花瓶が置かれていた。
　豊はそれを見て動揺した。
　川上さんが死んだのか。
　いやでも、１年後音子に話をするまでは、生きているのではなかったのか。
　豊は椎名を見た。
　椎名も豊を見ていた。
　目が合うと、椎名はただ首を横に振った。
　豊は動揺で、予習する事も、冷静に周りを見る事もできなくなっていた。
　朝のホームルーム、すぐに佐々木先生が教室へと入ってきた。
　するとすぐに、幸恵の机に置いてある花瓶に気がついた。
「ん？何故そんなところに花瓶が置いてあるんだ？日直、元の位置に戻しておいてくれ。」
　担任の言葉に、どうやら悪戯たった事が判明した。
　豊はホッと安心した。
　（全く、いったい誰だよ！）と、豊は心の中で思った。
　豊は落ちついてくると、何故此処まで心配してしまっていたのか、急に自分に疑問が生まれた。
　相手は昨日初めてあった子だ。
　ただのクラスメイトの死だったら、きっと此処まで心配しない。
　いや、正確に言うなら、必要以上に心配そうな顔をして、自分はショックを受けている事を主張するだろう。
　そう、冷静に受け止める自分が、何処かに残っているはずだ。
　でも今は違った。
　豊は本気で動揺してしまっていた。
　自分がどんな顔をしていたのかさえ覚えてはいない。
　ただ、冷静になってくると、豊にはその理由が分かった気がした。
　全てはきっと、音子なのだろうと。
　豊が音子と出会って、まだ一週間も経っていない。
　が、音子は豊にとって、何やら大きな存在になってきていた。
　さて、死んだわけではなかった幸恵だが、学校に来ていない事は変わらない事実だった。
　転校そうそう休みだなんて、何故だか豊は気になっていた。
　（まったく、音子と会ってから色々な事が起こる。）
　豊は考えていた。
　音子に会い、久しぶりに菜乃と話し、三杯の妹ののぞみに買い物を手伝ってもらって、可愛い転校生が来て、１カ月話した事もなかったクラスメイトの椎名と一緒に、ファストフード店に

も行った。
　それも、たった５日間にあった事だ。
　豊には今まで、これほど色々な事が続いた記憶なんてほとんどない。
　普段なら、誰かと話す事さえそれほどない。
　スーパーで買い物をするにしても、全くコミュニケーションなんてない。
　発声は、授業で当てられた時と、昼休みに三杯と話す時だけだった。
　そんな事を考える中で、豊は、今日幸恵が休んだ事には、何か意味があるのではないかと思っていた。

　昨日あれほど椎名と話をしていた豊だったが、今日は話をする事は無かった。
　休み時間は、今までどおり予習復習する時間に充てていた。
　昼休みは、いつものように三杯と食堂へと向かった。
　豊はそこで、三杯にパソコンの事で相談していた。
「パソコンがさ、ウイルスに侵されちゃってさ。三杯そういうの得意だろ？直せないかな？」
　豊は目の前の海老フライ定食を食べながら尋ねた。
「ああ、ウイルスに侵される事十数回。対応は任せておけｗ」
　三杯の発言は、感心できる事ではなかった。
　失敗は成功の元だし、失敗があるからこそ、対処する術を学ぶ事ができる。
　だからバカにはできないが、できれば対処する事の無いまま過ごせるのが一番良いと、豊は思った。
　だいたい、失敗して学ぶなんておかしいと、豊は考えるところがあった。
　失敗する前に、準備や学習はできる環境にある。
　そう、今ではインターネットがあるのだから。
　調べられない事など、ほとんど有りはしないのだから。
　だけど、パソコンが壊れてしまっては、その直し方もわからない。
「よろしく頼む。」
　豊は、十数回もウイルスに侵される三杯に不安を感じたが、此処は素直に頼る事にした。
「で、どんな症状なんだ？」
　三杯は少し偉そうに、豊の海老フライ定食の海老を一匹、箸に突き刺して、自分の口の中に入れた。
「いや、なんか猫の写真がいっぱい出てきてさ。画面を埋めちゃって操作できないんだよ。」
　豊は何食わぬ顔をして、三杯の竜田揚げ定食の竜田揚げを、ちょいと箸でつまんで口の中に放り込んだ。
「ああそれか。猫ウイルスだな。別に大したウイルスじゃないけど、珍しいのに感染したな。」
　三杯は、豊の前にあった味噌汁のお椀を手に取ると、豆腐とわかめを掻《カ》っ込んだ。
「珍しいのか。どういうふうに珍しいんだ？もしかして直せないか？」
　豊は、三杯の皿の上に並んでいるプチトマトを、グザグザと箸でつつきまくった。

「専門誌では、感染例がほとんどみられないから、感染すると運が良いとまで言われるウイルスだ。直せるが、ＰＣに大切なファイルは入っているか？」
　三杯は、豊のご飯につまようじを突き立てていった。
「そうなんだ。今まで撮った写真とか、勉強用のファイルがあるから消したくはないな。」
　豊はテーブルにあったタバスコを、三杯のご飯にたっぷりかけた。
「そっか。なら１週間放置すれば、症状も治まるらしいぞ。最後に怪しいメッセージが出るらしくて、それ見たさに、感染したいって人もいるからな。」
　三杯は、豊の味噌汁を自分のご飯にかけ、食べ始めた。
「辛いの意外と平気なんだ？じゃあもっとかけるか。」
　豊は再びタバスコを、三杯の食べている味噌汁かけご飯に振りかけた。
「って、俺達、何やってるんだ？」
「仁義なき戦い？」
　今日の食事は、二人にとって忘れられない食事となった。
　豊は、二度と戦争はしないと心に誓った。

　結局今週、転校生の幸恵が登校してくる事はなかった。
　もしこのまま登校してくる事なく、幸恵が豊の前に現れる事が二度となかったら、それは生きていても死んでいても同じ事である。
　少なくとも、この豊の世界線の中では、必要の無い存在と認識されるだろう。
　それだときっと、１年後、死へと向うに違いなかった。
　幸い先生からは、体調不良で休んでいると伝えられており、豊は安心していた。
　土曜日の放課後、豊は椎名と久しぶりに話をしていた。
　話すネタがなければ、特に友達というわけでもないし、こんなものである。
　ただ今日は、音子を交えて会おうという話になっていたから、どちらからともなく話かけていた。
「じゃあ僕は、一旦帰って音子をつれてくるよ。桜花公園に２時半で。」
　豊は、現在の時間と往復時間を計算して、少し余裕を持った時間を伝えた。
「うん。分かった。２時半ねｗ」
　椎名は笑顔でそうこたえると、他の友達と連れ立って帰って行った。
　向こうから「あんた山下と仲良いよね？」とか「なんで山下なの？」なんて台詞が聞こえてきたが、豊は特に何も思わなかった。
　普通の学生、普通の女の子なら、自分みたいなのと話をしていたら、そう言われる事は、豊の想定内であったから。

　豊が音子をつれて、桜花公園に到着したのは、２時半まであと５分という時間だった。
　これは、豊の予定よりは１０分ほど遅い時間であったが、待ち合わせ場所に行くには丁度良い時間でもあった。
　予定より遅れたのは、音子が支度に手間取っていたからであるが、女の子だからというわけではない。
　ただ単に、出かける準備をせず、部屋着のままでゴロゴロしていたからだ。
　この辺り、音子の行動は、猫そのものであった。
　好奇心旺盛ではあるが、興味を引くものがない時は、常にゴロゴロしていた。
　音子が準備をする間、豊は買い置きしてあったパンを２つ平らげた。
　今日の昼食である。
　音子には先に食べておくように言っていたが、結局食べる時間がなく、鞄にいれて家を出た。
「おなかすいたのさ。」
「ちゃんと先に食べておくように言ったのに。じゃあ、あのベンチに座って食べよう。」
　豊が公園のベンチに座ると、隣に音子が座って、鞄からパンを取りだした。
　一応言っておくが、音子は既に人間になっているのである。
　だから玉ねぎでもなんでも、人間が食べられるものは、当然食べる事ができた。

ただし、玉ねぎはやはり、嫌いな食べ物ではあるようだった。
音子は、とても嬉しそうな顔でパンにかぶりついていた。
表情豊かな音子の食べ方は、多少お行儀が悪い感じもするが、見ていて微笑ましいものだった。
要するに、子供が一生懸命食事をしているようだった。
子供の食事って、見ていて微笑ましいよね？
音子がパンを一つ食べ終えたところで、豊の視界の隅に、椎名が歩いてくるのが見えた。
時間は２時半丁度だった。
私はいつも思うのだが、女の子と待ち合わせすると、時間丁度に来る事って多いよね？
どんな魔法を使っているのかと、思う事がよくある。
椎名もまた、私の中の女性を、忠実に実行していた。
「やっ！」
椎名はベンチに座る音子をチラッと見てから、豊に手を挙げた。
「豊に手を挙げる」って表現は少しおかしいかもしれないが、これは、豊に敬礼するような感じで、しかしそこまでしっかりしていない動作を表現したものだ。
これからもこういった、おかしいかもしれない表現をする事が多々あると思うが、それは心で感じていただきたい。
「やあ！」
「ニャー！」
豊も椎名と同じように、椎名に手を挙げ返した。
音子は立ちあがり、両手を挙げて挨拶していた。
その姿は正に子供で、女性でも萌える姿であったと、私は伝えておく。
その音子を見て、椎名は少し考えるそぶりを見せた後、「んー。やっぱり同じにしか見えないんだけど、川上さんじゃないんだよね？」と言葉をもらした。
「ん？川上さん？なんの話なのだ？」
音子は、頭にハテナマークが見えるような顔をした。
「前に話しただろ？川上さんっていう、音子にそっくりな人が、クラスに転校してきたって。」
豊の言葉にも、音子の頭のハテナマークは取れなかった。
「あれ？僕、話してなかったっけ？」
すると椎名も、話しに入っていった。
「そうなの、音子ちゃんにそっくりな幸恵ちゃんって子がね。音子ちゃんかと思ったよ。」
椎名がそう話すと、音子は何かを思い出したようにハッとした。
「あ！！幸恵！！会いたい！！」
音子はとてもうれしそうな表情をした。
だけどすぐ、表情を曇らせて「幸恵も助けたい・・・」とつぶやいた。
音子は、人間になってから一番最初に会った、自分にそっくりな子の事を思い出していた。
少し儚げな印象を持つその女の子は、今思えば明らかに、死ぬ直前を感じさせるものである事

は理解できる。
　そして今、椎名の言葉に、その女の子の名前が幸恵であった事を思い出した。
「やっぱり、音子が最初に会ったのは、川上さんだったのか。」
　この時、豊の頭の中では、色々な考えが渦巻いていた。
　月曜日、幸恵がやたらと絡んできたのは、やはり何かを知っているからかもしれない。
　もし、幸恵を助ける為に今動いたら、音子はこの世界に来る事がなかったとか、そんな風になってしまうのではないか。
　それとは逆に、何かしなければならないのかもしれない。
　豊はそんな事を考えながら、険しい顔をしていた。
「ちょっと、どういう事？助けたいって、何かあるの？」
　よくわからない椎名としては、当然の疑問である。
　実は椎名には、音子の「死期の近い人が分かる力」については、話していなかった。
　正確には、世界線の未来が短い人を感じる力ではあるが、死期を悟れる力と言っても差支えないだろう。
　椎名に話していなかった理由については、人間なら理解できると思う。
　兄がもうすぐ死ぬ事を、伝えるのが嫌だったからだ。
　だけど、もう時間も無いし、今日話せればと豊は考えていた。
「幸恵に、会いに行きたいのさ！」
　音子は、椎名の言葉を聞いておらず、とにかく幸恵の事で頭がいっぱいのようだ。
　豊は二人に対して、とりあえず一つ一つ話をしていった。
「渡辺さん、それに関して今から話すよ。音子、川上さん・・・幸恵と会いたいのは分かったから、まずは渡辺さんのお兄さんの事を先に、ね。」
　豊の言葉に、音子はハッとして「そうだったのさ。」と、舌を出しておとなしくベンチに座った。
　でも椎名は、豊の言葉を当然スルーする事はできなかった。
「ん？私のお兄ちゃんがどうかしたの？」
　豊が険しい顔をしていた事、音子が助けたいと言った事、これらから不安がわき上がってきていた。
　それに、未来から来たと言っているのだ。
　未来に何かがあったのかと考えるのは当然であった。
　といっても、全ては豊の話を信じていた場合である。
　つまり、椎名は豊の信じがたい世迷言を、信じているというわけだ。
　ちなみに「世迷言」というのは「言っても無意味な不平不満」という意味であり、表現としてはおかしいが、気持ちでとらえて欲しい。
　ついでにもうひとつ言っておくと、おそらく椎名の世界線は、きっと中心付近からそれなりに離れていると予想される。
　まあそんな事は、どうでもいい話ではあるが。

　さて、椎名の質問に豊は、音子が大人しくなった事を確認してから、ゆっくりと話し始めた。
　今まで話せずにいた事を。
　椎名の兄の命を救うのに、椎名に協力を求める為に。
　豊はまず、音子の能力について話し始めた。
「前にも話したけど、音子は、命の恩人の命を救う為に、未来から来た。」
　豊のその言葉に、椎名は頷いた。
「時間、世界線、場所などは、以前に話したとおり。１時間遡《サカノボ》るのに１時間、時間は、地球上での移動距離、そして時間軸内での移動距離も比例する。」
「そうなのさ。音子の世界線から此処までは凄く遠いので、音子は１年かけて此処までやってきたさ。」
　豊の説明に足りない部分を、音子が埋めた。
「たとえばＡさんの世界線へ移動するとして、５日かかるとしよう。でもＡさんが１年前に死んでいたとしたら、Ａさんの世界線には移動できない事になる。」
「正確には、Ａさんの世界線への移動は、回り道して１年以上かけなければならない事になるのさ。」
　ちなみに、豊にも音子にも、わからない事がある。
　果たして音子は、未来に飛ぶ事ができるのだろうかという事。
　豊は、音子の口ぶりなどから、おそらくは過去にしか飛べないと推測していた。
　でも未来は、何もしなくてもやってくるもので、特に話す必要はないかと考えていた。
「要するに、１年飛んできた音子には、１年以内に死んでしまう人が分かると思われる。」
　豊のこの推測や考えは、ほぼ当たっていた。
　そこまで聞いて、椎名は理解していた。
「もしかして、川上さんやお兄ちゃんが、１年以内に死んじゃうって事？」
　まだ、実際に死んだ人を見たわけでもないし、１年というのは豊の憶測にすぎない。
　だけど此処は豊の世界なのである。
　豊がそうだと確信すれば、それが当然となり得るのだ。
「うん、川上さんはまだ実際に会ってないから確認が必要だけど、お兄さんは先週会っていて、音子が見てそう感じたみたい。」
　話の流れから豊は、ようやく言わなければならない事を言えた事に、ホッと胸をなでおろしたが、気持ちは重かった。
「だから、お兄さんを助ける為にも、椎名に協力してほしいのさ。」
　豊の言葉に、音子が思いをつけたした。
　椎名は、音子の言葉に一つ溜息をついてから、質問してきた。
「助けたい、けど、何をしたらいいのかな？」
　その答えは、実は豊にも音子にも分からなかった。
　会えば助けられると思っていたけれど、どうやらそれだけでない事は、先日会った事で証明されている。

音子の命の恩人は、会えば助けられるという事だが、豊は、それも少し疑問に感じていた。
豊は正直にこたえた。
「実は、よくわからないんだ。だから、渡辺さんのお兄さんの事、色々教えてもらえないかな？」
豊の言葉を聞き、椎名はうつむいて口をつぐんだ。
表情は寂しそうで、話したくないというよりは、思い出したくないといった感じが伝わってきた。
もしかしたら椎名にも、兄の命が危ないかもしれない事は、別の方向から感じていたのかもしれない。
豊はそう思った。
しばらく、椎名が何か言ってくれるのを待っていると、ようやく椎名が重い口をあけた。
話しの内容は、悲しい現実だった。
豊と音子は、ただ聞き続けていた。
椎名は、兄の和也とは実の兄妹で、とても仲良しだった。
両親とも仲良しで、傍から見れば、理想的な家庭に見えた。
だけど、実は父親は、椎名が生まれる前から、ある女性と浮気をしていた。
そしてそれは、数年前に母親の知るところとなった。
浮気がばれただけなら、此処まで話がこじれる事は無かっただろうが、問題は、椎名の名前だった。
浮気相手の苗字が、椎名だったのである。
要するに、浮気相手の苗字を、実の娘の名前にしていたのだ。
それにショックを受けた母親は、離婚を決断。
椎名は母親に、兄の和也は父親について行く事なった。
兄が父親について行く事になったのにはわけがあった。
母親がショックからか、実の息子であるのにも関わらず、男性というだけで、和也の事が信じられなくなっていたからだ。
人間不信、男性恐怖症と言ってもいい。
とにかく椎名が、兄や父親に会う事はほとんどなくなってしまった。
両親が別れてからすぐ、父親は浮気相手である「椎名恵美」と結婚した。
兄はグレて、気がつけば不良と呼ばれるようになっていた。
そんな中、父親が風邪をこじらせ肺炎になり、呆気なくこの世を去った。
兄は、父親の浮気相手である恵美と二人で暮らす事を嫌い、一人家を出た。
先日、椎名が兄と会っていたのは、兄がお金を貸して欲しいと連絡してきたからだった。
椎名からは、連絡する術はない。
ただ、さつき町にいるのではとの事だった。
そんな話を椎名から聞かされ、豊は正直後悔していた。
こんな事、友達とも言えない自分が、聞いて良かったのだろうか。

　どうして自分の、戯言《ザレゴト》ともとれる話を信じて、こんな大切な事を話してくれたのだろうか。
　だけど、目の前で今にも泣きだしそうな椎名を見ると、聞いてしまった以上、なんとかしなければならないと思った。
　それに、隣で泣きながら、豊の服の袖で鼻水を拭いている音子を見ると、絶対助けなければと思わずにはいられなかった。
　豊は立ちあがった。
「行こう！さつき町に。お兄さんを探しに。」
　三人は、椎名の兄和也を助ける為に、さつき町へと向かった。

　三人はさつき町を探しまわったが、和也の姿は何処にもなかった。
　辺りの景色は真っ暗で、夜の町へと変わっていた。
　それでも誰も、帰ろうとは言いだせなかった。
　音子からは、もちろん何処までも探し続けたいという気迫が感じられた。
　椎名も、心配で帰ろうなんて微塵《ミジン》も考えていないようだった。
　結局、帰る事を考えているのは、自分だけなのだと豊は思った。
　そんな自分が、少し嫌になっていた。
　さつき町は、このあたりでは比較的大きな町だが、東京都心部の繁華街とは比べる由もない。
　東京の住宅街の駅前だけを切り取ったような、そんな町だ。
　駅前だけはソコソコ人通りはあるものの、少し離れると暗くて、都会に住む人なら怖く感じるくらいだ。
　２２時を回り、流石に音子にも椎名にも、疲れが見え始めていた。
　食事も昼に食べたパンだけだ。
　そろそろ潮時だろうと、豊は思った。
「今日は・・・」
　一旦帰って、また明日にしようと、豊は言おうとした。
　だが、その言葉は途中で遮られた。
　少し離れた路地から、男性のうめき声のようなものが聞こえてきたからだ。
　それを聞いた途端、椎名は「お兄ちゃん！」と言って走り出していた。
　音子もそれに続いて走り出した。
　豊は一瞬、足がすくんだ。
　どう考えても、豊の想像では、喧嘩していると思えたからだ。
　それでも、音子の後ろ姿を見ていると、自然と足が動いた。
　三人が走って向かっている間も「踏み倒そうとはいい度胸だな！」とか「金を持ってるんじゃなかったのか！」とか、瓦礫が崩れるような音と共に聞こえてきていた。
　一足先に路地の入口についた椎名は、奥へ向かって「お兄ちゃん！」と叫んだ。
　その横に、音子がぴたりとくっついた。

やや遅れて豊が、音子の横へと駆け寄った。
路地の奥では、血まみれになって倒れた、和也の姿かあった。
その前には、男が二人立っていた。
豊はビビった。
今すぐ逃げ出したいと思った。
今まで必死に勉強してきたのはなんの為だったか。
特に良い事なんて無くていいから、平凡で平和な人生を送りたいと思っていたからだ。
それがどういう訳か、自ら進んで、身を危険にさらすような場所に来ている。
一人の女の子、音子の願いをかなえる為だけに無茶をするのも、いつの間にか許容している自分に失笑がもれた。
ただ、この状況を打開する術は、豊には思いつかなかった。
二人の男が、豊たちを見た。
「お兄ちゃんだ？」
「てめぇ、妹がいたのか？」
なんて事を言いながら、ニヤニヤしながら見ていた。
一人の男が、和也を蹴ってからこちらに歩いてきた。
和也は、もう声も出ないようだった。
「やめてください！お金なら、私が出しますから！」
椎名の言葉は、まるで夢の中にいるような感じで、豊の耳に入っていた。
豊の横では、音子が少し震えていた。
椎名は、こんな状況でも、兄の為に必死だった。
人通りもない。
辺りはかなり暗い。
豊は命の危険さえ感じていた。
きっと、命まではとられやしない。
日本では、そんなに殺人事件なんて起こるものではない。
でも、殺人事件に巻き込まれる可能性は、ゼロではないんだ。
そして今回は、自ら進んでこんなところにまで来ているのだ。
もしかしたらと、豊は思った。
「２０万用意できるのか？」
「えっ？それは・・・」
椎名は泣いていた。
豊はなんとかしたいと思いながらも、他の事も考えていた。
僕が此処にいるのは「女の子を置いては逃げられない」と思っているからではない。
「女の子を置いて逃げたら恥ずかしい」から、逃げないだけなんだ。
豊は自分の事を、最低だなと思った。
見ているしか、僕にはできないんだと思った。

　こちらに近寄ってきた男が、椎名の腕をつかんだ。
「おお！妹さん、なかなか可愛いじゃねぇか。これなら・・・」
「イヤだ！離してください！」
　椎名の叫びに、豊の中で何かがはじけた。
　椎名は友達でもなんでもないけれど、とても良い子で、嫌いじゃなくて、幸せになって欲しくて、不幸になってはいけないと。
　友達を守らないと・・・
「椎名をはなせーーー！！！」
　豊とは思えない、大きな声だった。
　声は、辺りに響き渡った。
　腕をつかんでいた男は、腕をつかんだまま目を丸くしていた。
　遠くから「どうしたー？！」と、声が聞こえてきた。
　警察が駆けつけて来てくれていた。
　男は慌てて椎名をつかむ手を離し、二人逃げて行った。
　間もなく、救急車のサイレンの音が聞こえてきた。
　警察が駆けつけた後、和也はすぐに救急車で運ばれた。
　椎名は和也に付き添い、一緒に救急車に乗って行った。
　豊と音子は、事情聴取とか言われて、警察に連れて行かれそうになったが、たまたまその場を目撃した事にして、いくつかの質問に答えるだけで帰る事ができた。
　身元とか調べられたら、音子の事はどうにも説明できないので、豊は助かったと思った。
　音子は帰る途中、ずっと笑顔だった。
　豊が叫んだところで、和也の死が回避されたのを確認できたようだ。
　豊は何故そこで、死を回避できたのか、考えなければならなかった。
　何が人を救う事になるのか、どうしたら人を助けられるのか、知っておく必要があると思ったから。
　その時の自分の感情や、言った事を思い出した。
　（そういえば僕、椎名って呼び捨てにしちゃったな。きっと椎名って呼ばれるの、嫌だろうに。）
　そんな事で運命が変わったと思えなかったが、椎名を通して何かが変わったのだろうという事は確信が持てた。
　何故なら、結局和也とは話しもしなかったし、怪我が酷くて、見る事もあまり無かったのだから。
　何はともあれ、椎名が最悪の不幸にならなくて良かったと、豊は思った。

## 豊の変化

　次の日の日曜日は、豊も音子も、何をするでもなく、部屋でゴロゴロしていた。
　音子は、怖かった事とか、意外とスッキリ忘れているようで、テレビのＣＭを見て大笑いしていた。
　昨日の出来事を考えると、豊は勉強する気にもなれなかった。
　刺激の強い経験をすると、人生自体見つめ直す機会になる事はよくある話だ。
　豊にとっては正に、最近の出来事全てがそうであり、刺激としては、昨日の出来事は大きな影響を受けるものだった。
　勉強ばかりしていて、その知識が昨日、何か役にたったのだろうか。
　体を鍛えてばかりいる男を見て、そんなもの、今の世の中には不必要だと思っていたけれど、昨日のような場面では、むしろそちらの方が必要だったのではないだろうか。
　勉強をする事が無駄だとは思わない。
　でも、それだけでは駄目なのだと、豊は考えるようになっていた。
　豊は、ふと部屋を見渡した。
　そこには音子がいて、そして自分がいる。
　ついこの前までは、こんな状況は絶対にあり得ないと思っていた。
　それが今では当たり前で、こんな生活も楽しいと感じている。
　豊は、自分が少しずつ、いや、大きく変化し始めている事を、自覚していた。
　そして、今までの自分は、実は最初から、全て諦めていたのではないだろうかとも考えていた。
　だから少しだけ、自らの力で、自らを変えてみようと思った。
　豊は早速、両親に電話した。
「もしもし、僕だけど。勉強する為に今の高校にきたんだけど、どうしてもさ、今やっておきたい事ができてさ。成績落ちたらゴメン。」
　両親には迷惑はかけたくないし、期待にはこたえたい。
　でも、勉強だけでは駄目だと感じたから。
　結局この日の豊は、音子と一緒にテレビを見て、笑ったりじゃれ合ったりして、一日を終えた。
　月曜日、豊はいつもよりも少しだけ早起きして、１０分ほどだが、その辺りを走ってきた。
　スポーツが全く駄目というわけではないが、こんな事をするのは人生で初めてだ。
　豊は流石に疲れたようだが、朝食はいつもよりも美味しく食べる事ができた。
　音子を部屋に残して学校に行くのも、もう慣れてきてはいたが、やはり寂しい思いをさせているのではないかと、出かける時は後ろ髪を引かれる思いだった。
　学校に着くと豊は、積極的にみんなに挨拶しよう、と思ったわけだが、いきなり変える事は出来なかった。
　いつものように、黙ったまま教室に入り、挨拶してくる人には軽く挨拶を返した。

豊は席につくと、１時間目の予習をする為に、教科書とノートを取り出した。
本当はクラスメイトと、世間話に花を咲かせる事ができれば良いなと思っていたが、結局今までと変わらなかった。
豊自身も（ま、ゆっくり変えていければ良いかな？）なんて思っていた。
そんな事を考えいてると、何時の間にか、椎名が豊の前の席に座って、豊の方を向いていた。
「おはよｗ」
椎名は、土曜日に色々あったにも関わらず、いつもと変わらない笑顔だった。
というか、今まで以上の笑顔だった。
「うん、おはよう。」
豊は、椎名に対して罪悪感があった。
結局何も助けてあげられなかった事はもちろん、椎名の家庭の事情を知った上で尚、椎名と呼んでしまった事に。
だから謝ろうと思った。
だけど、それよりも先に、椎名がお礼を言ってきた。
「土曜日はありがとう。嬉しかったよｗ」
嬉しかった？豊は疑問に思った。
嬉しく思われる事なんて、何もしていない。
むしろ恥ずかしくて、何もできなった事が悪いと思っていた。
「いや、何もできなくてごめん。それに渡辺さんの事、椎名って呼んじゃってごめん。」
だけど椎名から、豊の予想しなかった言葉が返ってきた。
「別に良いよｗ椎名って呼んでも。じゃあ私も豊って呼んじゃうもんねｗ」
豊は思った。
（あれ？これって、よく小説やドラマで見かける展開だよね？それも恋愛ものの。）
豊は急に照れくさくなってきた。
冷静に考えれば、女の子と普通に話している事も、豊には不思議に思えた。
だけど、あり得ないとは思わなかった。
これがきっと普通なのだと思った。
豊は携帯電話をとりだした。
理由は、別に音子の写真を見ようというわけではない。
当然椎名と、番号とアドレスの交換をしようというのだ。
ちなみに、豊は此処までの人生で、同級生の女子に、自分から携帯電話の番号の交換を要求した事はなかった。
だけど、ごく自然にそれはできた。
「アドレス交換しよｗ」
「うんｗ」
と言っても、登録されている電話番号は、実家、自宅、三杯の番号、他は色々なサポート用電話番号だけで、赤外線での交換などしたことがない。

　だから番号の交換は、全て椎名に教えてもらいながらする事になった。
　交換が終わった後、豊は重要な事を話すのを忘れているのに気がついた。
「あ、そうそう、最初に言うべき事だと思うんだけど、お兄さん、もう大丈夫だって、音子が言っていた。」
　豊は椎名の耳元で、小さな声で伝えた。
　にも関わらず、椎名の反応は大きかった。
「ホント！！」
　そう言って立ちあがった。
　その声と椅子を引く音に、クラスメイトが注目した。
　一応言っておくが、立ちあがる際、椎名からみれば、椅子を押している事は、当然理解しておいてほしい。
　そこで先生が入ってきた事から、特にふたりの事にツッコミを入れる人はいなかったが、一人だけ、冷たい目で椎名を見る人がいたことに、豊は気がつかなかった。
　昼休み、豊はいつもと同じように、三杯と食堂で食事をしていた。
　今日は珍しく、豊はウニイクラ丼を頼んでいた。
　そんな高価なメニューが、ただの高校の学食に出るのかは疑問だし、豊自身、そんなメニューがある事を今日まで知らなかった。
　だけど今日豊は「嫌いな物でも食べてみるか！」とメニューを探したところ、このメニューを見つけたというわけだ。
　もし豊が、高校を卒業するまで、そんな事を思わなければ、このメニューは此処には存在しなかったかもしれない。
　これは、豊の変化から生じた、この世界の変化であったと言えよう。
　さて、二人の会話は、いつも大した会話ではないが、いや、偶に真面目に話す事もあるが、浮いた話というのはまずあり得ない。
　お互い彼女もいないし、好きな人もいないし、特にモテるわけでもないからだ。
　三杯は意外にモテそうだが、誰とでも仲が良い男ってのはモテなかったりするもので、三杯も例外ではなかった。
　まあそんな二人の会話であるにも関わらず、今日は何やら風向きが違った。
「もしかして豊ってさ、最近、えーっと・・・渡辺椎名だっけ？おまえんとこのクラスの可愛い子。あの子と仲良いのか？」
　豊には思いがけない三杯の発言だったが、特に想定外の話でもなかった。
　別のクラスの三杯が、こんな話を振ってくる事は意外だったが、こういった話はみんな好きだろうし、話題になるのは理解できた。
「ん？どうしてだ？別に悪くはないけど、普通に友達だと思うが。」
　豊は、そんなに話題にされてもよろしくないので、ごく普通の関係を主張した。
　しかし、豊が友達だと言った事で、三杯は、そうとう仲が良いと判断した。
　なんせ豊が友達と言えるのは、この学校では三杯だけしかいなかったわけだから。

「へぇ～やっぱりな。それで山口たちがイジメてたわけね。」
　三杯の言い方は、食事をしながらの何気ない発言だったが、内容はスルーできるものではなかった。
「どういう事だ？椎名がイジメられてたのか！？」
　豊は少し険しい顔をして、三杯に詰め寄る勢いだった。
「大丈夫だよ。渡辺・し・い・な・さんは、山口たちに負けてなかったよ。」
　三杯は尚も落ち着いて食事を続けながら、名前のところを強調してこたえていた。
　もちろん、名前を強調した意図には、豊もすぐに気付いたわけで、少し顔を赤くしていた。
　豊は別に、椎名に恋愛感情を持っているつもりもないし、付き合いたいとも思わない。
　だけど、女の子の友達ってだけで、豊は照れるに十分の理由になっていた。
「そっか。なら良いんだけど。」
　豊は、この話は此処までと言いたげに、ウニイクラ丼を口の中に収めていった。
　だけど豊にとって不味いと感じるその食べ物は、なかなか減らずにいた。
「豊は鈍感だから一応言っておくけど、山口な、１年の時からお前に気があるみたいだぞ。」
　これもまた三杯は、呼吸をするが如く、自然に言葉にしていた。
　だが豊にとっては、それは聞き捨てならないものだった。
「え？それはないだろ？！僕はほとんど喋った事ないし、山口さんの顔すら思い出せないぞ？」
　こちらが知らずとも、相手が想ってくる事はある。
　アイドルなんて、コンサートを見に来てくれた人のどれだけの顔を覚えているだろうか。
　だけど、ファン達は熱い想いをアイドル達によせるのだ。
　豊は自分の言った事に矛盾を感じつつも、言わずにはいられなかった。
「好きになるのは相手の勝手だからな。まあその部分は良いとして、１年の頃から、山口は豊に近づく女をイジメていましたとさ。」
　三杯は、別にこの事を隠していたわけではない。
　ただ、特にそういう話にならなかったからしなかっただけ。
　豊も浮いた話をするのは好きではないようだし、話したところで何も変わらなかっただろうから。
　でも今回、椎名のおかげで、この事が自然と解決しそうだし、もうひとつ気になる事があったから、三杯は話した方が良いと判断したのかもしれない。
　豊は、どうこたえていいのか分からなかった。
　ただ単に「イジメは駄目だろ！」とか「やめさせないと。」なんて言うだけなら簡単である。
　それに三杯の口ぶりだと、既にどうやら椎名が、解決した後のようだ。
　今更何か言っても、口だけの政治家みたいだし、豊はただ一言「そっか・・・」と小さな声でこたえた。
　でも、話はそこで終わらなかった。
「そう言えば先週の月曜だったかな、放課後、桜花町の駅のあたりで、山口たちが転校生とり囲んで、なにやら言っていたな。」

豊は三杯の言葉に、先週の火曜日の朝にあった事を思い出した。
幸恵の机に、花瓶が置いてあった事を。
幸恵が登校してこなくなった事も含めて、豊かが一つの結論を出す事は容易かった。
（もしかしてあれは、山口さんの仕業だったのか。）
豊は無性に腹が立った。
酷過ぎる。
豊はまだ、ウニイクラ丼を食べ終わっていないが、箸を置いて立ちあがった。
一応言っておくが、ウニイクラ丼が不味くて、もう食べられないから、逃げの口実に怒っているフリをしているわけではない。
本気で怒っていた。
「ムカついた。言ってくる！」
この怒りは、あらゆる方向に向けられていた。
当然、いじめていた山口に対してもそうだが、それを見ていたのに何もしない三杯にも。
そして、今までの自分もきっと、関わらない事を選んでいたであろう事に腹が立った。
そんな豊を見て、三杯は少しニヤリと笑顔を作ると、食事を続けながら、シッシッといった感じに手を振った。
豊は廊下を、教室へ向けて競歩していた。
すると向こうから、椎名が歩いてきた。
すぐに豊に気付き、手を振って駆け寄って行く。
「豊ｗどうしたの？なんだか怖い顔してるよ！」
椎名に言われて、豊はハッと表情を緩めた。
だけど、椎名も山口になにやら言われたらしい事を思い出し、再び少し真剣な顔つきになった。
「大丈夫だった？なんだか山口さんたちが、椎名に酷い事言っていたって聞いてさ。」
少し照れながら言う豊の言葉に、椎名は少し嬉しくて、椎名もまた照れていた。
「えっと、大丈夫だよｗ逆に、山口さん泣かせちゃった。」
椎名は少し勘違いしていた。
豊が険しい顔つきで歩いてきていたのは、自分の事を心配しての事だと思っていた。
本当は、幸恵の事で怒っていたわけだが、まあ男と女の間では、勘違いはつきものである。
それに、別に訂正する必要も豊には思いつかなかった。
椎名から、山口さんを泣かせた事を聞いて、少し冷静になった豊は、これ以上はもういいかと思えてきた。
「そっか。」
流石に泣いている人に対して、追いうちをかけるなんてできないしね。
ひとまずこれで、山口さんの事に対しての心のけじめはついた。
だが豊は、今度は幸恵の事が気になってきていた。
イジメが原因で、学校に来なくなったのではないだろうかと。

　豊は、音子にそっくりな幸恵の事が気になって、落ち着いて授業を受けられる状態ではなくなっていた。

　放課後、豊は職員室の佐々木先生を訪ねていた。
「先生、転校生の川上さんの連絡先とかって教えてもらえないですか？」
　豊は、とにかく幸恵が心配だった。
　イジメが原因なら、それも自分と仲良くしていた事でイジメられていたのなら、なんとかしてあげたいと思った。
　もちろんそれだけではない。
　可愛くて、音子に似ていて、とにかく放ってはおけなかった。
　しかし、一度しか会った事のない人を、どれだけ想ったところで、この世の中どうにもならなかった。
「なんだ山下？駄目だぞ。川上は可愛いかもしれないが、いきなり家におしかけるのはどうかと思うぞ。」
　これはもちろん、担任佐々木先生の冗談だが、豊はそれくらいで、はぐらかされるわけにはいかなかった。
「いえ、学校に来なくなったので、心配で、見舞いに行きたくてですね。ああ、もちろん女子も一緒ですよ。渡辺さんも一緒に行きます。」
　椎名の名前を出した事に、豊は少し申し訳なく思ったが、椎名ならきっと一緒に行ってくれるだろう。
　なんせ幸恵は、後１年も生きられない命の人なのだから。
「友達を心配するのは良いんだが・・・当たり前の事だが、個人情報を勝手に教えるのは、法律で禁じられていてだな。先生が教えるわけにはいかんのだ。」
　佐々木先生の言い分は当然だった。
　豊にもそう言われる事は分かっていた。
　それでも、本当に相手を思う気持ちがあるのに、見舞いにも行けないなんておかしいと思った。
　嫌な当たり前に、抗いたかった。
　悪い人の行動を規制する為に、良い人の自由も奪う世の中。
　豊は今まで、それが当たり前だと思っていたが、当たり前では駄目だとも思っていた。
　そして今では、当たり前ではないようにしなければならないとも、考えるようになっていた。
　その後も少し先生に食い下がった豊だったが、結局何も教えてもらう事はできなかった。

# 三毛猫の導き

　家に帰ると、音子がパソコンに向かって奇声を上げていた。
「ちょこざいな！黒猫の方が可愛いと申すのか？！おのれ！三毛猫を混ぜてやるのさ！」
　豊には、全く言っている意味がわからなかった。
　豊が靴を脱いで上がっても、音子は豊の帰宅に気づかず、尚もパソコンと格闘してた。
「ははは～！三毛猫の大行列だｗさて白猫よ、どう出るさ。」
　豊はコッソリ、パソコンのモニターを覗き込んだ。
　ウイルスに侵された状態はまだ改善されていないようだが、なにやら一部、操作が可能になっているようだった。
　猫の写真が無造作にならんでいた先日とは違い、徐々に綺麗に並べられているように見える。
　どうやら猫の写真を利用した、パズルゲームのようだった。
　今日、後数時間以内には、ウイルスは収束すると三杯は言っていた。
　そして最後にメッセージが出るとも。
　その前に、こんな事ができるとは聞いていなかったが、音子が楽しんでいるようなので、豊はそのまま放っておくことにした。
　豊は一旦部屋をでて、夕飯の材料を買いに行った。
　３０分ほどしてから帰ってきたわけだが、音子はまだ何やらやっていた。
「くっ！白猫も黒猫も、ひどいのさ。茶猫まで勢力を伸ばしてきたのさ。」
　豊は買い物を一旦床に置くと、靴を脱いで部屋に上がった。
　そして遠くからパソコンのモニターを見た。
「お？三毛猫かｗ」
　豊は、モニターが映し出す映像を見てそう言ったのだが、音子にはその意味が理解できなかった。
「三毛猫じゃないのさ。三毛猫は残り１匹しかいないのさ。」
　豊は買ってきた物をテーブルの上に置くと、音子の横まで言ってモニターを見た。
　するとそこには、黒猫や白猫、それに茶猫の小さな写真が無数に並んでいた。
　そしてポツンと１枚、三毛猫の写真があった。
　画面の一番上には「あなたの好きな猫はどれ？」と書かれてあった。
　そして「次の写真」と書かれてあるスペースに、黒猫の写真があった。
　音子はそれを、何処に配置しようか悩んでいた。
　このゲームのルールは、豊にはよくわからない。
　次の写真を何処かに置いて、好きな猫の写真を増やしていくようなゲームにも見える。
　でも、豊には次の写真を置く場所は、一つしかないと思えた。
　そう、先ほど遠くから見た時、全ての写真の配置で、一匹の三毛猫が映し出されているように見えたから。
　そして黒い模様の中に、三毛猫の写真が一枚残っていた。

　音子はどうやら、三毛猫の写真の上以外の場所に黒猫を置きたいようで、マウスをウロウロとさせて悩んでいた。
　そのマウスを豊はサッと奪い取って、黒猫の写真を、三毛猫の写真に重ねた。
「うぎゃー！何するのさ！三毛猫がいなくなっちゃったのさ。」
　豊は、立ちあがった音子をそのままひっぱって、部屋の入口まで下がらせて、パソコンのモニターを指差した。
「あっ！三毛猫なのさ！」
　モニターに映し出される三毛猫を見た音子は大喜びで、豊も心が和んだ。
　再びパソコンに近づくと「ミッションコンプリート！三毛猫ルートのフラグが立ちました！」と書かれていた。
　恋愛シミュレーションゲームでもないのだから、そのメッセージの意味は分からないし、ウイルスでゲームとか理解できない。
　それでも音子が喜んでいて、クリアできたというのだから、豊は素直に喜ぶ事にした。
　それから１分もしないうちに、写真が１枚、また１枚と画面から消えていった。
　どうやらウイルスも、収束に向けて動き出したようだ。
　またパソコンは何も操作できない状態になったので、豊は買ってきた物を冷蔵庫に入れて、適当な食材で夕飯を作った。
　夕飯が出来上がる頃、再びパソコンを見ると、写真が全て無くなり、元のパソコン画面に戻っていた。
　そしてその真ん中に、メッセージが残されていた。
「５月２６日午後３時、安田公園中央噴水前にて待つ。三毛猫」と・・・

　豊は、昨日パソコンに表示されたメッセージが気になっていた。
「５月２６日午後３時、安田公園中央噴水前にて待つ。三毛猫」
　ウイルスが表示した、意味の無いメッセージだと言ってしまえばそれまでだが、このメッセージの中には、偶然とは思えない部分がいくつかあった。
　まずは日時だ。
　この日付は、今週末の土曜日の日付であり、豊が行く事が可能な日時が指定されている。
　パソコンに設定されている時間から、適当にその週の週末を指定しただけかもしれないが、それなら日曜日の方が確実ではないかと考えられる。
　次に待ち合わせ場所だが、グーグルマップとストリートビューで調べたところ、音子が移動してきた、ベクトルのラインに近い場所であり、音子が見覚えのある場所でもあった。
　そして最後に、三毛猫。
　三毛猫ルートに入ったのだから、恋愛シミュレーションゲーム的に考えれば、三毛猫が待っているってのは、当然の話の流れではある。
　しかしやはり、音子の操作していたパソコンに三毛猫ってのは、できすぎではないだろうか。
　それに、あのパズルゲームのようなもので、三毛猫を完成させる事ができなかったら、どうい

うメッセージが出てきたのだろうか。
　こんなにも色々な事が偶然に重なる確率は、いったいどれくらいだろうかと、豊は考えた。
　おそらく、限りなくゼロに近いと思う。
　となると、このメッセージを音子が受け取った事は、必然だった事になる。
　豊はそんな事を繰り返し考えながら、学校の授業を消化していった。
　昼休み豊は、一応三杯にウイルスの事を話した。
「あの猫ウイルスな、ゲームできたり、三毛猫ルートに入ったり、意外に楽しめたぞ。」
　楽しんでいたのは主に音子だが、実際ウイルスにしては面白いものだったと、豊も思っていた。
「マジか！って、あの後実は少し調べたんだが、あのウイルスって、特定のＩＰアドレスに、強制的にメッセージを送るのに使われているらしい。」
　ウイルスは犯罪になり得るものであり、決して配布したり、利用したりしてはいけない。
　だけど、そうは言っても、世の中には悪用する人も多く、軽い気持ちで悪戯に使う人や、ウイルスを持っている事を自慢する人さえいる。
「そうなのか？はた迷惑なメールみたいなもんか。」
　豊の印象は、正に的を得ていた。
　一応言っておくが「的を得ていた」と書いたのは、わざとである。
　的を射ても、当たるかどうかわからないし、意味としてどうもあやふやに感じるから、的を得ていたと書いたのである。
　得るとは当たるという意味で、正に豊の発言は当たっていたというわけだ。
「そうそう。だから解除する方法もあるみたいで、いくつかのサイトで紹介されていたぞ？言わなかったっけ？」
　三杯の言葉に、豊は１週間無駄に待たされた気がしたが、たとえ聞いていたとしても、インターネットサイトを調べる術がない。
　いや、学校のパソコンで調べて、プリントアウトして持ち帰っても良かったわけだが、今更なので三杯を責める気にもならなかった。
　だけど、一応お約束というやつだ。
　言っておかなければならない。
「言ってねぇよ！言えよ！」
　うむ、これで全ては丸くおさまる事だろう。
「で、最後のメッセージはなんだったんだ？」
　当然、こんなウイルスを使ってまで送ってきたメッセージだ。
　どんなメッセージなのかは気になるところだ。
　しかし豊は、話す事に少し躊躇した。
　自分は行こうと思っている事、そしてその際、音子を連れていく事に決めていたから。
「いや、なんだかギャルゲーみたいにさ、なん時に公園で待つとか、そんなメッセージだったよ。」

豊は、時間や正確な場所まで伝えるのはよろしくないと考え、あやふやに伝えた。
もしも、音子の存在がなければ、豊はきっと三杯と一緒に行ったに違いない。
もしくは、端から行かない公算が高いか。
だけど、豊があやふやに伝えた事で、逆に三杯の興味を引いてしまった。
「それ、面白そうじゃん。これは誰かからのメッセージなわけだし、実際に待っている可能性があるぞｗ」
豊は考えていた。
三杯に音子を会わせると、色々面倒な気がする。
でも、親友の三杯だし、音子自身話されても気にしていない。
もうこうなったら、普通に話して、成り行きにゆだねようと、豊は思った。
「でもさ、ヤバイ人が待ってるとか、そんな事はないかな？」
「可能性はあるな。その文章正確に、どんなだったんだ？」
あっさりと正確な内容を、三杯に聞かれてしまった。
豊は普通に、その内容を伝えた。
「５月２６日午後３時、安田公園中央噴水前にて待つ。三毛猫、だってさ。」
内容は正確に覚えていた。
なんせ行こうと思っていたから。
「ほう。２６日ってのは・・・週末の３時か。安田公園は知らないけど、案外近くだったらマジかもなｗ三毛猫って名前も悪戯っぽいけど、マジなら女の子の可能性がある。」
三杯の予想は、だいたい豊の考えと一致していた。
近くだったらってところは少し違うが、三毛猫が女の子かもしれないってのは、同意する。
だからこそ、悪意のあるメールではないような気がしていた。
悪意がある場合、大概の場合、女性の名前を使う事が多い。
それが一番、相手を安心させるからだ。
たとえば今回のようなハンドルネームや、有名人などの名前だと、本名を明かさない分警戒心を呼び起こす。
男性の名前だと、一部女の子は気になるかもしれないが、やはり会いに行くには気が引ける。
だけどよくある女性の名前だと、本名を明かしている女性ならと安心感がでてきて、実際にアクセスする可能性は高くなるわけだ。
とは言っても、インターネットをよく知る人たちにとっては、逆に疑われる事になるのである。
というわけで、それなりにインターネットをしている豊や三杯にとっては、安心感が持てるメッセージであった。
「俺も、普通の女の子だと思う。それにこんなやり方でってのは、きっと学生かな？」
豊がそこまで話すと、三杯はこの話への興味を失った。
「ま、好きな男にでも届けば良いと思って出したものだな。三毛猫は、その男が見れば、誰だか分かる愛称なんだろｗ三毛猫なんて知らないし、俺には関係ないな。」

三杯はそう言って立ちあがり、食べ終わった食器が乗ったトレーを手に取った。
豊もそれを見て、同じようにトレーを持った。
結局三杯は、一緒に行こうなどと言う事もなく、音子と会わせる事にはならなかった。
だけどそれは、ほんの少し出会いが延期される程度のものである事は、この話を読んでいる皆さまの予想どおりであった。

時の流れとは、早いものである。
特に、日々充実していたのなら尚更だ。
音子は毎日パソコンと格闘し、猫画像を見る合間に、ストリートビューで、見た事のある景色を探す。
豊はそれなりに勉強しながら、隣の席が空いているのを見て、ため息をつく日々をおくっていた。
私が思ったより、充実はしていなかった。
だけど時は流れるもので、気がつけば２６日。
豊は一度家に帰って、再び音子をつれて出かけた。
安田公園には、２時半ごろに到着した。
今日も食事は先にとる予定だったが、音子は相変わらずで、音子の分のパンは、鞄の中に入っていた。
噴水が見えるあたりに来ると、適当なベンチに座った。
するとすぐに、音子は鞄からパンを取り出しかぶりついた。
「うんめぇ～！ジャムパン最高～♪」
音子の食べているパンは、何処にでも売っている、添加物満載のただのジャムパンだ。
だけど１年前まで猫だった音子にとっては、それはそれは美味しいごちそうであった。
その食べる姿を見ると、以前にも書いたとおり、豊は心が和むのであった。
だからといって豊は、必要以上に音子に食事を与える事はしなかった。
別に太るからとか、健康に悪いからとか、そんな事を考えていたわけではない。
食費が倍になり、ただ単にお金が無かった。
更に、毎週週末には出歩き、今月は洋服なんかも買っている。
週明けには仕送りが振り込まれる予定だが、既に三杯に借金までしており、音子と一緒に暮らして行くには、お金の使い方を真剣に考えなければならないと豊は思っていた。
豊が音子を見る視線の先には、待ち合わせ場所に指定された、噴水が見えた。
何人か人がいるが、その人達が待ち合わせに来た人なのか、メッセージを送った人なのか、豊に分かる要素は何もなかった。
だからとりあえず、豊はボーっと音子の食事を眺めていた。
しばらくすると音子の食事も終わった。
音子はゴミを捨てに、少し離れたゴミ箱へと駆けて行った。
その姿もまた楽しそうで、豊は目を細めた。

遠くに見えるゴミ箱に向かって、ゴミを投げる音子。
入らなくてゴミを拾いに行く音子。
拾ったゴミをゴミ箱に入れる音子。
どれもなんだか可愛いと思わせる振る舞いだった。
そんな音子に、一人の女性が話しかけているのが見えた。
豊はハッと立ちあがり、走って音子に駆け寄って行った。
別に知らない人に話しかけられても、普通にしていればなんて事はない。
でも、話しかけていた女性の表情が凄く驚いていたようで、何かがあると豊は思った。
豊が駆け寄っている途中、音子の声が聞こえてきた。
「私は幸恵じゃないのさ。三毛猫なのさ。」
すると話している女性が、更に驚いてこたえた。
「え？三毛猫？あのメッセージを出したのは幸恵お嬢様だったのですか？」
幸恵という名前が出ている事から、話している女性は、川上幸恵を知る人物で、音子を幸恵と勘違いしていると豊は悟った。
故に、音子がこれ以上下手な事を言うと、状況がややこしくなりそうなので、豊は駆け寄りながら声をあげた。
「おーい、音子！どうしたー」
すると音子と、話していた女性が、同時に豊の方を見た。
そこで豊は、二人の所に到着した。
「このお姉さんが、私の事を幸恵と呼ぶのさ。私は幸恵じゃないさ。」
そこでようやく、女性は冷静に考えられるようになったのか、落ち着いた表情になっていた。
「失礼しました。あまりに似ておられたので、てっきり幸恵お譲様本人かと思いまして。冷静に考えると、こんなところにおられるはずは・・・あ、こちらの話でした。」
豊は確信していた。
この人は、川上幸恵をよく知る人物であると。
そして、これはチャンスだと思った。
今まで、休んでいる幸恵を心配しても、どうする事もできなかった。
この人からなら、何か幸恵の情報を聞く事ができるのではと思えた。
豊は、自分が幸恵のクラスメイトである事を話す事にした。
でもその前に、女性が思いがけない事を、豊に言ってきた。
「あの、もしよろしければ、家にきませんか？幸恵お嬢様と会って、少し話をさせていただきたいのですが。」
すると音子は大喜びで「おお！幸恵に会いに行くのさ！」と両手を挙げた。
それを聞いた女性は再び、少し疑問の顔つきになった。
もしかして、幸恵の事を知っているのか？と思ったからだ。
豊はすかさず女性に言った。
「僕、幸恵さんのクラスメイトなんです。川上幸恵さんの。」

場を落ち着かせ、収拾させる為に豊は言ったつもりだったが、女性には色々と疑問がわき上がる結果となった。
幸恵のクラスメイトが、幸恵とそっくりの女の子と一緒にいて、何も感じないのだろうか？
音子と呼ばれている女の子も知っているようだけれど、どう思っているのだろうか？
落ち着くのに少しだけ時間を要した。
「そうでしたか。では、そちらのネコ？様が、幸恵お嬢様に瓜ふたつの容姿をしておられる事は、ご存じなのですね？」
女性の質問に、豊は「はい」と一言こたえた。
「では、ついてきてくださいますか。」
豊は再び「はい」とだけこたえた。
女性が歩きだすと、豊は「音子、行くよ！」と手を差し出した。
音子は「おー！」と言って、一人意気揚々と歩きだした。
豊は、出した手が悲しかった。
そして、三毛猫との待ち合わせの事は、すっかり忘れていた。

知らない人にはついて行っちゃいけないよ。
子供の頃、よく親に言われたものだ。
だけど大きくなると、知らない人について行くなんて事は、普通にあるよね。
豊はそんな事を考えながら、知らない女性についていった。
「結局、三毛猫って人との待ち合わせは、謎のままだな。」
今更ながら、豊は思い出した。
既に時刻は午後３時５分だった。
今から行けば誰かいるかもしれないが、豊は幸恵の事の方が大切だと判断していた。
「このお姉さんは、音子が幸恵で幸恵が三毛猫だって言っていたのさｗ」
音子の言うとおり、確かにそんな事を言っていた。
音子の事を幸恵と勘違いし、メッセージを出した三毛猫は幸恵だったのかと。
要するに、この女性もまた、あのウイルスのメッセージを見て、あの場所に来た一人だったという事だ。
「あなた方も、あの三毛猫のメッセージを見て、安田公園に来られたのですか？」
豊と音子の会話を聞いていたようで、女性が話に入ってきた。
「ええ。色々と気になる事がありまして。」
豊は、流石に本当の事は言えないと考えていた。
でも、この女性が家に招待した意味も分からないし、話をしたいような事も言っていたし、もしかしたら話す状況もあり得るかもしれないと思っていた。
さて、豊たちはほどなくして、高級マンションの前に立っていた。
この女性の言葉から、既に川上幸恵が、プリンセス級の扱いを受けている事は理解していた。
だけど、いざそれを目の当たりにすると、豊はやはり少し驚いた。

　その驚いている豊に、女性は話しかけた。
「お名前、うかがってもよろしいですか？」
　普通名前なんてものは、家に誘う前に聞くものだとは思うが、女性も色々と動揺していたので、当たり前の事を忘れていた。
「はい。僕は山下豊。で、こっちが・・・」
　豊は音子の名前を、どう言えば良いのか瞬時に判断できず、言い淀んだ。
　すると音子が、元気よくこたえた。
「音子は、三毛猫なのさ！」
　豊は、以前にもこんな事があったなと思い出していた。
　その時は、ミケが苗字で、ネコが名前だとかわけのわからない事言ってしまったが、丸くおさまったのではなかったか。
　だったらそれで行こうと、豊は思った。
　しかしその作戦は、実行される事はなかった。
「三毛猫さんですか。では、三毛猫さんが三毛猫さんにメッセージを貰ったって事ですね。」
「そうなのさ！」
　女性も、音子も、それで納得していた。
　この女性、ちょっとおかしいと、豊は思った。
「申し遅れました。わたくし、幸恵お嬢様のお世話係をしております、福田明子と申します。では、お入りください。」
　明子の自己紹介が終わったところで丁度、部屋の入り口に到着していた。
　開けられたドアから入ると、マンションの外観以上に、中の景色はセレブだった。
　普通のマンションと違い、靴を脱ぐスペースは、何処かの公共施設の入り口並に広かった。
　ぶっちゃけ、これがマンションの中なのか疑問に思うほど広々としてた。
　リビングに通されると「此処で少しお待ちください」と明子に言われ、豊と音子はソファーに座った。
　あまりのふかふかなソファーに、豊はマジでビビった。
　こんなにふかふかなソファーがある事が信じられなかった。
　音子は、豊の予想どおり大喜びだった。
　ソファーの上でピョンピョンはねていて、私もオイオイとツッコミを入れたくなった。
　そこは代わりに豊がやってくれた。
「音子、ひとの家だから、そんな事はしちゃダメだよ。おとなしくね。」
　音子は、とっても素直だった。
「分かったのさ。音子はおとなしくするさ。」
　手を挙げてそうこたえると、今度はソファーの上で猫のように丸まって、大人しく座った。
　その姿を見た豊は、やっぱり音子は猫なのだなと思った。
　少し待っていると、ドアを開く音が聞こえた。
　豊はドアの方を見た。

ドアから、幸恵が部屋に入ってきた。
豊は、久しぶりの再会に、挨拶しようと笑顔で立ちあがった。
だけど、豊はすぐに挨拶できなかった。
先に音子が「ニャー！幸恵！音子なのさ！」と、両手を挙げて挨拶していた。
その挨拶に、幸恵は「ニャー！ねこちゃん！幸恵なのさ！」と挨拶を返していた。
豊がすぐに挨拶できなかった理由。
それは幸恵が、前に学校で会った時と、同一人物に見えなかったから。
雰囲気というか、言葉では説明できないが、とにかく何かが違っていた。
それでも豊は、かろうじて挨拶した。
「こんにちは。久しぶり。」
すると幸恵は「あなたとは、以前何処かで会っていたのかなぁ？」と、少し首をかしげた。
豊はその言葉を聞いて、やっぱり別人なのだと思った。
豊は、幸恵と見合ったまま、少し動けずにいた。
音子はそんな事には気づかずに、幸恵に駆け寄って、手を引いて「わぁ～幸恵なのさ！」と、嬉しそうにしていた。
幸恵は音子に手を引かれるまま、部屋の中をウロウロさせられていたが、表情は柔らかだった。
ボーっとその様子を見ていた豊に、明子が話しかけた。
「分かったと思いますが、幸恵お嬢様は、以前の幸恵お嬢様ではありません。」
豊はその言葉を聞いて、やっぱりと思うと同時に、だからと言って、そんな事有るわけがないとも思った。
だから、豊は聞くしかなかった。
「どういう事ですか？」
豊は、明子と二人、じゃれ合っている音子と幸恵を見ていた。
「これは、口外しないでいただきたいのですが、お嬢様は、実は、記憶にあやふやなところがありまして。多重人格ってほどではないのですが、今は一番ひどい状況です。」
豊はなるほどと思った。
記憶喪失や、多重人格なんてものは、実際にあり得る話だ。
それによって、その人の雰囲気が変わる事もある。
豊は、明子の言った事を考えながら、幸恵を見つめた。
音子と一緒にいる幸恵を見て、今が一番ひどい状況だと言うのなら、それほど懸念する状況でもなさそうに見えた。
だから普通に、思った事をそのまま口にだした。
「確かに、学校で会った時と比べると、なんだか子供っぽくなっていると言うか。」
そう、別人に見えた理由は、正にそこだった。
豊は、自分の発言にハッとした。
今、音子とじゃれ合っている幸恵。

以前は完全に別人だと思えたのに、今は少し、音子に似ていると思えた。
此処で豊の頭の中で、ある想像がわき上がってきた。
もしかして音子は、実は未来の幸恵なのではないかと。
しかし、すぐにその考えは否定した。
理由は、あまりに容姿が似すぎている事だ。
音子は、１年かけてこの世界にきた。
そして今は、音子の世界からみて１年前。
つまり、もし音子が幸恵の未来の姿だとしたら、全く成長していない事になる。
それにやはり、音子は猫だったわけで、同一人物であるはずが無かった。
「とりあえず、座りませんか？」
明子の言葉に、豊はずっと立って話している事に気がついた。
「はい。」
豊は促されるまま、先ほどまで座っていたソファーに再び座った。
向かいのソファーには、音子と幸恵が座っていて、テーブルにカードを並べていた。
学校で見たタロットカードだった。
これを見て豊は、やはり川上幸恵である事を再確認した。
明子は、今度は音子に話しかけた。
「音子様、音子様は今何処か高校に通っておられますか？」
豊は少しドキッとした。
あまり音子の事について聞かれると、自分でも信じられないような話を、またしなければならなくなるかもしれない。
（音子よ、あまり変な事言うなよ～）と、豊は心の中で祈った。
「学校行ってないのさ！豊がつれていってくれないのさ。」
本当の事だが、この話の流れに、豊は嫌な予感がした。
金持ちのお嬢様が、事情があって学校に行けない。
そこにそっくりな人があらわれたら、アニメなんかだとどうなるか。
「学校に行きたいですか？」
明子の言葉に、豊は「待って！」と心の中で叫んだ。
「行きたいのさ！」
音子はとてもうれしそうな顔で、立ちあがり両手を広げた。
「では、幸恵お嬢様の代わりに、学校にいきませんか？」
ベタだから、この話の展開はやめておけと、私は思った。
「行くのさ！」
音子の言葉に、やっぱりこういう事になるのかと、豊は肩を落とした。
だけど今まで、部屋に一人残すのも可哀相だと思っていたし、音子が喜んでいるので、それも良いかとも思った。
「それでは、今日からこちらに住んでいただけませんか？両親にはわたくしからお話します

から。」
　明子の言葉は、ある意味当然であった。
　豊の部屋から共に登校なんて、ちょっと世間体が良くないから。
　でも、豊には聞き捨てならない、そして、返答に困るものであった。
　そんな豊の心の中の葛藤など知る訳も無く、音子はあっさりとこたえた。
「両親は、この世界にはいないのさ。豊が音子の保護者？なのさ！」
　相変わらず、音子はストレートにものを言う。
　両親がいないなんて事を、よくもまあこれだけ明るく言えるものだ。
　豊の父親は、本当の父親ではない事は、以前に話したとおり。
　本当の父親は、子供の頃母親から「死んだ」と聞かされていた。
　１年後、今の父親と母が再婚して、新しい父親となったわけだが、豊は実は、本当の父親は生きているんじゃないかと思っている。
　でもそれを追求する事はしない。
　何故なら、今の父親もとても良い父親だからだ。
　もし生きているなら、そのうち母から話してくれるだろうと、豊は考えていた。
　まっ、そんな事もあり、家族とか両親ってキーワードは、豊には少し思い入れのある言葉だった。
　椎名の時も、聞かなければ良かったと、ショックが大きかったのはその為である。
　でも逆に、両親のトラブルに巻き込まれる境遇の子供達を、助けてあげなければとも思っていた。
　豊が少し物思いにふけっていると、話はどんどん進んでいた。
「豊様が保護者？どういう事ですか？」
「豊は音子の飼い主なのさ！」
「飼い主って猫じゃあるまいし。」
「音子は猫なのさ。」
「意味がわからないのですが。」
「とにかく、豊とは一緒じゃなきゃダメなのさ。」
　音子が、自分と一緒じゃなきゃ駄目だと言ってくれるのは、豊にとってはなんだか嬉しかった。
　（さて、そろそろ僕が話に入っていって、色々と話すべきかな。）
　豊は決意して、ゆっくりと身を乗り出した。
　でも、豊が話し始める前に、幸恵がボソッと声をだした。
「だったら、そちらの豊さんもぉ、一緒に此処に住めばいいのですよぉ。」
　一瞬、豊の時間が止まった。
　豊は心の中で「ちょっと待て！」と言ってから、必死に頭の中を整理した。
　（これはいったいどういう事だろうか。川上さんが此処に住んでいて、音子が代わりに学校に行くから、此処に住む。そうだな、勉強とか色々話す事もあるのかもしれない。でも、命の恩人

探しもしなければならないから、僕とはできればなるべく一緒にいたい。だから一緒に住む。すなわち、僕と川上さんが一緒に住む。ふむ、全ての男子高校生が夢見る展開ではないだろうか。)

　などと豊は結論を出した。

　要するに、全然頭の中はまともではなかった。

「でも、両親がなんと言うか。」

　豊はかろうじて、冷静な発言をする事ができた。

　両親にはお金を出してもらっているし、クラスメイトの女の子のところで一緒に住むなんて、言えるわけもない。

　しかし、そんな抵抗も、あっさりと打ち破られた。

「その辺りはご心配なく。わたくしにおまかせいただければ、悪いようにはいたしません。」

　明子の言葉には、絶対的信頼を寄せても大丈夫な何かが感じられた。

「では決まりですねぇ。」

　幸恵はそう言いながら顔をあげて、にっこりと笑った。

　音子は喜びで、その辺りを転げまわっていた。

　喜び死にするのではないかと、心配なくらいだった。

　何やら、豊と音子、それに幸恵と明子の同居生活が、なし崩し的に決まっていた。
　いや、なし崩し的とは言ったが、豊はこの状況を、本心では嫌がっていない。
　でも、表面上はそう表現したい、男心を分かってほしい。
　豊にとって最後の砦であった両親からは、何故か「頑張ってねｗ」と励まされてしまった。
　明子さんから何を言われたのか気になるところではあるが、知らない方がいい事もあると、豊の心のストッパーが、明子に聞く事を阻んだ。
　まあ実際のところは、金持ちの金の力と言えば、だいたい想像がつくだろう。
　音子の身元については、結局色々と話す事になってしまった。
　やはり保護者への許可はしっかりとらないと、大人の事情的に困る事になりかねないから。
　それで豊は音子の事を「未来から来た猫が人間になった者」と伝えたわけだが、意外とあっさり信じられてしまった。
　いやもちろん、本心なんてわからないが、明子も幸恵も、そんな事もあるよねって感じだった。
　全く、どういう事だろうかと、豊は考えた。
　もしかして不思議な事なんてものは、意外と知らないところで沢山あるのではないかと、豊は思ってしまった。
　後、豊は気になっていた、幸恵の記憶が曖昧になる原因について明子に尋ねた。
　聞いたところによると、恐怖や悲しみなど、感情が不安定になると記憶が無くなったり、テンションが逆転したりするらしい。
　豊は当然、山口のイジメが、何かしら幸恵に悪い影響を与えてしまった事を確信し、申し訳ない気持ちになった。
　それと幸恵の希薄な雰囲気は、音子に聞いたところ、まだ残っているという事だ。
　それは、１年後には、命を落としている可能性が高いという事。
　もしかしたら、このイジメが引き金だったのかもしれない。
　実際、イジメによって命を落とす人は大勢いるのだ。
　イジメは殺人と同じだと、今の豊には思えた。
　で、次の日の日曜日、引っ越し作業に豊は忙しかった。
　１年２カ月過ごしたこのボロアパートとも、いきなりのお別れだ。
「マジで、こんな展開で良いのだろうか。」
　豊の呟きはもっともだ。
　勉強する為に決めた一人暮らしとは、既にもう決別しているが、これでますます勉強できない環境になる気がする。
　最近なれた、フローリングの上での睡眠も、終わりとなると何処か寂しい。
　朝のランニングで見なれた景色も、おそらくもう二度と見る事はないのだろう。
　これからは、幸恵宅にあるトレーニングまっすぃーんで、ランニングする事になるのだろうか

。
　豊は、名前も知らないアパートの管理人に別れを告げ、音子と共に明子の用意した車に乗った。
　車のシートは柔らかく、座り心地は最高だった。
　とまあ豊は、感傷に浸ると言うか、感慨にふけると言うか、微妙な心情を満喫していたわけだが、音子は相変わらず、全てに喜びを体いっぱいに表していた。
　ハッキリと言うと、豊はもうどうでもいいやと思った。
「豊、あの車ピンクなのさ！」
「そうだね。」
「豊、なんだか美味しそうな匂いがするのさ。」
「ラーメンだね。」
「豊、あの人後ろ向きに歩いてるのさ。」
「ふしぎだね。」
「豊、道路の真ん中でチューしてるのさ。」
「愛だね。ってなにー！！何処だ？！」
　自動車の中では、豊と音子の会話も弾んだ。
　事にしておこう。
　３０分ほどのドライブは、すぐに終わりを迎えた。
　昨日来たマンションではあるが、改めてみると立派なものだ。
　この建物の１２階から１３階のスペース全てが、これから豊たちが生活する場所である。
　エレベーターの階は１３階が無く、１２階が二階建てになっているような造りだ。
　引っ越し荷物の運びいれも、既に始まっていた。
　と言っても、荷物の半分以上は、実家に送ってもらっている。
　冷蔵庫、洗濯機、電子レンジに調理器具、テレビにお楽しみグッズなど、ほとんどがそろっているので必要がない。
　もちろん、一部用意されていない物がある事は、賢明な読者には当然分かっていると思うので、あえて此処では言わない事にする。
　１５分もしないうちに、引っ越し作業は終わった。
　リビングで待っていた豊と音子は、それぞれに与えられた部屋に案内される。
　豊の考えていたような豪華な部屋では無かったが、今まで過ごしてきた部屋とは比べ物にならないくらい、清潔感のある部屋だった。
　今まで使っていたパイプベッドは捨てたられ、新たに用意されたベッドはフカフカで、豊には、音子が飛び跳ねる姿を想像するに容易かった。
　と言うか、想像をそのまま、目に映る景色に張り付けたように、音子は既に飛び跳ねていた。
　豊は、そんな音子を、しばらく笑顔で眺めていた。
　音子の部屋には、ベッドやテレビ以外にも、色々と用意されていた。
　学校の制服はもちろん、デスクにパソコンまであった。

豊は自室に戻ると、いくつかの荷物を適当に整理し、再びリビングに戻った。
リビングのテーブルには、美味しそうな食事や飲み物が並んでいた。
「引っ越しパーティーなのさ！」
ソファーに座る音子が、喜びいっぱいに豊に手を挙げた。
豊は、そんなパーティーをする事なんて、全く想定していなかったので、照れくさくも嬉しいサプライズに高揚した。
しかし、男子たる者、此処で女子供のようにはしゃぐ訳にはいかないと、冷静な面持ちで音子の横に座った。
それでもやはり、顔はにやけているに違いなかった。
左横には音子、左向かいには幸恵が座っていた。
豊の正面は空いていて、ドアの所には明子が立っていた。
豊は気になった。
どうして明子は座らないのだろうか。
それに、食事を前にして、一向にパーティーが始まる雰囲気は無かった。
気になって音子を見ると、音子は美味しそうな食事を前に、必死に食べるのを我慢しているようにみえた。
豊の疑問を感じ取ったのだろう、幸恵が豊に告げた。
「もうすぐ、お友達が来るのぉ。ちょっと待っててねぇ。」
幸恵の言葉で、豊は状況を理解した。
（それにしてもお友達？）
お友達の一人や二人、それは同年代の女の子なのだからいてもおかしくはない。
だけど、記憶が不安定な幸恵に、そんな相手がいる事が、豊は少し不自然に感じた。
それでもまあ、明子の事は忘れたりしていないようだし、付き合いがあれば、それなりに覚えているのかなと判断した。
間もなく、来客を告げるチャイムがなった。
インターフォンの音も、流石に高級マンションだけあってお洒落だ。
「チリンチリン」という、喫茶店のドアの所についている、鈴の音のようだった。
すぐに明子が、玄関へと迎えに行く。
玄関の方から、挨拶が聞こえてきた。
「こんにちは～」
お友達はどうやら女の子のようだ。
豊は少し安心した。
別に「やきもちやいちゃう～」なんて理由で安心したわけではない。
ただ、知らない男の人と喋るのは、女性と喋るよりも、豊にはハードルが高かったからだ。
正確には、男性は照れたりしないので普通に喋れるが、楽しい場で話すには、テンションがあがらないので困るというわけ。
さて、とりあえず女の子という事で、やや期待しつつ、少し照れくさい豊であったが、その声

にどこか引っかかるものがあった。
　要するに、聞いた事があるかもしれないと思ったわけだ。
　すぐに、その声の主が部屋に入ってきた。
　その姿を見て、豊はビックリした。
「あれ？こんにちは。豊さんじゃないですか。」
　豊は挨拶を返す事も忘れるくらいビックリした。
　入ってきた女の子は、三杯の妹、のぞみであった。
　豊がこれだけビックリする中、音子はずっと料理を見つめていた。

　なんと！引っ越しパーティーに現れたのは、三杯のパーフェクトシスター、のぞみちゃんであった～！
　と、パーティーを盛り上げる流れになるのかと思いきや、特に何かがある訳でも無かった。
　普通に挨拶すると、のぞみは豊の向かいのソファーに座り「引っ越しおめでとう～」みたいな事を幸恵が言って、食事が始まる。
　音子はすぐに料理にかぶり付き、とにかく食事に夢中だった。
　そんな音子を見ても、すでに幸恵から音子の事は聞いていたのか、二人がそっくりな容姿なのにも、のぞみは特に驚く事もなく、パーティーはつつがなく終わりを迎えた。
　おっと、一つだけどうしても、伝えておかなければならない事があった。
　このパーティーの中での会話で、驚くべき事実が判明した。
　なんと！奥様は！じゃなくて、のぞみはまだ１１歳だったって事。
　以前豊の買い物ミッションを遂行した際、豊は少し年下くらいだろうと思っていた。
　要するに、高校１年生くらいだと思っていたのだ。
　しかし、なんとまだ小学生だったのだ。
　豊は「女の子って怖い」と思った。
　そう言えば誰かが言っていた。
　今の女の子は「中学生時代が無い」と。
「小学生から、一気に高校生になる」と。
　話がそれてしまいまいて失礼しました。
　それで後は特に面白い話もなかったが、一応伝えておくと、幸恵とのぞみは５年ほど前、偶々公園で知り合って、それから仲良しなのだとか。
　まあそんな話、聞いたところで面白くもなんともないよね。
　ぶっちゃけ、黙々とモクモクと料理を食べ続ける音子を見ていた方が、豊にとってはよっぽど喜びを感じられる時間になっていた。
　パーティーが終わった後、豊は自室で、音子と色々と話をしていた。
「やっぱり、川上さんの気配は変わらないか？」
　何がきっかけで、死への運命が変わるかもしれない。
　だから豊は、きっかけとなりそうな事がある度に、音子に状況を確認していた。
「変わらないのさ。だけど変なのさ。」
「何が変なの？」
　音子の表情からは、特にどうとらえていいのか分かるところは無かった。
　だから豊は、そのまま質問を返すしかなかった。
「ん～前に見た三毛猫や、椎名のお兄ちゃんの時とは、少し違う気がするのさ。」
　手をあごににあてて考える音子は、なんとなく白々しい演技をしているようだったが、本人はいたって真面目である事は、豊には伝わっていた。

「少し違うか・・・」
　豊は考えた。
　やはり普通に考えて、音子と何らかの関係がある事は間違いない。
　でも、猫が人間になってる時点で、豊にとっては自分の想像を超えていた。
　豊は結局、考えても無駄だと結論をだした。
「ところでさ、音子って人の寿命とか見えたりしないの？たとえば僕のとか。」
　豊はなんとなく思った事を口に出していた。
　しかし、言ってから、少し後悔していた。
　これで「すぐには死なないけど、後３年くらいかな？」とか言われた日には、ショックがでかすぎる。
　豊はすぐに「やっぱりいいや」と言おうとした。
　当然、それよりも先に、音子がこたえてしまう事は、お約束である。
「豊は死なないのさ。サリンを一気飲みとか、スカイツリーのてっぺんから飛び降りでもしない限り、大丈夫なのさ。」
　いや流石に、それをする前に死にそうだとか思うわけだが、音子の表情は真面目だった。
「え？マジで？」
　豊には音子が嘘を言っているようには見えなかったので、信じようとしていた。
　だけど、音子の顔は、すぐに笑顔に変わった。
「そんな訳ないのさｗはははは～」
　豊は音子に騙された。
　というか、音子が冗談を言った。
　単純な音子が冗談を言うなんて、今まではあり得なかった。
　音子が成長していると豊は感心し、どこか嬉しい気持ちがわき上がってきた。
「ははは。冗談か、流石にそれは無いよね。」
　豊としては、コレで自分がすぐに死ぬ事は無いと判断できていた。
　冗談が言えるわけだから。
　でも、実はあながち嘘でも無かったようだった。
「豊は中心世界の中心人物なのさ。全ての世界から必要とされているから、自分から死のうなんて考えない限り、無茶しなければ死なないさ。」
「はは・・・」
　どうやら豊の人生は、良くも悪くも長そうだ。
　豊の乾いた笑いが、妙に頭に残る夜だった。

　豊が音子とそんな話をしている時、リビングでは幸恵とのぞみが話をしていた。
　幸恵は、テーブルにタロットカードを並べていた。
　ぶつぶつ呪文のようなものを唱えた後、カードを１枚めくった。
「どう？」

　のぞみが心配そうに、幸恵の顔を覗き込む。
「ん～死ぬ確率は、４０％くらいかなぁ。悪いカードじゃないけど、まだまだ可能性は残されてるぅ。」
　実は幸恵のタロットカード占いは、１００％的中するらしい。
　何故そんな能力が自分にあるのか、幸恵自身にも分からない。
　身体にハンデを持つ者が、時々超人的な能力を発揮する事があるが、正にそんな感じだろうか。
　ただし、幸恵が占えるのは、自分の命に関する事だけだった。
　以前、教室で泣いていたのは、自分の命が後わずかである事を、再確認していたからである。
　ちなみに、この能力について知る者はのぞみだけであり、明子は何かを感じているかもしれないが、話してはいなかった。
「世界の中心人物である、豊さんにこれだけ関わっても、４０％か。なんとか０％にしたいね。」
　のぞみはそう言って、幸恵に寄り添った。
「最初は１００％だったんだから、もう少しだよぉ。」
　幸恵はのぞみの頭をなでた。
「でも、駄目な時は・・・」
「だめだよぉ。音子ちゃんの邪魔だけは、ね。のぞみちゃん。」
　のぞみは幸恵にしばらくなでられた後、明子の用意した車に乗って帰っていった。

# 登校

　とうとう、この日がやってきた。
　今日はいよいよ、音子の初登校、女子高生デビューである。
　朝起きて早々、音子のテンションはマックスだった。
「うお～制服かわええ～」
「昨日試着してたじゃん。」
「なんだか豊の服と似ているのさ！」
「制服だからね。」
「食パンくわえて走れば良いのか？どうなのさ？」
「いや、それはアニメの中だけにしか存在しないネタだから。」
「うお～なんだか頭が変になりそうなのさ。」
　（もう十分変だけどね。）
　こんな感じで豊は、騒がしい音子の歓声にこたえるばかりだった。
　当然教室につく頃には、豊の疲れはマックスに近かった。
　ここでも騒がれると、豊のヒットポイントはゼロになるに違いない。
　いや、メンタルポイントの方か。
　とにかく、机に突っ伏していた。
　でも、教室に入ると、音子は一転して静かだった。
　周りをキョロキョロ見回すと、しばらくうつむく。
　そしてまた顔をあげて、キョロキョロ周りを見回す。
　声はだしていなかったが、十分騒がしい行動だった。
　それでも、声を出さないだけ、豊が反応する必要はない。
　豊はしばしの休息を満喫した。
　授業が始まると、また騒がしくなった。
「えー・・・この問題わかる人？！」
「はい！」
「じゃあ川上！」
「はい、わかりません！」
　豊はコントのようにずっこけた。
　そして再びの休み時間には、椎名が豊の席にやってきた。
「どういう事？音子ちゃん、だよね？」
「ゴメン。諸事情により、聞かないで・・・」
「ニャー！椎名！久しぶりなのさ。」
　椎名はコッソリ豊に尋ね、豊はそれに対して返答を拒否して突っ伏し、だけど音子はバカだから普通に話していた。
　この後も音子は、騒がしかった。

　授業中・・・
「豊、こんな難しい問題が高校生の問題なわけないのさ。これはきっとイジメなのさ。」
「いや、それ中学生でもわかる問題だから。」
　休み時間・・・
「豊、飯はまだなのか？」
「うん、ばあさんや。」
　授業中・・・
「豊、見た事もないのにあの人は昔の事が分かるのか？すげぇ～」
「インターネットで調べたんだよきっと。」
　休み時間・・・
「豊、マジで食べ物を要求するのさ。」
「後１時間だから、頑張って。」
　授業中・・・
「Ｚｚｚ・・・」
「・・・」
　こうしてなんとか、午前中の授業を乗り切った。
　最後は乗り切ったと言わないかもしれないが、初日にしては上々だろう。
　以前、幸恵がやたらと豊に絡んできた経緯もあり、クラスメイトも特に気にしなかった事が幸いした。
　まあ実際は、気にしている人も多数いたかもしれないが、それが豊に影響しなかったのだから、気にしなかった事にしても全く問題ない。
　そして、待ちに待った昼休みがやってきた。
　豊は音子をつれて食堂へと向かった。
　その際、椎名にも声をかけた。
　理由は、音子と二人で行った場合、三杯に何か言われるのではないかと不安だったからだ。
　でも既に、妹から話は聞いているのかもしれないのだが。
「やあ、三杯！」
「こんにちは。はじめましてｗおじゃましますねｗ」
「にゃー！こいつがのぞみの兄なのか！」
　豊は自然に挨拶したつもりだったが、少しぎこちなかった。
　椎名は正にいつもどおりで、ごく普通に三杯に挨拶した。
　音子は、言っても無駄なので言ってなかったけど、やはりそんな感じだった。
　しかも何故か、三杯の事をこいつ呼ばわりだった。
　バカを本能で感じ取ったのだろうと、豊は思った。
「えっと・・・今日はにぎやかだな、豊。グッジョブｗ」
　三杯は細かい事は気にせず、意外に上機嫌だった。
　とりあえず飯を注文して、テーブルに座った。

豊は大好きな海老フライ定食。
三杯も大好きな竜田揚げ定食。
椎名はきつねうどん。
音子は、プリンが３つと、１０円のスナック棒が５本。
「って、何買ってきてるんだよｗ」
豊はもう笑うしかなかった。
「豊は何でもいいって言ったのさ。プリン最高なのさｗ」
そういった音子は、プリンを美味しそうに食べ始めた。
それを見て、まあ今日くらいはいいかと豊は思った。
それにしても、プリンを美味しそうに食べる猫って。
豊は想像して、また笑えてきた。
そんな音子を眺めていると、三杯が話かけてきた。
「豊、ところで今日はどういう事なんだ？」
まっ、当然聞きたくなる質問である。
椎名は話していいのかわからず、チラチラ豊を見ている。
豊は、そんな椎名を見て頷いた。
「えっとさ、三杯は親友だから全て話すけど、実はこいつ、川上さんじゃないんだ？」
（結局椎名さんを連れてきた意味ないじゃん）と、豊は思った。
もちろん私も、それにみんなも思ったに違いない。
とにかく豊の言葉に、一瞬時間が止まったようになった。
三杯が、驚いてそうなったわけではない。
何をバカな事を言っているんだという気持ちからだ。
だけど、豊があまりに自然な表情でいるので、三杯の心は、少しずつ動き始めた。
「マジか？」
三杯の言葉に、豊は黙って頷いた。
それに合わせるように、音子が声をあげた。
「音子は、猫なのさｗでも今は幸恵なのさ。音子だって事は言っちゃいけないのさ。」
豊と椎名は心の中で「言ってるよ！」とツッコミを入れた。
その後、豊は一通り、三杯に話をした。
音子が未来から来た猫である事。
そして人を助ける為に今頑張っている事。
幸恵の体調が悪いので、代わりに学校に来た事を。
口止めされている、記憶が不安定な事は当然話さずにいた。
「ん～そう言われても信じられる話ではないな。」
三杯はやはり思ったとおり、すぐには信じなかった。
かといって、あの携帯電話の写真を見せる訳にもいかないし、これ以上豊には話す事は思いつかなかった。

　そんな時、椎名が援護射撃をいれてくれた。
「きっと本当だよ。私のお兄ちゃんが助かったのは、豊と音子ちゃんのおかげだもん。」
「えっ？渡辺さんも知ってたの？」
　椎名のおかげで、三杯はとりあえず信じようという気になったようだったが、少し寂しげであった。
「うん・・・」
「三杯には何度か話そうと思ったんだけど、タイミングがつかめなくてさ。」
　三杯は少しすねていたが、どうやらそれは演技だったらしく、すぐに笑顔でこたえた。
「まっ！実際この子を見てなければ、信じられん話だったな。」
　三杯は親指で、スナック棒にかぶりつく音子を指差した。
　流石に、登校初日の川上さんからは、こんな食べ方をするイメージはわかない。
　豊はとにかく、三杯が納得してくれた事にホッとした。
　（それにしても・・・）と、豊にはしっくりこない事があった。
　それはのぞみの事だ。
　何故三杯に、昨日の事を話していないのだろう。
　だから昨日会った事を話す事にした。
「ところでさ、昨日、川上さんのところでのぞみちゃんに会ったんだけど、川上さんと凄く仲良さそうだったぞ。」
　すると三杯はハッと顔をあげた。
　かぶりついていた竜田揚げは、口から半分出ていた。
　とりあえずそれを食べきり、三杯は話し始めた。
「川上さんとの事は全く知らないけど、のぞみが昔、へんな事を言っていた事を思い出した。」
　三杯の言動に、何かあると感じた豊は身を乗り出した。
　そんな豊を見て、三杯は少し苦笑いをした。
「そんな大した話じゃないよ。ただ、昔、自分は三毛猫の生まれ変わりだとか言っていたのを思い出してさ。」
　（のぞみちゃんが三毛猫の生まれ変わり？）
　音子が未来から来た三毛猫。
　そしてのぞみが三毛猫の生まれ変わり。
　あり得ない話ではない。
　音子がいるのだから。
　だけど、だからどうしたとしか答えようがない。
　なんせそれが本当だったとしても、前世がどうとか言う人は大勢いるし、だからと言って、今に何も影響はないのだから。
「のぞみちゃん、昔から可愛いかったんだねｗ」
「まあなｗ」
　この話は此処で終了し、間もなくみんなで食堂を出た。

音子はとっても満足そうな笑顔だった。
明日はちゃんとした飯を食えよと、私は思った。

食堂をでた後、椎名が「のぞみちゃんって、佐藤くんの妹さん？」と聞いてきた。
だから豊は「そうだよ」とこたえた。
のぞみの名前が出てきたから、ついでだし、豊は音子に聞いてみた。
「のぞみちゃんの前世が三毛猫らしいんだけど、音子には分かるか？」
音子でも、そんな事分かる訳ないとは思っていたが、とりあえず豊は聞いた。
すると予想どおり「前世なんて知らないのさ。」と、音子から返事が返ってきた。
どうでもいい話だと思ったので、その話はそれで終わった。
昼休みの後は、体育の授業だった。
流石に女子の着替えにまではついて行けないので、豊は後の事を椎名に頼んだ。
「椎名、音子の事頼む。」
すると椎名は、笑顔で「うんｗ」とこたえ「音子ちゃんいこｗ」と、音子の手を引いた。
手を繋がれて嬉しいようで、音子は大きく手を振って、椎名と共に更衣室へと向かった。
体育の授業は、音子の独壇場だった。
走るスピードは並じゃなかった。
豊は心の中で「あまりめだつなよ！」と、音子に念をおくった。
当然だが、全く効果はなかった。
まあとりあえず、四足で走らなくて良かったと、豊は前向きに考えた。
６時間目は、理科の実験だった。
人々は忙しい時、猫の手も借りたいとか言うけれど、理科の実験には、音子の手はいらなかった。
危うく頭が雷様になるところを、椎名のファインプレーでかろうじて回避できた。
音子との実験は命がけだと豊は思った。
こうしてなんとか、初日の授業は全て終了した。
さて、帰宅は二人一緒に帰った。
音子を一人で帰らせるなんて、危険極まりないからだ。
だけど、一緒に帰って大丈夫なのだろうかと豊は思った。
だいたい、幸恵のマンションで暮らす理由って、男と一緒に暮らしてるなんて事がばれるとマズイからでは無かっただろうか。
それは豊が勝手に思っていた事だが、今の現状もあまり変わっているように感じない。
他に２人いるとは言え、男と一緒にくらしているのだから。
まあ部屋も別だし、マンションが同じでも部屋が違う事はあるだろうし、状況はかなりマシなのだけれど。
豊は少し腑に落ちなかったが、幸恵がそれで良いなら、別にどうでも良いと結論をだした。
部屋に入ると、幸恵が満面の笑みで豊と音子を迎えた。

豊はその笑顔に、不覚にも萌えてしまった。
音子もそうだが、幸恵の顔も、豊にとっては当然凄く好みの顔である。
正直、音子がもう少し普通で、猫じゃなければ、幸恵が怪しい呪文を言わなければ、二人は正に豊にとって、理想の女の子だった。
二人合わせて２で割れば、良い感じになるのでは、なんて事を豊は思った。
豊が一旦部屋に荷物を置いて、着替えてからリビングに戻ってくると、音子が嬉しそうに学校での出来事を幸恵に話していた。
「先生はみんな、生徒をイジメるのが好きなのさ。ちょっと喋っただけで怒るのさ。」
音子の言葉どおり、音子は何度も先生に怒られていた。
「人間はおかしいのさ。なんでわざわざ毒煙が出るものを使うのさ。」
酸性のブリーチとアルカリ性洗剤を混ぜていた。
「４時間目は地獄なのさ。断食させられたのさ。」
音子は朝から、全力でカロリー消費していた。
そんな音子の話を、これまた嬉しそうに幸恵は聞いていた。
豊はそんな二人を、ボーっと眺めていた。
可愛い女の子の、楽しそうな姿を見ているだけで、豊は幸せだった。
チラッとテレビを見てみると、アイドルグループが楽しそうに歌っている。
勉強ばかりしていた豊には、それが誰なのか分からないし興味もない。
「だから」なのか、それとも「だけど」なのか、豊は目の前の二人を見ている方が良かった。
でも、いくら心が和むと言っても、ずっと見てるわけにはいかない。
やらなければならない事は沢山あるのだ。
豊は一人リビングを出て、トレーニングルームで汗を流した。
３０分ほど頑張った。
豊にしてはよくやった。
フラフラだったが、夕飯前には、宿題と明日の予習も済ませた。
夕飯時間になっても、音子と幸恵はまだ話をしていた。
よくもまあ話す事があるものだと豊は思った。
夕飯を済ませて、豊はようやく音子と二人になった。
学校がいくら楽しくても、本当の目的を忘れる音子ではなかった。
豊の部屋で、パソコンを使って、見た事のある景色を探した。
ベクトル線上に戻って発着地点を探す作業は、安田町、すなわちこの町から再開した。
結局、あの猫ウイルスのメッセージは、音子と明子を、豊と幸恵を出会わせる役にはたったが、本当に待っていたのは誰だったのだろうかと、そんな話もした。
この日は早めに切り上げて、この町の発着地点を見つけて、ラインを引くことで作業は終わった。
理由は、音子が学校に通い始めた事に関係している。
そう、勉強である。

宿題ももちろんやらなければならないし、もうすぐ定期試験もある。
豊は先ほど、幸恵に一応確認をとっていた。
宿題や試験についてだ。
「そのあたりはおまかせしますぅ。やりたく無ければしなくても良いしぃ、試験の時は休んでもらってもかまいません。」
幸恵はそう言っていた。
だけど、その話を聞いていた明子の表情を見る限り、悪い点数をとるくらいなら休んでくれと言いたげであった。
宿題も、できればやって欲しいのだろう。
豊には、幸恵がどういった人なのかはわからないが、相当な金持ちのお嬢様に感じている。
そういう人は、やはり最低限、しっかりしていないとマズイ事もあるのではないだろうか。
豊の想像ではあるが、此処は豊の世界である。
この時の明子は、正に豊の思う通りの気持ちだった。
そんなわけで豊は、音子に宿題をやらせようとした。
だけど音子に、勉強に対する知識は全くと言っていいほどなかった。
予想どおり、バカだったのである。
だから豊は、自分のやった宿題を、とりあえず写させた。
次に、テスト勉強である。
が、豊は今までテストだからといって、特に勉強をする事はなかった。
何故なら、毎日勉強していたから。
当然、テスト範囲が何処だとか、考えた事も無いし知りもしない。
故に、誰かに聞く必要があった。
そこで何故か思いついたのが、椎名であった。
普段なら迷わず三杯であったが、一々何か言われそうだし、せっかくゲットしたメールアドレスを、使わないまま放っておくのももったいない。
豊はちょっとドキドキしながら椎名にメールを送った。
すぐに返事が返ってきた。
タイトルは「メールキターーーー！！！」だったわけだが、豊には意味不明だった。
もちろんこれは、豊からのメールに喜びを表しているわけだが、そんな風に考えられる豊ではなかった。
テスト範囲を確認すると、豊は「ありがとう」と一言メールを返すと、早速音子の勉強に取り掛かった。
「まず社会は、テスト範囲全てを、丸暗記しよう。」
豊は、音子の記憶力だけは優れている事を知っていたので、とにかく覚えさせる事にした。
「数学は、教科書の基本問題を、少しアレンジしたものを丸暗記しよう。」
数学は、教科書の基本問題の数字を、少しだけ変えたような問題が出る事が多い。
「英語も、教科書で使われているものを全て暗記だ。使われている単語と意味も。」

英語の先生は、教科書の英文をそのまま使ってくる人だった。

こんな感じで、豊は「これを覚えればいけると思われるポイント」を抜きだし、音子に覚えさせていった。

一息ついた時には、登校初日は終了していた。

　音子が学校に通い始めて、数日が過ぎた。
　言わなくてもわかると思うが、毎日騒がしかった。
　写した宿題は結局忘れるし、授業では先生に「イジメ格好悪い！」とか言うし、食事には相変わらずプリンとかお菓子は必ず付けるし、豊にとってはもう無茶苦茶だった。
　だけど、豊にとっては意外だったが、音子の周りには人が集まるようになっていた。
　要するに音子は、人気者になり始めていた。
「ねぇねぇ、なんで山下とか渡辺ちゃんからはネコって呼ばれているの？」
「猫だからさ！」
　（おいおい、あんまり変な事言うなよ。）
「そ、そうなんだ。そういえば前にタロットカードいじってたけど、占ってよｗ」
「あれは幸恵がやるのさ。」
　（バカ！お前が今川上さんなんだって！）
「え？あんた幸恵だよね？」
「あっ、そうだったのさ。すっかり忘れていたのさ。てへっ！」
　（舌だしてる場合じゃねえよ！しっかりしてくれよ。）
　離れた席で見ていた豊は「はぁ～」とため息をついた。
　すると椎名が豊のため息に気づき、豊の前の席に座って、豊の方を向いた。
「大丈夫だよ。そんなに心配しなくてもｗ」
　豊は、椎名の言葉にも、そう簡単に安心できる性格では無かった。
「だと良いんだけどさぁ～。それにしても、音子はおとなしくする事ができないのかね。」
　豊は呆れたように言ったが、顔は笑顔だった。
「でもさ、音子ちゃん、豊がいない時は、結構おとなしいよ？体育の時の更衣室とか、授業中とかも。」
　椎名の言葉は、豊にとっては意外だった。
　音子は、食事中と一人の時は、結構おとなしかったりする。
　でも誰かがいる時は、大概騒いでいるイメージだ。
　みんなの前で静かな音子なんて、あまり想像できない。
　川上さんなら想像に容易いが。
　豊がそんな事を考えてフリーズしていると、椎名が「豊がいる時だけ元気なのかもねｗ」と言って、席から立ち上がった。
　気がつくと、チャイムが鳴っていた。
　豊は、何故か湧き出る笑顔を、抑える事が出来なかった。
　昼休み、三杯は約束があるとかで、食堂には来なかった。
　椎名も、音子の登校初日以外は、食事を共にしていない。
　だから今日の食事は、音子と二人だけだった。

「うーまーいーぞー！」
　音子は豊と二人でも相変わらずだった。
「そんなに美味そうに食ってくれると、おじさんも嬉しいよ。」
「ほれ、これおまけしてあげるよ。」
　食堂のおっちゃんやおばちゃんとも、音子は既に仲良しだ。
　（全く、学食の飯なんて、そんなに美味いものではないだろうに。）
　そんな事を豊は考えていたが、口元は緩みっぱなしだった。
　音子はバカだけど、凄くみんなから愛されていた。
　豊には、何故かそれが嬉しかった。
　そして思った。
　勉強の必要性って、どれくらいあるのだろうかと。
　そしてもし、この学校を一つの企業と考えたら、自分はそれなりの役職にはありそうだけど、音子にはトップが似合うとも。
　豊は楽しそうに食べる音子を眺めながら、そして時々ツッコミを入れながら、今日はから揚げ定食を食べていた。
　すると、音子の後ろの席で、こちらに向いて座っている女生徒と目があった。
　相手は、風谷菜乃である。
　挨拶しないのもアレなので、豊は左手を挙げて「ニャー！」と挨拶した。
　最近の挨拶の半分以上が「ニャー！」なので、ついうっかり言ってしまって顔が赤くなったが、此処で動揺すると負けだと思い、何食わぬ顔で食事を続けた。
　すると菜乃も「ニャー！」と挨拶を返してきた。
　その声に気がついた音子も、後ろを振り返って「ニャー！」と挨拶した。
　が、すぐに深刻な顔で豊の方に向き直り「お友達？」と聞いてきた。
　音子のその表情がどういう事か、豊にはすぐには分からなかった。
　（あの女、コッソリと音子にイジメを働いているのか？）
　なんて思ったが、菜乃はそんな人ではない。
　でも深刻な音子の表情はただ事ではない。
　豊はそんな事を考えながら、音子に無意識のうちに返事をしていた。
「うん、友達だよ・・・」
　するとそれを聞いた菜乃がいきなり立ちあがり、豊の隣の席に移動してきた。
　その表情は、少し驚いているようだった。
　そして何故か、自分の海老フライ定食から、海老フライを一つ箸でつまんで、豊のお皿に移した。
「へぇ～友達だったんだ。じゃ、友達祝って事で。」
　菜乃の言葉は「ギャー殺される～何が望みだぁ！」なんて冗談がピッタリはまりそうな雰囲気だった。
　だけど、菜乃の表情を見て、豊は言うのをやめた。

いつもの冷めた目だったが、豊には喜んでいるように見えたから。
菜乃は携帯電話を取り出し「アドレス」と言いながらそれを揺らした。
要するに、アドレス交換をしようと言うのだ。
豊にもそれはすぐに理解できたので、得意げに赤外線通信で交換を果たした。
気がつくと、音子が目をウルウルさせながら、笑顔だった。
豊には意味が分からなかったが、悪い事ではないと判断し、その場は菜乃と、冗談で塗り固められた会話を楽しんだ。
食堂を出た後、豊は音子に尋ねた。
先ほど、深刻な顔をしたり、笑顔でウルウルしていたわけを。
その答えは、豊にとっては大きな衝撃だった。
最初に音子が菜乃を見た時、命がもうすぐ消えていく気配が、菜乃にはあった。
だけど、豊が「友達だよ」とこたえた事で、その気配が消えたというのだ。
そんな一言が、人の命運を左右する事に、豊は色々な意味で、世界の繊細さを感じずにはいられなかった。
豊は音子を見た。
命を救う事ができたのは、この小さな音子がいたからこそだ。
なんとなく、今日はプリンを買って帰ろうと、豊は思った。
学校が終わると豊は、コンビニでプリンいくつか買って、マンションに帰った。
幸恵は、待ってましたとばかりに音子を招き入れた。
音子が学校に通い始めてからは、毎日こんな感じだ。
学校での事を、音子から聞くのが楽しみらしい。
なんとなく豊は、幸恵の雰囲気が明るく変わってきているように感じた。
別の言い方をすれば、音子に少し似てきていた。
動物は飼い主に似ると言うが、その逆もあり得るのだなと豊は思った。
豊は、とりあえずプリンを冷蔵庫に入れようと、キッチンへと向かった。
するとそこには、電話している明子がいた。
明子は豊がキッチンに来た事に気がつかず、そのまま電話を続けていた。
豊は邪魔をしないように、プリンを冷蔵庫にいれたら、すぐにキッチンを出る予定だった。
だけど、聞こえてくる明子の声に、歩みを止めざるを得なかった。
「最近はちゃんと学校にも通えるようになりました。手術はもう少し待ってください。」
明子は、凄く切羽詰まった様子だった。
ほんの少し聞いてしまったその言葉で、豊は状況をある程度理解していた。
幸恵の記憶障害を直す為に、手術をする予定がある事。
そしてその手術に、明子は反対している事。
更には、なんのために音子に、学校に行くように勧めたのかも分かった。
大丈夫である事を主張する為だ。
そんな事を考え立ち止まる豊に気がついた明子は「また電話します」と言って、そそくさと電

話を切った。
　電話を切るとすぐに「そういう事なんですよ。」と、明子は無理に笑顔を作って、豊に言った。
　その後、豊は明子から、色々と事情を説明される事になった。
　幸恵は、ある企業グループを束ねる会長の孫であり、父親はそのグループの中軸企業の社長だった。
　だけど、幸恵は望まれて生まれた子供ではなかった。
　父親は結婚が決まった後に、愛人から妊娠を告げられたのだ。
　そうやって愛人との間に生まれた私生児が、幸恵である。
　父親には、一応社会的立場もあり、公にならないように、母親が幸恵を育てる事になった。
　だけど愛人であった母親としては、納得できなかった。
　自分が結婚できるものだと思って、付き合っていたのだから。
　だから、なんとか見返してやろうと、幸恵を厳しく教育した。
　暴力こそ振るわなかったが、幼児虐待と言われても差支えないほどだった。
　でもそれは母親の、本心からの愛がなせるものだった。
　間違った愛でも、愛は愛だ。
　だが、それがきっかけだったのか、気がつくと幸恵には、記憶障害が起こるようになった。
　記憶障害の原因はハッキリしなかったが、それはすぐに父親の知るところとなった。
　父親は、結婚前に浮気をしていた事がばれるのを恐れ、幸恵の行動を規制した。
　普通の子なら、別に規制する必要はない。
　だけど、障害があると、やはり目立ってしまう。
　それでも、多少なりとも落ち着いて、普通に小中学校の義務教育は終える事ができた。
　高校は地元の高校に進んだ。
　しかしそこで待っていたのは、更なる競争や新しくなる人間関係。
　イジメもあったのかもしれない。
　幸恵は再び、記憶障害を起こすようになった。
　そこで、田舎の高校である、桜花高校に転校してきたというわけだ。
　だけど、此処にきても変わらなかった。
　登校初日、帰ってくると、記憶障害がおきていた。
　学校であった事を聞いても、何も覚えていなかった。
　再び、学校へは通えなくなった。
　そんな時に浮上した話が、手術である。
　だが、原因もわからない障害、治る可能性は限りなくゼロに近い。
　それでも父親は、手術を勧めてきた。
　明子は思った。
　手術を失敗させ、幸恵を殺そうとしているのではないかと。
　そんな時に、音子と出会った。

　音子がちゃんと学校に行って、ちゃんと普通の人のようにできれば、父親も治ったと思って、手術をやめてくれるかもしれないと。
　ザックリ話すとこんな感じだった。
　そうは言っても、豊にはずしりと重い話であった。
　最後に豊が「母親は何処にいるんですか？」と聞くと「おそらく死んだ」との事だった。
　あまりに無慈悲な話に、豊は少し涙がでた。
　できるものなら、なんとかしてあげたいと思った。
　明子から幸恵の話を聞いた豊は、なんとかテストで良い点数をとってもらおうと、必死になって音子に勉強をさせた。
「この人髭なげぇ～」
　音子は、歴史教科書に載っている人の絵を見て、やたらと喜んでいた。
　でも豊はそんな事にかまってはいられない。
「分かったからここ覚える！」
　音子はシュンとなって、再び教科書に向かう。
　しばらくすると、音子が教科書を閉じた。
「覚えたのさ！豊、テレビみるのさ。」
　音子が取ろうとしたリモコンを、豊は先につかんで腕の中に隠した。
「駄目！次、英語覚えるよ。」
　音子はまたシュンとして、ゆっくりと教科書を開いた。
　そんなやり取りを何度かしていると、いきなり音子が切れた。
「豊！それはイジメなのさ！先生より酷いのさ！」
　音子の目には、涙があふれていた。
　豊はハッとした。
　そして思い出していた。
　明子に聞かされた、幸恵の話を。
　もしかしたら今、自分は幸恵の母親と、同じ事をしていたのかもしれない。
　いくら良い点数を取る事が必要でも、無理をしすぎてはいけない。
　豊は素直に「ごめん」と謝った。
　そして「ちょっと休憩しよう。テレビ見るかｗ」と言って、持っていたリモコンでテレビをつけた。
　この後は、音子に無理をさせない程度に、なんとか予定の勉強を終えた。

## 加速する時の流れ

　試験期間は、あっという間に終わった。
　音子も頑張ったし、豊にはある程度の手ごたえがあった。
　これならきっと、幸恵の父親は、考え直してくれるはずだと思った。
　マンションに帰ると、豊は既に日課となっている、トレーニングに汗を流す。
　こんな短期間のトレーニングで、そんなに大きな違いは無かったが、少しは体が引き締まってきたようだ。
　豊は大きな鏡の前で、ポーズをとって自己満足に浸った。
　リビングに戻ると、音子と幸恵が同じ服を着ていた。
　豊は一瞬、どっちがどっちか分からなかった。
　そんな豊に「さてぇ、私はどっちでしょう？」と、豊が音子だと思っていた方が質問してきた。
　当然音子だと思ったわけだが、喋り方が幸恵の喋り方だった。
　豊が少し動揺していると見るや、もう一方が「豊迷ってるのさ。おもしれぇ～」と笑いだした。
　今度は、幸恵だと思っていた方が、音子の喋り方をした。
　それでも、自分が間違えるはずはないと、豊は思ったとおりに対応する事にした。
「そっちが川上さんでしょ。音子のマネがうまいねｗで、こっちが音子くんだね。」
　豊はそう言って、最初に話しかけてきた方の頭をなでた。
「なんでわかったのさ。くやしいのさ。」
　頭をなでられながら、音子は残念そうだった。
　でもすぐに、嬉しそうな顔になった。
「今度はもっと頑張ろうねぇ。」
　幸恵は凄く楽しそうだった。
　そんな事をしていたリビングに、明子が入ってきた。
　楽しそうな雰囲気に、明子も心なしか笑っているようだった。
　また、音子がはしゃぎ、幸恵が楽しそうに相手しているのを、豊と明子は、少し離れたところから眺めていた。
「正直最初、音子様に代わりに学校に行ってもらうのは、躊躇しました。」
　はしゃぐ二人を見たまま、明子が喋りだした。
「そうでしょうね。」
　豊も正直、音子が学校に行くなんて想像できなかったし、まずい事になりそうだと考えていた。
「だけど、今の幸恵お嬢様を見ていると、良かったと思っています。バカに見られたら嫌だとか、変に思われたら恥ずかしいとか、音子様を見ていると、なんだかどうでも良くなってきますね。」

明子の気持ちは、豊も嫌と言うほど感じている。
こんなバカな音子でも、常識はずれな女の子でも、学校では人気者だし、音子の周りには笑顔があふれている。
そしてそれは、この部屋でもそうだ。
更に言えば、人の命も救っていたりする。
それが本当の事なのか、豊はまだ信じきれてはいなかったが、納得できるだけのものは、音子に見せてもらっている気がした。
「僕も同じ気持ちです。勉強で１番になっても、なんだか音子にはかなわない気がしますから。」
何がかなわないのか、何が負けているのか、豊には説明できない。
ただ、音子にはかなわないと感じた。
「幸恵もきっと、そう感じているみたいですよ。最近は記憶も安定してるんですよ。豊さんの事も、忘れずにちゃんと覚えていますし。」
そう言って豊をみる明子の顔は、凄くやさしい笑顔だった。
この時豊は、何か漠然と違和感のようなものを感じていたが、明子の笑顔がその感情を払拭していた。

夕食の後は、相変わらずストリートビューで、発着点探しをしていた。
地図にあるベクトルラインはまっすぐではないし、やや北寄りになっているものの、かなり東京都心へと近付いてきていた。
このペースだと、もう間もなく事故現場を特定して、いよいよ本格的に、命の恩人探しに入れそうだと、豊は思った。
だからパソコンに向かう時間はそこそこにして、テレビをつけてマッタリしていた。
その頃、幸恵の部屋には、のぞみが遊びにきていた。
といっても、音子のように暴れまわって遊ぶわけではない。
静かに部屋でタロットカード占いだ。
「どう？減ってる？」
のぞみの言葉に、幸恵は黙って首を振った。
そして幸恵の口から出た言葉は、信じられないものだった。
「確率が増えてるぅ。もうすぐ死ぬ確率９０％だって・・・」
それを聞いて、のぞみは声をあげた。
「なんで！もしかして、手術の可能性が増えてるの？」
そう、のぞみの言葉は、この時点では正しかった。
実は父親は、幸恵がおとなしくしていれば、特に何かをするつもりはなかった。
だが、最近学校に通い、やたら目立った行動をしている。
それも、常識離れした行動をだ。
それを知るに至った方法は、金の力と言えば、だいたい想像ができるだろう。

　だから、何か手を打たなければならないと考えていた。
　その為に、手術をする確率が上がっていた。
　幸恵が死へと向かう手術の確率が・・・
「行くの？」
　のぞみの質問に幸恵は、少し考えてからこたえた。
「行かないわけにはいかないよ。音子ちゃんの話を聞いたところ、私が音子ちゃんに色々教える事になってるみたいだから。」
　幸恵は笑顔だった。
「でも、手術からは絶対に逃げてね。」
　のぞみの顔は真剣で、不安があふれていた。
「うん、きっと・・・」
　幸恵とのぞみは、抱擁を交わした。
　もうすぐ尽きるかもしれない命のぬくもりを感じる為に。
　そしてこの時、幸恵は理解し始めていた。
　自分がどうして、生まれてきたのかを。
　何故、自分に瓜二つの音子が、未来からやってきたのかを。

　２２時になろうかという時間、豊と音子は、テスト勉強に疲れていたのか、テレビをつけっぱなしにしながら、豊の部屋で眠っていた。
　テレビでは、ドラマのエンディング曲が流れていた。
　俳優のキャスト名の中に「福田明子」の名前がある事に、豊は気づく由も無かった。

　この日、学校から帰ってくると、豊は明子から、手術の日時が決まった事を告げられた。
　来週、６月１７日の日曜日に手術が行われる。
　１６日に迎えの車が来るとの事。
　豊はショックだった。
　何故こんなに早く、手術をしなければならないのか。
　最近は記憶も安定してるし、学校でもちゃんとやっているはずなのに。
　テストは来週、順次返ってくると思うが、きっとそれなりの点数は取れているはずだ。
　テストの結果を見ずに、どうして手術を決めるのか。
　そしてその手術は、幸恵を死へと向かわせるものであるはずだ。
　此処で豊に、ある疑問が浮かんだ。
　音子が最初にジャンプした時、未来の幸恵に会っており、そこで幸恵から色々と話を聞いている。
　幸恵がその時の人だという保障はないが、こんなに似ている人がもう一人いるとも思えないし、名前も幸恵で一緒だ。
　だとしたら、こんなに早く、幸恵が死ぬ事はあり得ない。
　そして、実はもう一つおかしいと感じていた事があった。
　ベクトルラインが、思ったよりも早く東京に到着しそうな事だった。
　豊はすぐに部屋に音子を連れて行き、テーブルに地図を広げた。
「この町にいた人は、１０人か１１人前の人だったんだよね？」
「そうなのさ。たぶんそんなもんなのさ。」
　豊は、人数と距離のバランスが少しおかしい事に気が付いていた。
　だけどそれは、飛んでいる時間にも差があり、この後は詰まっているのだろうと判断していた。
　だけど普通に考えたら、このままいくと、ラインが東京湾へと抜けそうな勢いだった。
「じゃあココの前にはどれくらい？」
「いっぱいなのさ。幸恵も入れて１０人以上はいるはずなのさ。」
　もしこの音子の言葉が正しければ、同じ時間を飛んだとして、ほぼ中間地点になるはずだ。
　だけど、東京都心を事故現場とするならば、明らかにバランスが悪い。
「音子、世界線の移動中、その世界の中で、大きく移動した事はあるか？」
　豊は勝手に、世界線の移動は、休憩と飛躍を繰り返してやってきたと思いこんでいた。
　でも、生活に必要な知識は覚えていたりするし、それなりの時間、人間世界で生活した事になる。
　前半は人間の姿で、後半は猫の姿が多かった事を考えると、ますます前半の飛躍は、休みが多かったのではないだろうか。
　そして人間としての生活が長ければ、飛躍を休んでる時間が長ければ、地図上で大きく移動す

る事も十分にあり得る。
「自動車にも乗ったし、電車にも乗ったさ。」
　音子は、電車も自動車も、初めて乗る時から問題無く乗っていた。
　大きく移動があって当然じゃないか。
　そして、まだ１１カ月余裕があると考えていたが、それにも疑問がわいてきた。
　その時間軸での滞在が長ければ、その分時間は戻される。
　過去へ行くという事は、昇りのエスカレーターを、逆行して降りていくようなものだ。
　たとえば１日過去へ飛んで、その世界で１日過ごせば、結局出発点へと戻ってくる。
　豊は漠然と、１年より少ないとは思っていたが、半年くらいはあるものだと軽く考えていた。
　もっとしっかり、まずは日にちを特定するべきだった。
　音子の１年ってのを、そのまま信じたのが失敗だった。
　でもまだ、終わったわけではない。
「音子が事故にあったのは、いつ頃だ？寒かった？暑かった？」
　豊はその答えをなんとなく予想していた。
　きっと、今くらいの気候だろうと。
　予想は的中した。
「う～ん。今くらいだったさ。もう少し暑かったかもしれないのさ。」
　音子の言葉、これで豊はほぼ確信した。
　場所は東京都心ではなく、これから幸恵が向かう先、すなわち、手術が行われる場所に近い事を。
　豊は部屋に音子を残し、明子の部屋のドアをノックした。
「すみません。教えてください。手術は何処でやるんでしょう。」
　豊がそう言うと同時に、明子が部屋から出てきた。
　その顔には涙のあとが残っていた。
「もう、これ以上頑張っても、きっと無理よ。」
　明子は実は、幸恵を助ける為に、全てを暴露する事も考えていた。
　そうすれば、もしかしたら手術を回避する事ができるかもしれない。
　だけど、できない理由があった。
　それは愛する人を裏切る行為に相違なかったから。
　結局明子からは、病院の場所は聞き出せなかった。
　その後幸恵にも尋ねたが、場所は知らされていなかった。
　豊は自室に戻って考えていた。
　自分は、どっちを救いたいが為に、こんなに必死になっているのだろうかと。
　幸恵を救いたいのか、それとも音子の命の恩人を助けたいのか。
　答えは簡単で、両方助けたい。
　手術の日時だけは、既に分かっている。
　豊がやらなければならないのは、来週の週末までに、明子から手術をする病院を聞きだし、事

故現場を特定する事。
　そこから命の恩人を探しだし、会う事。
　そして、手術を中止させる事。
　豊には正直、自分にそれができるのか疑問を感じていた。
　そして、自分がそれをやって良いのかも。
　だけど音子を見ていたら、それはそんなに難しい事ではなく、絶対にやるべき事であると思えた。
　ベクトルラインからの場所の特定は、やはり思ったとおり、東京湾についたところで行き詰った。
　音子の話によれば、車でこの場所に移動してきてから、世界線を飛んだとの事だった。
　車に乗っていた時間の記憶はあやふやで、１時間から３時間くらいだったらしい。
　音子の事だから、きっと車の中ではしゃいでいたか、それとも眠っていたのだろうと豊は判断した。
　今できる事は、明子から場所を聞き出す事と、幸恵に、手術を受けないように説得するだけになっていた。
　豊は、毎日のように明子に手術の場所を尋ねた。
　だけど明子は「ごめんなさい」と、言うだけだった。
　幸恵には「手術には行かない方が良い」と言ったが「行かないと、音子ちゃんがこの世界にこれないんじゃないのかなぁ」と言われ、行く事を止めるられなかった。
　音子の話によると、未来で幸恵に会うのは、何処かのホテルの一室だったらしい。
　要するに、幸恵が何処かに出かけている時に会うって事。
　その可能性として見えているのは、手術の前日しかなかった。
　もし手術に行かないと言ったら、未来で音子と会わなくなる可能性が高い。
　そうなると、音子は今此処にいないだろう。
　だからせめて幸恵には「手術から逃げて」と言うしかなかった。
　すると幸恵は「のぞみちゃんにも同じ事いわれたぁ」と、笑顔をつくるだけだった。
　豊は（のぞみちゃんも、この手術が危険だって事、聞かされてるんだな）と、なんとなく思った。
　そして豊は、幸恵は逃げる気は無いのだと確信していた。
　結局何の進展も無いまま、時間だけが過ぎていった。
　気が付けばもう１５日、幸恵は明日出発し、明後日には手術を受ける事になる。
　それだけではない。
　命の恩人も見つけられず、豊は追い詰められていた。
　そんな平日最後の日、今日は幸恵が学校に行く事になった。
　最後の思い出作りのようで、豊は悲しくて嫌だったが、幸恵は凄く楽しそうにしていたので、何とか涙をこらえて共に登校した。
　学校での幸恵は自然だった。

と言うか、正に音子そのものだった。
毎日音子から学校での事を聞いていたからか、友達関係はもちろん、あらゆる事に問題がなかった。
椎名ですら、最初は音子だと思っていた。
豊も時々錯覚するほどだった。
でも、何故だか豊には違うと感じられた。
結局、豊と椎名以外で、音子が幸恵に変わっていた事に気づく者はなかった。
いや、椎名には幸恵であると教えたわけだし、豊は最初から知っていたわけだから、誰も気がついた者はいなかったと言えるだろう。
学校から帰宅すると、今までとは逆に、音子が幸恵を迎え入れた。
豊は音子を見て安心した。
音子と幸恵の違いが分かる事に安心した。
夕飯までは、いつものように音子と幸恵は、リビングで話をしていた。
豊はどうする事もできず、トレーニングルームで汗を流した。
本当は、少しでも事故現場を探す時間に充てたかったが、音子が「大丈夫なのさ。今は幸恵と話しするのさ」と言って、豊の誘いを断っていた。
実は音子も、この時もう、色々と理解し始めていた。
幸恵の存在。
そして幸恵との関係を。

夕食を終えると、豊と音子は結局、何処を探して良いのかわからず、ボーっとテレビを眺めていた。
もう後残す手段は、明日迎えに来る車の後をつけるか、幸恵が到着してから、場所を連絡してもらうしかない。
そこから事故現場を探しだし、命の恩人を見つけられるかどうかは疑問だが、もうそれしかなかった。
その頃、幸恵の部屋にはのぞみが訪れていた。
いつもと同じように、タロットカードを並べていた。
「どう？」
のぞみが幸恵に尋ねる。
それに幸恵は笑顔でこたえた。
のぞみは幸恵の笑顔を見て、良い結果が出たのだと判断した。
「死ぬ確率がゼロになったの！良かった！」
だけど幸恵は、笑顔のまま首を横に振った。
「えっ？じゃあどういう事？」
のぞみは一転不安顔になり、再度尋ねた。
すると幸恵は、タロットカードを一枚眺めてから、のぞみの目をみてこたえた。

「どうやら、占い、わからなくなったみたいなのさ。続けてやっても、結果はバラバラなのぉ。」
　それでも幸恵には、悲観するところは見られなかった。
　それどころか、とてもスッキリした表情をしていた。
「きっと、大丈夫だよぉ。だから、ついてこなくていいからねぇ。」
　そう言って幸恵は、のぞみの頭をなでた。
　のぞみはただ、幸恵の幸せな未来を願うだけだった。

　時間は夜の２２時になろうとしていた。
　豊と音子は、まだボーっとテレビを見ていた。
　豊は、明日の学校は休む事に決めている。
　車の後をつけなければならないと判断していたからだ。
　でも心の中では、もう無理かもしれないと弱気になっていた。
　音子を見ると、こんな追い詰められた状況でも、テレビを見て楽しそうだった。
　（本当に他人任せだな。やる気ねぇだろｗ）
　豊は苦笑いした。
　テレビでは、ドラマがクライマックスを迎えていたが、豊はちゃんと観ていなかったから、特に面白いものではなかった。
　そんなドラマも間もなくエンディングとなった。
　スタッフロールが流れ始める。
「今日は早く寝ようか。」
　豊はリモコンを探した。
　すると音子が、いきなり声を上げた。
「ははは～福田明子だって、同じ名前なのさ。」
　その言葉に、豊はハッとテレビの画面を見た。
　俳優のキャスト名のことろには「福田明子」の名前があった。
　豊は音子に尋ねた。
「明子さん、テレビに出てたの？」
　当然、出ているわけもない。
　音子は同じ名前だと言っていた。
　冷静に音子の言葉を聞いていたら分かる事だが、豊は何かが引っかかって、冷静さを欠いていた。
「出てないのさ。同じ名前だって言ったのさ。」
　音子の言葉に、豊は少し冷静になった。
　そこで考えた。
　何故自分は、こんなに焦っていたのだろうか。
　そうだ、何かがひっかかったんだ。

今までの、明子さんとの会話を思い出した。
そう言えば、明子さんの会話で、何度か何かに引っかかった事があった。
豊はハッと気が付いた。
思い出し考える中で、全てが豊の頭の中でつながった。
「ちょっと明子さんと話してくる！」
豊は音子にそう言うと、急いで明子の部屋へと向かった。
音子は笑顔で手を振っていた。
明子の部屋のドアの前につくと、いつものようにドアをノックした。
このところ、毎日のようにやっていた行為だ。
当然中からは「ごめんなさい、もう放っておいて」と、いつもと同じような返事が返ってきた。
でも今日は、別の話をしにきていた。
「今日は、ちょっと別の話をしたいんです。」
しばらく無言の時間が続いた。
豊はそのままドアの前で待った。
するとゆっくりとドアが開いた。
「何？」
そう言う明子の顔は、明らかに１週間前よりもやつれているように見えた。
その顔を見て、豊は自分が此処に来た理由を忘れかけた。
今この人に、聞いても良いのだろうかと。
でも、聞かないといけない。
豊はハッキリと言った。
「明子さん、あなたは幸恵さんの、お母さんなんじゃないですか？」
明子の表情は、驚きの表情にかわった。
そしてすぐに両手で口元を隠したかと思うと、涙が両目から流れ出ていた。
そう、幸恵の母親の事を聞いた時「おそらく死んだ」と明子は言っていた。
そして一度、幸恵の事を「幸恵お嬢様」ではなく「幸恵」と呼んでいた。
記憶障害の原因が母なら、真っ先に忘れるのは、母の事なのではないかと豊は考えた。
何度も忘れられるうちに、明子は母ではなく、お世話係として、別人になる事にしたのではないだろうか。
名前が、芸能人の名前と同一である事から、これもきっと勢いで付けた偽名。
名前を聞かれて、その時に見ていたテレビの中から、咄嗟に選んだものだろう。
豊は、泣いている明子を見て、幸恵の母親であるのだと確信した。
「明子さん、手術の場所、教えてください。きっと大丈夫ですから。」
豊は更に考えていた。
父親は、明子が母親である事を知っていて、今も時々連絡をとっている。
そして生活を支えている。

明子さんは以前「愛する人を裏切れない」と言っていた。
確かに浮気がばれる事はまずいだろうけど、明子が幸恵の父を、まだ愛しているのと同じように、幸恵の父もまた、明子を愛しているのではと。
そんな人が、幸恵を殺そうなんて考えるはずがない。
それに、手術日をわざわざ休みの日にしている事からも言える。
殺すつもりなら、学校の事など配慮する必要がない。
豊は、きっとどこか、ボタンの掛け違えがあったのだろうと思った。
でも、明子の言葉は、豊の考えを揺るがすものだった。
「何処で手術するのか、聞かされてないのよ。」
場所を聞かされていない。
すなわち、何かを隠しているって事なのか。
やっぱり、自分の考えは甘かったのか。
「そんな・・・」
豊は絶望しかけた。
でも、そんな訳は無いと、豊は自分に言い聞かせた。
「あっ！手術する病院。きっと横浜中央総合病院だわ。」
明子の言葉に、豊にはわずかな光が見えた気がした。

　１６日土曜日の朝、幸恵は明子と共に迎えの車に乗って、早々にマンションを発った。
　音子に聞いたところ、その際の幸恵からは、死への予感はなかったと言う。
　だけど「大丈夫なのさ！」と言う音子の笑顔が、少し悲しく見えた。
　気のせいかもしれないが、豊は少し気になった。
　命は大丈夫だけれど、何か不安があるのか。
　それとも、本当はまだ、死への予感は払拭されていないのか。
　どちらにしても、此処から先は、音子の言葉を信じて、幸恵の無事を願うしかなかった。
　明子がついているのだから、きっと大丈夫だと自分に言い聞かせた。
　そしていよいよ、音子の本当の目的を達成させる為のタイムリミット、運命の日はおそらく明日だ。
　昨日夜、明子に聞かされた病院、そしておそらく今日泊まりそうなホテルにベクトル線を引いてみると、綺麗にラインが一致した。
　病院の周りをストリートビューで調べたら、すぐに事故現場が見つかった。
　豊と音子は、今日は元々学校を休むつもりだったし、朝から命の恩人探しをする為に横浜へと向かった。
　昼ごろ、事故現場付近をウロウロしてみたが、それらしい人物は見つからない。
「そんなに簡単に見つかるわけもないか。」
　豊のそんな言葉にも、音子は豊の腕にぶら下がりならが、楽しそうにキョロキョロと辺りを見回していた。
「あっ！」
　不意に音子が声をあげた。
　豊は、命の恩人が見つかったのかと思った。
　音子が指差す先を見ると、小さな公園があった。
　どうやら見つかったわけでは無かったようだ。
　豊は音子に引かれるがまま公園に入ると、そこには沢山の猫がいた。
　走りまわる猫、昼寝をする猫、何かを食べている猫、色々いた。
　この中に、人間になる前の音子がいるのかと思ったが、それらしい三毛猫はいなかった。
　もしかしたら、この猫たちは、猫だった頃の音子の友達なのかもしれないと、豊は思った。
　それと、何故だかわからないが、少し懐かしい感じがしていた。
　そのまま歩いて公園を抜けると、場外馬券売り場があった。
　豊は競馬の事はよく知らないが、音子が興味を示していたので、入り口付近のモニターを眺めていた。
　すると音子が「おおｗこの馬覚えているのさ。一着でゴールするのさ。」と、聞き捨てならない事を言ってきた。
　未来から来た音子だ。

　その音子が見たって言うなら、それが一着でくるはずである。
　豊は少し期待して音子に尋ねた。
「じゃあ、二着はどいつがくるんだ？」
　すると音子は少し「う～」とうなりながら画面を眺めていたかと思うと、突然「こいつなのさ！」と声をあげた。
　馬の番号で言うと、４番と１３番だった。
　両方縁起の悪い数字だったが、騎手の名前には「豊」の文字と「幸」の文字が入っていたので、豊は少し買いたくなった。
　本当は高校生が買っていい物ではないが、豊はコッソリと「馬単４－１３」を千円分買った。
　買った後で配当を見たら、二千倍を超えていたので、少しドキドキしてモニターを見ていたが、音子が腕を引っ張るので、結果を見る前にこの場を離れた。
　この時豊と音子は、ほんの少し離れたところにいた、命の恩人の姿に気がつく事はなかった。
　結局、１日かけて歩きまわったが、命の恩人と出会う事はなかった。
　残された手段は、当日その場で待ち伏せし、その男を助ける事だけ。
　そしてその際、きっとこの世界の音子も出てくるはずだ。
　そちらも助けなければならない。
　豊は此処まで、そんなに深くは考えていなかったが、命の恩人を助けたら、音子は助けられず死ぬ事になるのだろうか。
　それとも、音子は人間になれないまま、姿を消す事になるのだろうか。
　やっぱり人間になって、豊の世界線にくるのだろうか。
　何事もなかったとしても、音子は未来に帰る事になるのだろうか。
　正直どうなるかなんて、豊にはわからない。
　だけどきっと、明日が終われば、音子とはお別れする事になるのだろう。
　そう考えると、豊は凄く寂しい気持ちになった。
　横にいる音子を見た。
　音子は、キョトンとした顔で豊を見つめた後、満面の笑みを浮かべた。
「豊、ありがとうね。」
　そう言って、白い歯を見せた。
　豊はその音子の顔を見て、凄く照れくさい気持ちになった。
　同時に、涙があふれてきた。
　豊は涙を見られたくなくて、音子を抱きしめた。
「まだ、終わってないよ。明日、助けような。」
　豊の言葉には、少し涙が混じっているようだった。
　だけど、とても暖かく、とても力強かった。
　音子は豊の顔のすぐ横で「うん」と、一言だけこたえた。

　豊と音子は、公園のベンチに座って、星空を見ながら話をしていた。

と言っても、星はそれほど多くは見えない。
本当は、無数の星が輝いているはずなのに。
自分の周りには沢山の人々がいるけれど、実はそのほとんどが見えていないのだろうなと、豊は思った。
豊と音子の話は、たわいない話ばかりだった。
二人とも、明日の来るべき別れについて、話す事はなかった。
やはり音子には寂しい顔は似合わないから。
いつのまにか、二人は公園のベンチで寄り添い眠っていた。
そしていよいよ、運命の日の朝を迎えた。

　豊と音子は、明け方まで公園のベンチで喋っていた。
　だから当然こうなるわけで・・・
「音子早く！間に合わなくなる！」
「豊待つのさ。別に取って食ったりしないのさ。」
　音子はまだ寝ぼけていたが、豊は無理やり手をひっぱって走った。
　今日で音子とはサヨナラなのかもしれないが、いつもと変わらない感じに、豊は少し嬉しかった。
　そんな感情の中でも、豊は必死に走りながら計算していた。
　音子は、事故の時間に関して「太陽が一番上に近かったのさ」なんて言っていた。
　だから時間は１１時～１３時くらいだと判断できた。
　今の時間が１０時４０分だから、後２０分以内には駆けつけたい。
　初めての街だから、道が分からなくて迷う可能性もある。
　ギリギリで焦っていた。
　だけど、意外にあっさりと、豊たちは目的地に着いた。
　携帯電話の時計は、まだ１０時５２分だった。
　思ったより早くついた事に豊は違和感を覚えたが、迫りくる運命の時間に、そんな事はすぐに忘れていた。
　道路沿いの歩道に立って、豊は音子と二人、辺りを警戒した。
　予想としては、まずこの世界の音子が、三毛猫の姿で車道に飛び出すはず。
　そしてそれを助ける為に、男が車道に出ていくはずだ。
　要するに、三毛猫が車道に飛び出す前に、三毛猫を捕まえるのが、一番良い方法と思える。
　もしそれができない場合は・・・
　豊はそれを音子に話そうとしたら「大丈夫なのさ」と、豊の手をつかんだ。
　豊にはなんとなく「その時は私に構わず、命の恩人を助けて」と、音子が言っているように思えた。
　携帯電話の時計は既に１２時を回っていた。
　だが、一向に何も起こる気配は無かった。
　そうそう事故なんて起こるものではない。
　それにココは見渡しがよく、車が接近してくればすぐにわかる。
　だから注意すべきは、車が近づいてくる時だ。
　その前に飛びだす事以外に、事故の原因なんて考えられない。
　そう思って警戒していると、一人の女性が道路の真ん中に歩み出るのが見えた。
　幸恵だった。
「なんで川上さんが？！」
　幸恵の表情は、爽やかな笑顔だった。

幸恵はもう、気が付いていた。
自分が、どういう人間なのかを。
そして何故、こんなに音子に似ているのかを。
幸恵は、音子がこの世に存在する為の、可能性の一つとして、選ばれた人だったのだ。
音子が猫から人間ならなければ、過去へとやってこなければ、今日、病院で死ぬはずだった。
でも、選ばれた。
音子が、最初から人間だったと言う可能性として。
いくら中心世界の中心人物が認めたとは言え、猫が人間になる現実を、他の全ての世界線で認められる可能性は、限りなくゼロに近い。
となると、最初から人間だったというところに落ち着く事になる。
今幸恵は、この世界の音子になろうとしていた。
しかし、幸恵は、音子の事を大好きになっていた。
自分が音子になると、音子はどうなるのか。
きっと、猫から人間になった音子は消滅してしまう。
だから、自分が自動車にはねられて死ねば、人間だった可能性が失われ、猫が音子になった現実しか残らなくなり、音子がそのまま生きられると考えた。
幸恵は、自ら自動車にはねられるつもりだった。
そしてそんな気持ちは、豊にもなんとなく伝わっていた。
豊は、すぐに向かってくる車がないか確認した。
すると一台、猛スピードで近づいてくるのが見えた。
「豊これだよ！」
音子の言葉に、豊は幸恵に向かって走り出した。
とにかく今は、なんとか幸恵を助けなければ。
きっと、幸恵のこの行動には意味があり、音子と何か関係があるのだろう。
でも、誰かの為に犠牲になってはいけない。
豊が振り返り、後ろから来る車を見ると、運転手が突っ伏しているのが見えた。
居眠りか、それとも体調に異変があったのか、そんな事は分からない。
だけど、その車が止まらずに突っ込んでくる事だけは、想像するに容易かった。
再び豊は幸恵の方を見た。
すると一人の男性が、幸恵を助けようと思っているのか、幸恵に向かって走っているのが見えた。
豊はその人を見て、何故だかわからないが無意識に叫んでいた。
「お父さん！！」
豊は、自分で言った言葉に驚いた。
すぐに豊の頭の中に、色々な記憶が駆け巡る。
そして、公園で懐かしさを感じた理由が分かった。
さっき此処に来る時に違和感を覚えた理由も。

知らない街を走っているのに、妙にスムーズに此処までこれたのは、昔住んでいた街だったからなんだ。
人間、５歳までの記憶は残らないとか言われるが、無意識の中に残っているものなのだなと、豊は思った。
豊の父は、豊の声に振り返り、車道に出てすぐのところで立ち止まっていた。
その口からは、声には聞こえなかったが「ゆたか」と言っているように見えた。
豊にとっては、本当の父親との十数年ぶりの再会ではあったが、今はゆっくり再開に何かを感じている場合ではない。
これで、音子の命の恩人であった、豊の父の命は救われるはずだ。
今は幸恵を助けなければと思った。
「川上さん！！逃げて！！」
豊は走りながら声を上げるが、幸恵はただ、豊を笑顔で見るだけだった。
その時、するすると豊の足元を走り抜ける影があった。
その影は、すぐに車道の真ん中へと出た。
そして、幸恵を守ろうというのか、迫りくる自動車へと、体を向けた。
それはまぎれもなく、この世界の音子だと、豊には理解できた。
音子と出会った時、何度も見た音子の猫の姿。
間違えるはずが無かった。
そしてその三毛猫は、幸恵よりも１０ｍほど手前で、迫りくる自動車へと体を向けた。
この猫が車にはねられると、音子は死ぬのだろうか。
でも、三毛猫は幸恵を守ろうとしているようだ。
どうする！？もう時間がない！！
豊が心の中で叫んだ時、音子が車道の真ん中へと飛び出した。
豊を追い越して行く音子が、走りながら振り返った。
「猫だった音子も、忘れないでほしいのさ。」
音子の顔は、笑っていたけれど涙が流れていた。
（どういう事だ？猫だった音子って・・・もしかして川上さんが、人間だった音子って事なのだろうか。でも・・・）
「川上さんは音子じゃないよ！！」
音子は、この世界の音子だった三毛猫を、抱きかかえようとした。
もう、間に合わない。
豊は無意識のうちに車道へと飛び出していた。
音子が三毛猫を抱きかかえた。
それを駆け付けた豊が抱きしめた。
その時、振り返る音子の顔は、号泣していた。
でも豊には、笑顔で「ありがとう」と言っているように見えた。
そこに、豊の背中から、車が突っ込んできた。

豊は音子と三毛猫を抱えたまま、幸恵の前までとばされ、背中から落ちた。
車は、進路を変えて、電信柱に衝突し、動きを止めた。
道路には、豊の血が、沢山流れていた。
豊の視界には、音子と三毛猫が、自分を見て泣きながら、何かを言っているのが見えた。
だけど、意識がハッキリせず、声は聞こえなかった。
向こうには、ゆっくりとこの場を立ち去る、幸恵の姿が見えた。
父親が心配そうに、駆けつけてきた。
みんなの無事が確認できて、豊は「良かった」と思った。
豊の意識は、そこで途切れた。

## エピローグ

　僕は、病院のベッド上で目を覚ました。
　傍らを見ると、母親と、父親の姿が見えた。
　父親は、音子の命の恩人である、死んだと言われていた方の父親だった。
　ビックリしたけど、やっぱり生きていてくれてうれしかった。
　母親も父親も、みんな心配そうに僕を見ていた。
　だから、大丈夫だと僕は言った。
　するとみんな、笑顔になった。
　母親だけは、泣いていたかな。
「先生のおかげです」なんて言いながら、先生の手をとっていた。
　なんでも、日本一の先生だったそうだ。
　偶々別の予定で、横浜中央総合病院に来ていたらしい。
　後で聞いた話だけど、幸恵の記憶障害の検査に来ていたとか。
　やっぱり幸恵のお父さんは、娘の事を大切にしていたんだ。
　本当に良かった。
　僕の怪我は、かなりひどかったらしい。
　出血も多くて、輸血用の血液が足りなくて、幸恵が沢山提供してくれたとか。
　でも後で聞いたら、幸恵はそんな事していないって。
　あの日、気がついたら公園で寝ていたとか。
　という事は、音子の血が、今も僕の体の中に流れているって事か。
　なんだか微妙な気分だ。
　父親とも話をした。
　椎名にしても、幸恵にしても、両親の事で不幸になりかけていたわけだから、僕は別れた理由が気になった。
　聞くと離婚の原因は、経済力の無さだとか。
　画家を目指していて、夢をとるか家族をとるかで悩んだらしい。
　結局、夢を選んだわけだけど、僕は別に恨んだりはしていない。
　今の義父も好きだし、父親のおかげで、音子と出会えたわけだからね。
　逆にお礼が言いたいくらいだよ。
　それから、三杯も、椎名も、菜乃も、そして幸恵も、お見舞いに来てくれた。
　でも、音子はいなかった。
　どうやら、全ての人の記憶から消えているらしい。
　最初に、音子がもういないと知った時は、涙が止まらなかった。
　なんで音子の事知らないのって言っても、頭のうちどころが悪かったとしかみられなかった。
　僕は何度も何度も、音子の事を話したのに、みんな思い出してくれなかった。
　それで少し、退院が遅れた可能性もあるかな。

退院の日は、みんな退院祝いをしてくれた。
幸恵宅に集まって楽しかったけど、音子がいなくてやっぱり寂しかった。
でも、あの運命の日に助けた三毛猫がいたおかげで、なんとなく音子がいるみたいだった。
いや、この三毛猫は、まぎれもなくこの世界の音子なんだけど。
当然名前は「音子」で押し通した。
「ニャー！」って挨拶すると、ちゃんと「ニャー！」って挨拶を返してくれる。
最初は何度も挨拶して、その都度涙がでてきたっけ。
それからすぐに僕になついて。
今でも手を伸ばしてくる姿に、何度も音子の姿がオーバーラップする。
そのたびに、この三毛猫は、やっぱり音子なんだと思う。
それから、のぞみちゃんと二人で喋る機会があって、正直驚くべき事実を聞かされた。
「私が三毛猫だって言ったら信じる？」なんてきかれて、僕は「信じる」ってこたえたんだ。
すると「私、昔幸恵に飼われいた三毛猫だったんだ。」だって。
そして「でも１１年前に死んで、幸恵が心配だから人間に生まれ変わりたい、そして一緒にいたいって願ったんだ。」って。
それで、佐藤家の長女として生まれたって。
女の子が欲しかった佐藤家は大喜びだったとか。
でも、子供の頃から賢くて、１歳の頃には言葉が喋れるようになっていたとか。
三杯が「もう少し大きくなるまで、喋らない方が良いよ。」なんてアドバイスしたとか。
それで５年前に幸恵に会いに行って、仲良くなったとか。
まあ元々仲良しだったわけだから、当然と言えば当然か。
でもそれだけなら、そんなに驚くべき事でも無かったんだけど、その後のぞみちゃんの口から「音子」の名前がでてきたんだ。
覚えてるの？って聞いたら、覚えてないって。
だけど、知ってるって。
意味わからないよね。
実は、のぞみちゃんは、音子が世界線の移動ができたように、のぞみちゃんの世界ののぞみちゃんは、他の世界線の自分と話しができるんだって。
それで別の世界線の自分から色々聞いて、色々行動していたとか。
今ののぞみちゃんは覚えてはいないけど、聞いた話を教えてくれた。
三杯が僕と友達だったのは偶然らしいけど、僕と最初に会った時、僕が世界線の中心人物で、音子が僕の所に来た事を悟っていたらしい。
そして幸恵の命が短くて、なんとかしなければならない事も。
本当は、のぞみちゃん的には、音子の望みがかなえられないまま、僕のお父さんが事故にあう事が一番良かったとか。
でも、それを幸恵が望まなくて、別の方法を考えた。
それが、僕に徹底的に関わる事。

そして音子に関わる事。
転校初日にやたらと幸恵が話しかけてきたのは、のぞみちゃんの提案だったとか。
でも上手くいかなくて、今度は猫ウイルスを使って、僕にメッセージを送ったとか。
なるほど。
あのメッセージの三毛猫ってのは、のぞみちゃんだったのね。
で、途中まではうまくいっていたんだけど、音子の存在がどういうものなのか気づいた時、また流れが変わったとか。
難しいので端折って言うと、音子は、幸恵の半身であり、三毛猫の音子の半身でもあった。
で、どちらを最終的に選ぶかって事になっていたとか。
どちらかがあの日に死んで、生きた方が、音子って事。
幸恵は、生まれた時から人間だったって可能性から生まれた。
三毛猫の音子は、やはり猫が人間になったって可能性。
でも、猫が人間になるなんてのは、いくら僕が信じても、他の世界線が受け入れられない。
だから、最初から幸恵が生き残る可能性の方が高かった。
だけど、僕のお父さんを助けると、その可能性の前に音子が死んじゃって、幸恵も三毛猫の音子も、運命の日に死んじゃう展開もあり得たわけだ。
結果は、まあご存じのとおり、最高の結果と言えるのかな？
幸恵も、三毛猫の音子も助かったのだから。
お互いがお互いを犠牲にしても、相手を生かそうとしていたその気持ちの勝利だね。
僕が酷い怪我を負ったのは、これは仕方が無い。
誰かが車にひかれる事は、どうしても必要だったみたいだから。
大きく世界を変えるのは、難しいって事かな。
でも、僕としては、やっぱり音子がいて欲しかった。
いや、いないわけじゃない。
幸恵はこの世界の音子だから。
幸恵の中には、音子のほとんどは生きている。
でも足りないんだ。
足りないんだよ。
僕の携帯電話には、３枚の写真が残っている。
２枚は、音子と２週間ちょっと一緒に暮らした、あのボロアパートの部屋の写真。
この部屋で過ごした記憶だけは、今の幸恵にはない。
そしてもう１枚。
羽の生えた三毛猫の写真。
あの裸の写真が、いつの間にかこんな事になっていた。
でも、僕には同じに見える。
前の裸の写真も、この羽の生えた三毛猫も、僕にとっては同じ音子に。
この写真、本当に消さなくて良かった。

この写真だけが、音子がこの世界に存在した確かな証拠だから。
今では夢のように感じる、音子と過ごした日々が、現実だったと思える写真だから。
そうそう、音子が未来から来たって証拠もあった。
この馬券。
当たっていたんだよね。
２００万円。
こんなの、未来を知らなければ、僕が当てられる馬券じゃないでしょ。
でも、３カ月が過ぎてるから、もう換金はできない。
惜しい事をしたって思うけど、換金できなくて良かったとも思う。
これも、音子がいた証だから。
他には、僕の体の中に流れている血液。
これも音子が残した物って言えるのかな。
僕としては、後はみんなの心の中に、少しでも何かが残ってくれていれば良いなって思う。
残った何かが、少しの心の変化を生み、小さな行動を喚起して、やがて大きな幸せに繋がったら。
あなたの住むあなたの世界は、あなたの望みで、何かが変わる。
素晴らしい世界だと思えば素晴らしく、駄目だと思えば駄目な世界。
前向きに生きれば、きっとまた、音子に出会えるに違いない。
もしかしたら、目の前の三毛猫が、音子になる事も・・・

僕は、今日も幸恵と一緒に学校に通う。
「あれ？電車止まっちゃったよ？」
「きっと信号が赤なのさ。」
「えー？幸恵、ちょっと電車降りて、後ろから押してきてよ！」
「うん、分かったのさ。って、できるかー！」
僕は今、幸恵と笑顔です。

## 著者より

飛猫を読んでくださってありがとうございます。
この作品は、絶対に良い話になると思って、かなり力をいれて書き始めたものです。
でも後半、別れのシーンを入れようか、それとも別の形にするか、悩みました。
結局、別れのシーンは悲しいので、こういう終わりになりました。
というか、キャラが勝手に動く形で書いていたら、こうなってしまったわけですがｗ
それでも、それなりに感動できる終わりだったと思います。
後半、もう少しじっくり書ければ良かったかな。

２０１１年　秋華

# 飛猫

http://p.booklog.jp/book/49256

著者：秋華
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kitaneko33/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/49256

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/49256

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.